

みや の ひがし
宮 ノ 東 遺 跡

Miyanoohigashi Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 60

－本文編－

2008

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成11年度から実施して参りました。本書には、平成15・16年度に実施した宮ノ東遺跡発掘調査の成果を記載しております。

遺跡に立つと、目の前には一つ瀬川、遠くに日向国府・国分寺跡（現在の西都市街）を見ることがあります。また、背後の台地上には県内第二の大古墳群である新田原古墳群（国指定史跡）が広がる等、遺跡一帯は古くから社会・文化の中心であったと容易に想像されます。発掘調査は膨大な遺構数により困難を極めましたが、中でも旧石器時代の生活の様子、縄文時代後期の大量かつ特殊な遺物、弥生時代中期から後期にかけての集落、古墳時代から古代の数百軒からなる超過密集落、古代の大規模建物群と自然災害からの復旧、中世集落と墓域、近世より現代まで継続した土地利用の変遷、第二次世界大戦に伴う防空壕等、多様かつ連綿とつながる人の営みを知ることができました。

このように、本遺跡からは多くの成果を得ることができ、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 清野 勉

例　言

- 1 本書は、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴い、平成 15～16 年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した西都市宮ノ東（みやのひがし）遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。
- 2 本書は、『本文編』・『図面編』・『図版編』の 3 分冊ならびに『付図・全体遺構分布図』で構成される。
- 3 発掘調査は、日本道路公団の委託により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成 17 年 10 月 1 日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本書では日本道路公団として記載する。
- 4 宮ノ東遺跡の概要について既に下の文献で紹介しているが、報告内容については本書が優先される。
 - ・宮崎県埋蔵文化財センター-2004『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 91 集
 - ・宮崎県埋蔵文化財センター-2005『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書V』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 111 集
- 5 現地での遺構図作成は藤木 聰・福田光宏（全体）、高木祐志（C 区）で行った。石組遺構の実測は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 6 現地での写真撮影は竹田享志・今塙屋般行（全体）、安藤正純（B2 区）、高木（C 区）で行った。空中写真撮影は有限会社ふじたに委託した。
- 7 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 8 遺構デジタル製図は、藤木・日高優子が作業員の補助を得て行った。遺物実測は、土器類を今塙屋、縄文時代以降の石器類を藤木、旧石器・金属製品・ガラス製品を竹田が行い、それぞれ整理作業員の補助を得た。中世以降特に陶磁器類の分類については、塙田孝博の協力を得た。陶磁器実測の一部については国際航業株式会社に委託した。遺物デジタル製図は、一部を除いて土器類についてはアイシン精機株式会社・国際航業株式会社に、石器類については株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。金属製品・ガラス製品については、竹田が作業員の補助を得て行った。
- 9 遺物写真撮影は土器類を今塙屋、それ以外を竹田が行った。大判写真については、独立行政法人奈良文化財研究所牛嶋 茂氏の助言のもと、今塙屋・竹田が撮影した。
- 10 自然科学分析として、放射性炭素年代測定・種実／樹種同定を株式会社古環境研究所に委託した。その成果報告については、藤木が株式会社古環境研究所と協議・編集して掲載した。金属製品の保存処理は竹田が行い、銅鏡の保存処理のみ株式会社吉田生物研究所に委託した。
- 11 本文の執筆は分担して行い、文責は目次ならびに各文末に示した。なお、各時代の遺構ならびに総括に関しては、竹田・今塙屋・高木と検討の上、藤木が執筆した。
- 12 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書全体は藤木が編集した。
- 13 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文編 目次

第Ⅰ章	はじめ	1	第Ⅴ章	先史調査の記録(区)	83
第1節.	開拓に至る経緯	藤木	第1節.	周縁1の調査	藤木・高木
第2節.	調査の組織	藤木	第2節.	その他の調査	藤木・高木
第Ⅲ章	過去の地理的・歴史的環境	2	第Ⅵ章	自然科學的分析	
第1節.	地質的環境	藤木・高木	第1節.	地質材料による分析	
第2節.	歴史的環境	今塙屋・竹田	第2節.	1. 植種決定の方法と対象試料の内訳 2. 植種決定結果とその根拠 3. 放射性炭素年代測定の方法と結果 4. 炭化物の植種決定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第Ⅳ章	調査・整理作業の方法と経過	6	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第1節.	被災調査の方法と経過	藤木	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第2節.	発掘調査の方法と経過	藤木	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第3節.	整理作業の方法と経過	藤木	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第4節.	通報等の用語について	藤木・今塙屋・竹田	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第5節.	普及活動	藤木	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第Ⅶ章	先史調査の記録(八区・B1区・B2区)		第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
第1節.	旧石器時代の調査	14	第2節.	1. フローテーションの目的とながれ 2. 植種の同定・放射性炭素年代測定の実施 3. 植種決定結果とその根拠 4. 放射性炭素年代測定の方法と結果 5. 煙灰の同定・年代測定の総合評価	古遺構研究所
1. 基本土層	藤木		第1節.	旧石器時代	藤木
2. 但地形の復元	竹田		第2節.	縄文時代	藤木
3. 調査	竹田		第3節.	弥生時代	藤木
4. 石器	竹田		第4節.	古墳時代	藤木
第2章.	縄文時代の調査	16	第5節.	古代	藤木
1. 通報	藤木		第6節.	中世	藤木
2. 土器	今塙屋		第7節.	近世	藤木
3. 石器	藤木		第8節.	近現代	藤木
第3章.	弥生時代の調査	20	第9節.	水をめぐって	藤木
1. 通報	藤木				藤木
2. 土器	今塙屋・藤木				藤木
3. 石器	藤木				藤木
4. 金属器	竹田				藤木
第4章.	古墳時代の調査	22	付	土器注記一覧	藤木・今塙屋
1. 通報	藤木				78
2. 土器	今塙屋・藤木				
3. 石器	藤木				
4. 金属器	竹田				
第5章.	古代の調査	34	経年表		
1. 通報	藤木		第1表.	遺構一覧表	竹田・今塙屋
2. 土器・陶器	今塙屋・藤木		第2表.	既立往跡物一覧表	今塙屋
3. 石器	藤木		第3表.	即石器編目表	竹田
4. 金属器	竹田		第4表.	縄群編目表	竹田
第6章.	中世の調査	44	第5表.	土器・陶器類編目表	今塙屋
1. 通報	藤木		第6表.	土器・陶器類目表	今塙屋
2. 土器・陶器	今塙屋・藤木		第7表.	陶器類編目表	今塙屋
3. 石器	藤木		第8表.	土器片2次品・土製支輪編目表	田中・今塙屋
4. 金属器	竹田		第9表.	土製容器表	今塙屋
第7章.	近世の調査	46	第10表.	土製品・石製品編目表	今塙屋
1. 通報	藤木		第11表.	石器・石製品編目表	今塙屋
2. 土器・陶器	今塙屋		第12表.	金銀器類編目表	竹田
3. 石器	藤木		第13表.	金銀器類目表	竹田
4. 金属器	竹田		第14表.	ガラス器・漆器編目表	竹田
第8章.	近世以前の調査	48	第15表.	五輪塔塔基部表(1) 宝珠輪	高木
1. 通報	藤木		第16表.	五輪塔塔基部表(2) 火輪	高木
2. 造物	今塙屋		第17表.	五輪塔塔基部表(3) 水輪	高木
3. 石器	藤木		第18表.	五輪塔塔基部表(4) 地輪	高木
4. 金属器	竹田		第19表.	駒骨・角骨・牛骨編・貝一覧表	高木
第9章.	近世以前の調査	51	第20表.	樹脂類目表	古遺構研究所
1. 通報	藤木		第21表.	炭化材年代測定結果一覧表	古遺構研究所
2. 造物	今塙屋・藤木・竹田		第22表.	穀實一覧表	古遺構研究所
3. その他			第23表.	穀實年代測定結果一覧表	古遺構研究所
4. 通報	藤木				
5. 造物					
6. 2-1. 土器類・石器類	今塙屋				
7-2. 土器・石製品	藤木				
7-3. 金属器	竹田				
7-4. 自然物	藤木				
第10章.	集落空間に関する聞き取り調査	53			
1. 目的	藤木				
2. 聞き取り成績	藤木				
3. 他の物の記録					
4. 通報					
第Ⅴ章	中世前半の調査	55			
1. 通報	藤木・高木				
2. 土器・陶器	今塙屋				
3. 石器・石製品	藤木				
4. 金属器	竹田				
第2章.	中世後半～近世前半の調査	57			
1. 通報	藤木				
2. 土器・陶器	今塙屋				
3. 石器・石製品	藤木				
4. 金属器	竹田				
第3章.	近世後半～近現代の調査	61			
1. 通報	藤木・高木				
2. 土器・陶器	今塙屋				
3. 石器・石製品	藤木				
4. 金属器	竹田				
第4章.	その他の遺物	62			
1. 土器・陶器・石器	今塙屋				
2. 石器・石製品	藤木				
3. 金属器	竹田				

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道は、北九州市を起点とし福岡・大分・宮崎・鹿児島4県の東海岸部を南北に走る約436kmが予定され、宮崎県では延岡～清武間について平成元年に基本計画が決定された。西都～清武間については平成7年度から発掘調査が始まり、平成13年度にすべての遺跡の報告書刊行が終了した。道路については平成12年3月25日に清武JCT～宮崎西IC、平成13年3月31日に宮崎西IC～西都ICまでの供用が開始された。

また、門川～西都間59kmは、平成9年12月国土開発幹線自動車道建設審議会において整備計画区间に決定した。そのうち都農～西都間約25kmについて、同年12月に建設大臣（現国土交通大臣）より日本道路公团へ施行命令が発令された。

一方、県教育委員会では、平成6年度に延岡～西都間の分布調査を実施し、整備区间決定後の平成10年度には都農～西都間の路線上を対象とした詳細な分布調査を行い、79遺跡896,000m²の埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。そして平成11年度から日本道路公团九州支社と宮崎県教育委員会との間で委託契約を締結し、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収の進捗に合わせ確認調査・本調査および整理作業を実施している。

本遺跡の調査予定面積は21,900m²であった。平成11年度に800m²、平成15年度に410m²で確認調査を実施し、その結果、旧石器時代から近現代まで連続と続く複合遺跡であると判明した。また、12,590m²については確認調査の結果により調査対象から除外し、残る8,100m²について本調査対象とした。

第2節 調査の組織

本遺跡の調査・整理報告にあたって以下の組織が準備された（平成15～19年度）。

（調査主体）宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良 弘康（平成15年度）
宮園 淳一（平成16・17年度）
清野 勉（平成18・19年度）

副所長兼

調査第二課長

岩永 哲夫（平成15～18年度）

副所長兼総務課長

大庭 和博（平成15・16年度）

副所長

加藤 信郎（平成18・19年度）

総務課長

宮越 尊（平成17～19年度）

主幹兼総務係長

石川 恵史（平成15～17年度）

主幹兼

総務担当リーダー 高山 正信（平成18・19年度）

調査第一課長

兎玉 章則（平成15年度）

調査第一係長

高山 富雄（平成16～18年度）

長津 宗重（平成19年度）

谷口 武範（平成15・16年度）

長津 宗重（平成17年度）

主幹兼

調査第一担当リーダー 長津 宗重（平成18年度）

副主幹兼

調査第一担当リーダー 南中道 隆（平成19年度）

調査第二係長

長津 宗重（平成15・16年度）

主幹兼調査第二係長

菅付 和樹（平成17年度）

主幹兼

調査第二担当リーダー 菅付 和樹（平成18・19年度）

確認調査担当

主査 竹田 享志

主査 安藤 正純

主任主事 舟木 康一

主事 藤木 啓

本調査担当

主査 竹田 享志（平成15・16年度）

主査 安藤 正純（平成15年度）

主事 藤木 啓（平成15・16年度）

主事 今塙屋義行（平成16年度）

調査員 高木 拓志（平成16年度）

調査員 福田 光宏（平成16年度）

整理・報告担当

主査 竹田 享志（平成17～19年度）

主任主事 藤木 啓（平成17～19年度）

主任主事 今塙屋義行（平成17～19年度）

調査指導委員（所属は調査時・五十音順）

泉 拓良（京都大学）・小畠弘己（熊本大学）

田崎博之（愛媛大学）・広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）

本田道輝（鹿児島大学）・柳沢一男（宮崎大学）

調査指導・協力等（五十音順）

有馬義人（新富町教委）・有田辰美（新富町役場）

笠原明宏・津川大祐（西都市教委）

島岡 武（川南町教委）

巽 淳一郎（奈良文化財研究所）

日高正晴（宮崎県文化財保護審議員）

山中 章（三重大）

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

宮ノ東遺跡一帯は“第2の港”である。

宮ノ東遺跡の地理的・歴史的環境を述べる上で、一つ瀬川の存在を抜きにすることはできない。日向灘から一つ瀬川に入ると、まず“第1の港”福島（徳ヶ瀬）港に着く。一つ瀬川は宮ノ東遺跡一帯から上流では瀬となり、海から川を運行してきた舟は瀬の手前を終着点とした。ここから上流は陸路あるいは小舟に積み替えての移動である。宮ノ東遺跡からみて一つ瀬川対岸にある「船倉」「四日市」といった字名はその名残であろう。宮ノ東遺跡一帯は古くから社会・文化の中心であった。

第1節 地理的環境

宮ノ東遺跡は、宮崎県西都市大字岡富に所在する。遺跡の眼前を流れる一つ瀬川（米良山地に源を発し西都市を経て新富町・佐土原町の境界を流れ日向灘に注ぐ二級河川、延長 91.3km、流域面積 839 km²）。右岸には沖積地が広がり、現在の西都市街地となっている。一つ瀬川左岸には狭い沖積地を挟んで台地が迫っており、宮ノ東遺跡もそういった台地の一つに立地する。

1. 地質

宮ノ東遺跡は新田原台地の縁辺にあたる岡富段丘面に立地する。新田原台地の基盤は宮崎層群（泥岩と表層の風化泥岩）であり、それを覆って更新世の氾濫原堆積物、日向ローム層の順に載ることを基本とする。

岡富段丘面は新田原台地の高位段丘（新田原段丘面）が更新世に古一つ瀬川によって開析され形成された。したがって、宮崎層群の上に氾濫原堆積物である礫層、礫層の上に始良岩戸火山灰上位の日向ローム層が堆積する。その後、完新世になり岡富段丘面は一つ瀬川によって開析され、今に見るような一つ瀬川とその沖積地が広がった。岡富段丘面は調査区一帯で標高 30~32m、沖積面との比高差は 12~14m である。

2. 交通

陸路については割愛し、水上交通について触れてお

く。『日向地誌』によると、宮ノ東遺跡すぐ下には一つ瀬川にかかる“渡し”（岡富渡し）が 1 艘置かれていたと言う。例年、水量の減る 10 月から 2 月にかけては単板橋が架けられたと言う。岡富渡しは後に瀬口橋が架けられ、現在は、瀬口橋よりやや下流に新瀬口橋が付け替えられている。

江戸時代には、一つ瀬川河口の福島港から大坂や江戸への産物の運送が行われていた。しかし、福島港は良港とは言えず、潮時によっては船の出入りに困難であったり、南風の時には船掛りに苦労したりしたため、大淀川河口の赤江港から船出することも多かった。その後、福島港は明治末期から昭和初期まで、宮崎平野の中部沿岸における商港、漁港として遠く関西方面との取引の中心として栄え、上流の米良、西都方面の薪炭、木材、椎茸等の積み出し、石灰、肥料、酒類、食品等の陸揚げ港として賑わっていた。本章冒頭で触れたように、ここから舟が川を運行し、宮ノ東遺跡下付近が終着点となっていた。『日向地誌』の中でも舟・筏が行き来しているとある。

3. 気候

発掘調査は年間を通して進められた。春秋の期間は短く、夏は猛暑であった。冬は乾燥が激しく、日によつては体感温度が非常に低い時もある。梅雨時の雨はしとしと降るのではなく、大粒の雨が降り続いた。夏場の雨は特に激しい。夏の風は、川からのものが比較的穏やかである一方、山からのものは強い。山から風が吹く時は、天気が崩れることも多かった。冬の風は夏と逆転し、山からのものが比較的穏やかである一方、川からのものは強い。

宮崎は台風銀座とも言われる。今回の調査中にも多くの台風が襲来したが、中でも平成 16 年の台風 16 号・18 号は猛烈であった。調査区外に並び立つスギが大量に倒れ、特に段丘崖に面したスギは川からの風によって一様に山に向かって“風倒木”となった。また、台風 18 号では遺跡すぐ下の水田まで一つ瀬川の水が押し寄せ、過去の一つ瀬川流路の変化を想像させた。

4. 地下水

元住民(昭和50年に別地へ集団移転)の話によれば、水淵は全て井戸であったと言う。調査区内では、コンクリート枠の井戸が1基確認された。井戸の深度は不詳。平成16(2004)年現在でも、上水道が敷かれるのは西都市岡富(一ツ瀬川の対岸)や新富町竹渕の集落までであり、宮ノ東遺跡の位置する段丘すぐ下の肥料店は井戸利用である。井戸以外の水源として、湧水がある。湧水は段丘崖あるいは段丘を切り通した道等に沿って存在する。中でも、遺跡進入路脇の湧水は、雨水等が不透水層である宮崎層群の上面で流れ出す自由地下水である。湧水量は平成16年10月22日台風直後で48L/s/分といへん豊富であった。冬場の水量は少ないものの、水が涸れることはなかった。

5. 植物／動物

植物 調査着手時点では、植林によるスギ林であった。集落存続時(昭和50年以前)は畠地ならびに雜木林であったと言う。台地縁辺には常緑樹とシイやカシといった落葉広葉樹が生えていたそうで、今でもスギ植林地外に残されている。調査区内では、掘削中にクス・ニッケイ・ヤマイモの根が確認されている。地元の方による山菜採りも多く見られた。また、調査区西半分はクワ畑であったようである。『日向地誌』によると、宮ノ東遺跡を含む岡富村の栽培物としてコメ・ムギ・アブラナ・タバコが挙げられている。

動物 『日向地誌』によると、岡富村の物産としてアユ・ウナギ・コイが挙げられる。調査者の一人、竹田によるとより上流の西都市杉安付近でも汽水域のスズキ・ボラを釣ったことがあるといい、宮ノ東遺跡下でも見られたのである。また、調査期間中には、主に下記の動物・昆虫を調査区内で見かけた。湧水由来の沢に生息するサワガニについては、地元の方の御教示では唐揚げにして食べるそうである。

(哺乳類) イヌ・タヌキ・イタチ(島類) カラス・ウグイス・コジケイ・キジバト・ブバメ・スズメ・カワセミ(両生類) トノサマガエル・アマガエル・イモリ(昆蟲類) シマヘビ・オオダイシショウ・マムシ・トカゲ・カナヘビ(昆蟲) ミツバチ・オオスズメバチ・アシナガバチ・コクワガタ・オニヤンマ・ギンヤンマ・ナツアカネ・カマキリ・カ・エエ・アゲハチョウ(甲殻類) サワガニ

(藤木・高木)

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

大野寅男氏の精力的な表探活動に加え、近年の東九州自動車道建設関連の発掘調査によって、新田原台地上における遺跡展開の様相がより具体的になってきた。宮ノ東遺跡の北東約0.5kmに位置する新富町藤山第1遺跡では、小型のナイフ形石器や細石刃等が藤山川を望む南向きの緩斜面から出土している。一ツ瀬川に面する台地西南端にも遺跡の展開が認められる。

2. 繩文時代

草創期については断片的な情報に限られる。隆起線土器が新富町瀬戸戸遺跡で出土している。早期の遺跡は、新田原台地や一ツ瀬川対岸の西都原台地等、広く各所で確認される。宮ノ東遺跡近辺では、藤山川に沿って南から新富町藤山第1・2遺跡や尾小原遺跡等、東岸の台地上に七又木地区遺跡群(銀代ヶ迫・七又木遺跡)等が所在する。貝殻条麻文・押型文土器、石器類に伴って多数の集石遺構や炉穴が確認され、これらとは若干地点を越えて陥し穴状遺構も數多く検出されている。同様の遺跡は本遺跡北西の台地上に広がる新富町祇園原地区や台地中央部の畦原地区でも展開する。また、新富町竹渕C遺跡は一ツ瀬川の自然堤防ないし微高地に立地し、台地上に限らず沖積地にも広く人間活動があったとわかる。前・中期遺跡は新田原台地のみでなく西都原台地でも希薄となり、遺物がいくつか出土するばかりとなる。新富町藤山第2遺跡では轟式土器が、西都原祇園原遺跡では胎土に滑石を含む曾煙式や深浦式といった前期～中期前半の繩文土器と石匙・尖頭器・敲石等が出土した。後期後葉になると再び人間活動が活発化する。特に新富町祇園原地区遺跡群(春日遺跡等)では、堅穴住居跡や土器等の廃棄施設が確認される等、三万田式～鳥井原式土器の時期に広範囲に遺構・遺物が認められ、後続する孔列文土器や晩期後半の刻目突蒂文土器(夜臼I式)の深鉢や壺も出土した。藤山第2遺跡でも夜臼式壺がある。

3. 弥生時代

前期は遺跡・遺物ともに少なく、土器出土例に限られる。本遺跡北隣の新富町藤山第1・2遺跡では板付

II式土器の甕と壺が出土した。その他、板付式系土器は、新富町三納代・日置地区の今別府遺跡や志戸平遺跡の出土例がある。前期末～中期前葉になると、新富町鏡・高鍋町持田中尾遺跡等の集落跡は、台地縁辺部の入り組んだ丘陵上の、湧水点に近い場所に立地するようになる。下城式系譜の甕や西部瀬戸内系の壺と大陸系磨製石器が出土している。中期後葉には遺跡数は格段に多くなり、集落遺跡は台地内部まで展開する。宮ノ東遺跡の北側には、新富町紙原・春日・新田原遺跡等の集落跡が位置する。新田原遺跡では南九州特有の住居形態である、いわゆる花弁状間仕切り住居が検出されている。また、矢羽根透かしの高杯と四線文の壺の存在は、瀬戸内地域との活発な交流を物語る。後期～終末期の集落遺跡は本遺跡から東に段丘崖を上った八幡上第2遺跡をはじめとして、向原第1・西畦原第1遺跡等の中后期後葉から継続するものと、後期から始まる銀代ヶ迫・尾小原遺跡が挙げられる。向原第1遺跡の堅穴住居跡からは鉄製品が多く出土している。後期後半以降の代表的な集団墓地として川床遺跡があり、古墳時代前期にかけて周溝墓や木棺墓・土坑墓等195基が検出された。鉄鏃・素環頭大刀・鉄斧等、豊富な鉄製利器が副葬されている。ただし、川床遺跡の造営集団の集落跡は未検出である。

4. 古墳時代

一つ瀬川から小丸川流域にかけては宮崎県内ののみでなく九州でも有数の古墳密集地である。一つ瀬川を挟んで西岸に西都原古墳群、東岸には新田原古墳群と、二大古墳群が対峙するように立地する。新田原古墳群は紙原・石船・山之坊・紙原古墳群（支群）に大別される。宮ノ東遺跡は、紙原古墳群と山之坊古墳群の中間地点にあり、山之坊古墳群側の台地端に立地する。山之坊古墳群は前方後円墳5基、円墳31基が現存しており、横穴墓の存在も推定されている。首長墓系譜は前期の30号墳から中期まで遡れ、後期になると石船古墳群に移動したようである。特殊遺物として伝山之坊古墳群出土とされる画文帶神獸鏡や獸文絞神獸帶鏡がある。紙原古墳群は前方後円墳13基、方墳1基、円墳191基を数える。古墳時代を通じた伝統的な首長墓系譜の前方後円墳と方墳群と後・終末期の高塚古

墳・地下式横穴墓からなる後期群集墳が混在する。古墳群北側の川床遺跡は弥生時代から継続した墓域である。埴輪祭祀の実態が明らかになった百足冢古墳のように、後期段階には宮崎平野南部の下北方古墳群と勢力を二分したようである。また、古墳群内に馬埋葬土坑が多数検出されることから、馬を飼育・保有する集団の存在が想定される。集落遺跡は、新田原台地上の八幡上第2・銀代ヶ迫遺跡（前期後葉～中期前葉）、春日遺跡（中期後葉～後期）、尾小原遺跡（後期）、沖積地の竹淵C遺跡（中期後葉～終末期）が調査された。春日遺跡は100軒を超える集落規模だが、その存続幅は短期間とされる。竹淵C遺跡では、後・終末期の堅穴住居跡に土器埋設炉と竈が付設されている。この他、藤山第1遺跡で少量遺物の出土がある。一方、西都原台地においても新立・酒元・西都原地区遺跡等で前～終末期の集落跡が知られる。このように一般集落跡は多数検出されているが、首長層居館跡は未確認である。

5. 古代

古墳時代終末期から強力に推進される律令国家体制確立の中、奈良時代には令制国としての「日向国」が確立する。その国府は現在の西都市妻北地区に置かれ、国府を含む官衙跡は寺崎遺跡とされている。国分寺や国分尼寺も建立される。「児湯郡印」の資料は郡施設の存在も示す。そうした公的施設の瓦や須恵器の生産拠点として宮崎市下村窯跡が開かれる。また、日向国および国府は、国内経営の他に三野城・稚穂城（いずれも未定）の防備や櫛戸の移民等、南部九州に広く居住していた「隼人」対策の拠点的・前線基地的性格も与えられていた。宮ノ東遺跡もそうした活発な政治・経済・物流や人的往来とは無関係ではなかったであろう。本遺跡周辺の集落遺跡では竹淵C・紙原古墳群等があり、沖積地や台地上に生活圏が広がるとわかる。藤山第2・向原第1遺跡で少量の遺物が、紙原古墳群で須恵器の蔵骨器が出土している。

平安時代の日向国は、律令体制の行き詰まりから生じた荘園制の成立・拡大期に入る。時代は下るが、建久8（1197）年の『日向国図田帳』は島津莊（関白家藤原氏）・豊前宇佐八幡宮領・日向國富莊（八条女院領）の三大荘園の隆盛を示している。宮ノ東遺跡周辺は国

富翁に含まれ、安楽寺・花藏院・妻萬宮・公領等が互いに入り組む。これら一大土地開発は、都萬神社を本拠地とする在官人の日下部氏と、それに代わって勢力拡大した土持（田部）氏の存在が大きい。古代後半～中世の水田や畠跡は、大辻屋敷・平田追遺跡といった宮ノ東遺跡から見て一つ瀬川対岸に広がる沖積地や台地の迫部で検出されており、当該期の土地開発の実態を垣間見せている。参考までに、南部九州の奈良・平安時代は今と変わらず気象災害に翻弄されたようだ。『続日本書紀』等に 703 年干魃・704 年風水害・706 年大風・723 年飢饉・746 年風雨・753 年不作・755 年風雨・766 年大風・790 年飢饉・791 年飢饉・815 年長雨・819 年干魃・838 年飢饉・858 年暴風雨・887 年大地震と洪水が記載されている。

6. 中世

鎌倉時代、土持氏は荘園地頭職として日向の「中原」（宮崎平野を指す）に勢力を保っていたが、南北朝・室町時代には武家勢力の分立と「中原」を巡る大きな権力争いが続く。建武 2（1335）年に伊東祐持は足利尊氏から日向都於郡 300 町をあてがわれ日向入りし、都於郡城を本拠地として以来、勢力を拡大した。永禄 11（1568）年、伊東義祐によって伊東氏 48 城と呼ばれる一大勢力圏を確立する。こうして中世においても西都市近郊は日向国の中心的地位を担い続ける。山城は新田原台地の南側縁辺部には多数存在し、宮ノ東遺跡から谷を挟んで北にも有峯（岡富）城が位置する。城跡の構造は一つ瀬川を自然の堀とし、丘陵頂部に曲輪・堀・土塁を巧みに設けて 5 本の堀切により各曲輪を独立させている。各曲輪・虎口付近の土塁は特に高く、虎口には堀切がある。城主は長友氏一族で『日向地誌』等に建武・康暦年間（14C）に長友兵庫頭行安・慈安・宮内左衛門尉安永の名があり周辺一帯を知行したとある。また、有峯城から一つ瀬川を挟んだ台地縁辺の平田追遺跡では、旧街道を見下ろす高台に見張り台と堀切、14C の集石墓等が確認された。集落遺跡は沖積地に立地する竹瀬 C 遺跡があり、12～16C にかけての掘立柱建物跡群や石塔群が検出された。西都原台地でも 16C 代の掘立柱建物跡群（西都原地区遺跡）が知られる。なお、西都市岡富地区や黒生野地区といつ

た沖積地では「鍵ノ手」と呼ばれる通路が現存し、これは伊東氏支配時の地割とされている。「屋敷」の名を含む小字名も多い。田畠の海の中に集落が島状に点在している原風景は少なくとも中世には連れよう。宗教関連遺跡として、宮ノ東遺跡のすぐ東には竹瀬経塚と本蓮寺跡がある。竹瀬経塚では銅鑄製・陶製経筒が 2 点同時に出土した。本蓮寺跡は、長享 2（1488）年前後に僧日要が建立した日蓮宗の寺院で、現在は別の場所に位置する。伊東義祐治世の頃までは、本蓮寺を中心とする日蓮宗と佐土原町の大光寺の禅宗が、領内の在地武士階層の崇敬を二分してその教勢を誇った。

7. 近世

豊臣秀吉や江戸幕府による国割で、現在の西都市や新富町付近は佐土原藩・高鍋藩・人吉藩・天領に分治された。宮ノ東遺跡の位置する岡富村は天領（總北領）にあたる。これ以後、本遺跡近辺は農村地帯へと姿を変えてゆく。岡富村の社寺の一つ、住吉神社は宮ノ東遺跡の中にあり、元禄 15（1702）年には本殿が建立されている。近世後半には各地で手工業が活発化するなか、總北紙の生産が岡富村でも進められた。新富町新田地区においては春日神社横牧土手遺跡で馬匹生産が、茶碗山窯跡では磁器等の生産がなされた。

8. 近現代

岡富村は、明治 22（1889）年による市町村制施行により下總北村、昭和 28（1953）年に妻町、同 30（1955）年に西都市となる。岡富村住吉神社の境内にはクスノキの巨木が茂り、明治 8（1875）年には、広島県厳島神社の海中に立つ 8 代目大鳥居の用材として奉納されている。第二次世界大戦時の岡富村（下總北村）は、昭和 20（1945）年 3 月 18 日の宮崎県初空襲以来、連日のように艦載機の来襲を受けた。藤山第 1・2 遺跡では防空壕跡や爆弾片、尾小原・永牟田第 2 遺跡では機銃弾と薬莢が出土しており、空襲の激しさを生きつく物語る。岡富地区の集落は、昭和 50 年までに、航空自衛隊新田原基地への飛行機進入路にあたることから一つ瀬川対岸の四日市地区へ集団移転した。集落跡はスギ林や畑地に置き換わり、ついには高速道路で大きく分断されることとなった。（今塙屋・福田）

第三章 調査・整理作業の方法と経過

第1節 確認調査の方法と経過

まず、工事予定地について表面採集を実施したところ、台地平坦面のほぼ全面にわたって、古墳時代から古代のものを中心に旧石器時代から近現代までの遺物の散布が認められた。

調査区は、地形の起伏や近現代における家屋等の配置を勘案し、里道から南側の屋敷地・畑地をA区、里道から北側をB区、B区につながる高位段丘とその段丘崖・開析谷をC区とした。B区は、畑地をB1区、住吉神社跡地をB2区と細分した（第3図）。調査期間は平成15年7月1日から同年9月2日までで、A・B区の最終調査面積は410m²である。トレーニングは2m×5mの人力掘削を基本とした。出土遺物は、トレーニングごとに層一括で取り上げた。

A区は11箇所のトレーニング（T1～T11）ほぼ全てで灰色味のある粘質土・黒褐色粘質土・黒みの強い粘質土等が確認され、いずれも遺物包含層であった。遺物包含層の厚さはA区中央付近で最も厚く、例えばT11では遺物包含層全体で2m近くにも及ぶ。各遺物包含層の厚みは、丘陵先端にあたるA区南半に向かって薄くなる。遺構はA区北半に弥生時代後期から古墳時代の堅穴住居跡群（4軒以上）や古代から中世の数条の溝状遺構・ピット群が確認された。A区南半では古墳時代から古代と思われるピット群が確認された。

B1区は6箇所のトレーニング（T100～T105）でA区に近い土層堆積が確認された。遺物包含層は山側で厚く、丘陵中央で薄くなる。遺構は山側で中世の土坑群が確認された。丘陵中央では古墳時代から古代の堅穴住居跡群が広がり、それらを切るように走る数条の溝状遺構が確認された。

B2区は7箇所のトレーニング（T200～T206）でやはりA・B1区に近い土層堆積が確認された。遺物包含層の厚さは山側で薄く丘陵中央で厚い。B2区北端ではKt-Kb以下、姶良Tr・火山灰などの良好な堆積が確認されたが、旧石器は出土しなかった。遺構はB2区のほぼ全面にわたってピット群及び堅穴住居跡かと思われる遺構群が確認された。住吉神社に直接関連するものとしては、

表土下より神社の基礎であったと見られる凝灰岩・コンクリート塊が確認された。また、神社正面を構成する石垣と入り口になる階段がよく残されていた。

C区は平成11年度に15箇所のトレーニング調査を実施し、最終調査面積は800m²である。

確認調査の結果、おもに①調査対象のほぼ全面にわたって、遺物包含層である灰色味のある粘質土・黒褐色粘質土・黒みの強い粘質土等が広がること、②旧石器時代から近現代までの遺物があり、その包含量が多いこと、③各遺物包含層を除くと、その下位層上面において堅穴住居跡・ピット・土坑・溝状遺構等の各種遺構が広がること、④谷地等の12,590m²は調査対象から除外できることが判明した。

したがって、A・B区8,100m²で発掘調査が必要となり、あわせてC区の補足調査を実施することとした。A・B区の調査では、計3枚の遺物包含層を順に掘り下げ、その下位層上面において遺構を確認していく必要があるとした。

第2節 発掘調査の方法と経過

1. グリッド設定と遺構番号

地区的設定は確認調査で用いた区分けを基本的に踏襲し、A区・B1区・B2区・C区と呼んだ。グリッドは調査区境界に沿って任意で設定し、大グリッド（10m四方）・小グリッド（5m四方）の2種類で使い分けた。グリッドの名称は、大グリッドが南北方向（0～22）、東西方向（A～H）の交点で示した。例えば、Dラインと1ラインの交わったグリッドはDIグリッドとなる。小グリッドは大グリッドを4分割したもので、その名称は、北西→北東→南西→南東の順に大グリッド名に統けてA、B、C、Dとした。例えば、DIグリッドの北西隅5m四方はDIAグリッドとなる。

A区は耕土処理の都合でA区北半・南半に分けた。B1区は、調査・整理段階で特に遺構の性格が大きく異なると判明した山手のエリアを指して、B1区北半と呼ぶことにした。各地区とグリッドの対応を示すと以下のようになる。

A 区南半	: A～F/1～5 グリッド
A 区北半	: A～F/6～12 グリッド
B1 区	: D～G/13～17 グリッド
B1 区北半	: D～G/18～20 グリッド
B2 区	: A～D/13～18 グリッド

されるが、次のように大まかに代表できる。

- I 層：灰色味のある粘質土で中近世以降
- II 層：黒褐色粘質土で主に古墳時代から古代
- III 層：II 層以上に黒みの強い粘質土で古墳時代以前
- IV 層：III 層に同じ

表土除去は、確認調査の所見に沿ってバックホーで進めた。その後、I 層（遺物包含層）掘削→遺構精査→II 層（遺物包含層）掘削→遺構精査→III 層（遺物包含層）掘削→遺構精査というように、遺物包含層掘削と遺構精査を 2～4 回繰り返した。なお、A 区北半のみ、I 層に家屋の基礎等を多く伴っていたため、表土とともに I 層を除去した。遺構・遺物包含層の掘削はグリッド単位を基本に進め、複数グリッドにまたがる竪穴住居跡等の大形遺構については随時拡張して掘削を進めた。遺構平面がよく掴めない時は、グリッド間に沿って機械的にトレーナーを設け、平面面で遺構を精査した。グリッド単位の調査は進捗の目安となるばかりでなく、高密度遺構群の中での排土運搬用一輪車の動線確保等で効果を発揮した。

遺構名は当センターの場合、遺構略号（例えば竪穴住居跡は SA 等）を用いるのが一般的であるが、遺構数が膨大であったことと遺構の性格等が最終的に変更されることも大いに予想されたため、地区ごとの検出順に S+No. で付けていった。なお、スギの根株が調査区全面を覆っており、当初、重機で除去することも考えたものの、遺構・遺物包含層を大きく破壊する危険性があったため、地区ごとで除去した根株順に M+No. を付けていた。これらの S+No.・M+No. については混乱を避けるため整理作業までそのまま踏襲した。遺構番号は、調査順序の都合から以下のようにになった。

A 区南半	: S1～S999・S4000～S4999・M1～M999
A 区北半	: S1700～S1999・S3500～S3999・ S6700～S9999・M4000～M4999
B1 区	: S2000～S2999・S5000～S6699・ M2000～M2999
B1 区北半	: S3100～S3499
B2 区	: S1000～S1699・M1000～M1999
C 区	: S3000～S3099

なお、旧石器時代の礫群については、調査方法等が縄文時代以降と大きく異なったため S11 から順に付けていった。

2. 遺物包含層掘削と遺構検出について

遺物包含層は大きく I～IV 層に分けられ、一部、IV 層がある。この I～III 層はそれぞれ 1～3 回目の遺構検出に至るまでの土層という意味合いで用いており、したがって遺構埋土（遺構プランを掴めなかつたものやその後に検出される遺構に属するもの）を含んだ人工層位である。上層になればなるほどそれ以前の遺物を多く含む。遺物包含層の色調や土質、主な包含遺物については、その下に続く遺構の時期や埋土等に左右

3. 遺構等の記録について

遺構の図化記録は、個別遺構ごとに進めるのではなく、調査区全体をグリッドに沿って割り付けた上で縮尺 1/20 で実施した。遺構図の作成は平面図とレベル記入までを基本とし、特に必要と判断したものについてのみ土層断面図を作成した。土層断面図等の土色の表記は、農林水産省農林水産技術事務局監修の『新版標準土色帖』に準拠した。

遺物出土状況図は、例えば竪穴住居跡等の床直上等で出土する遺物群のような、遺構の性格・時期を有効に説明しうるもののみ No. を与え図化した（No. 付遺物と呼ぶ）。遺物包含層中のものや遺構検出中に出土した遺物はグリッド層別に、遺構埋土中のものは特に意味を持つまとまりを認識できない限り遺構 No. でひとまとめに取り上げた。フローテーションに提供する土壤の採取も適宜実施した（フローテーションの詳細は第 VII 章参照）。

4. 遺構埋土について

遺構埋土は全体に似通っており、また激しい切り合いで関係にあったため、その区別はたいへん困難をきわめた。しかし、いくつかの着眼点を押さえることで、遺構検出を進めていった。

遺構検出の着眼点は、特に竪穴住居跡等の規模の大きな遺構群でより効力を発揮した。埋土の色調・土質・粘性・しまりの特徴として、やや固くしまったやや粘性のある黒色土・褐色ブロックを含む黒褐色土・黒褐色土・濁った褐色土（灰黄褐色・にぶい黄褐色・暗灰黄色土等）・濁った灰色土（にぶい橙色・にぶい黄橙色土等）・黄みの強い黒色土（黒褐色・オリーブ黒色土等）等があり、第IV章で触れるように時代・時期や遺構種別によって変化が見られた。また、焼土粒及び炭化物・地山土ブロック（AT・小林軽石・褐色土等のブロック）・甕を構築していた白色粘土等、埋土中への含有物の有無・大きさ・量の違いも遺構を識別する時の根拠として有効であった。その他、特に竪穴住居跡の場合、遺構の構造（甕・ピット等の位置）や床面の硬化、出土遺物の時期も重要な情報となつた。

なお、発掘調査の経過は調査日誌抄で代えたい。

調査日誌抄

平成15(2003)年

- 0703 確認調査開始。重機投入。
0704 発掘調査事務所・駐車場の整備。
0707 作業員投入。A区北半の確認調査開始。
0714 A区南半の確認調査開始。
0716 B1区の確認調査開始。
0730 住吉神社宮司が来駆。
0804 B2区の確認調査開始。
0811 台風10号により調査区内にスギ倒木あり。
進入路決済。
0819 新富町役場有田辰美氏来駆。
0821 進入路の修復。
0828 作業員による作業終了。
0902 確認調査終了。
1003 本調査開始。レベル移動。
1004 重機投入。A区南半・B2区の表土剥ぎ開始。
1006 雨天の中、伐採に伴う枝木等を重機で除去。
1009 B2区表土剥ぎ終了。A区南半表土剥ぎ開始。
1013・1014 雨天により作業なし。
1017 発掘調査事務所設営。A区南半表土剥ぎ終了。

- 1020 A区南半・B2区へ作業員投入。遺構検出開始。
1021 B2区、埋められた神社鳥居を重機で除去。
1024 安全対策のため、調査区周囲をネットで囲む。
1027 掘土運搬開始。
1105・1106 雨天により作業なし。
1110 雨天により作業なし。
1113 新富町役場有田辰美氏来駆。
1114 B2区神社石垣実測。
1117 B2区神社石垣について説明会実施。
1118 遺物包含層と見なしていたものが、地山が残らないほどに平面的・垂直的に切り合った竪穴住居跡等の遺構群であることが明確になってくる。非常に困難な遺構検出が続く。
1120 雨天により作業なし。
1208 A区南半より「男根状土製品」出土（取り上げ前に紛失）。
1211 雨天により作業なし。
1219 初降雪。
1225 現場仕事納め。

平成16(2004)年

- 0106 現場仕事始め。
重機でB2区石垣除去。実測本格化。
0122 非常に冷え込む。B2区遺物包含層について現場内で協議。
0127 段取り上、A区南半の調査を一時中断。
0204 極寒のため、S1021の陶磁器接合作業。
0216 B2区Ⅲ層上面の遺構掘削開始。
0220 神社鳥居の基礎検出。
0301 雨天により掘削できず、遺跡周辺の踏査。
0312 雨天により、遺構検出・コンテナ整理等のみ。
0329 雨天により作業なし。
0405 高木・福田調査員、調査に合流。
0406 C区伐採。
0407 C区作業員投入・平成11年度トレレンチ復元。
0408 C区で地山と認識された土が整地層と判明。
0413・0414 雨天により作業なし。
0415 除草等の環境整備。
0416 C区俯瞰写真的撮影。尾根2の調査終了。
0419 雨天により作業なし。
0421 B1区北半の石塔を調査区外へ搬出。墨書等を確認。
0506 東畦原整理作業棟において整理作業開始。
0513 雨天のため掘削作業なし。
0519・0520 台風のため作業なし。
0521 調査区内のスギにカラスが巣作りはじめめる。
0528 暑さ対策のため、寒冷紗の使用開始。
0603 B2区成果、作業員対象に説明会。A区南半調査再開。
0604 発掘調査事務所のアシナガバチ巣を駆除。

- 0608 雨天により作業なし。
- 0609 B2 区調査終了。日本道路公団との協議により、平成 17 年 3 月 31 日までの調査期間が決定。
- 0610 現場内でスズメバチが目立ちはじめる。
- 0611 台風 4 号接近。作業なし。
- 0616 ナツアカネが飛ぶ（トンボ：本年度初）。
- 0617 重機投入。B2 区へ発掘調査事務所を移設。作業員なし。
- 0621 台風 6 号接近。現場なし。
- 0622 B1 区北半の表土剥ぎ開始。
- 0623 B1 区の表土剥ぎ開始。
- 0624 雨天により作業なし。
- 0701 B1 区表土剥ぎ終了。B1 区北半、伐採。
- 0702 B1 区北半掘削開始。
- 0703 今塙屋主事、調査に合流。B1 区掘削開始。
- 0720 B1 区北半の遺構群の全容が見えはじめる。実測開始。
- 0726 新富町役場有田辰美氏来跡。
- 0730～0802 台風ならびに雨天により作業なし。
- 0805 防空壕を検出。掘削。
- 0810 現場作業員の話題：金魚と水草・甲子園。
- 0813～0816 盐のため作業なし。
- 0817 雨天により作業なし。
- 0823 スコール様の豪雨と落雷により作業進まず。
- 0830 台風 16 号により進入路のスギ多数倒れ車進入不可。
- 0901 隣接する藤山第 1 遺跡で不発弾検出。
- 0902 都合により作業員なし。
- 0906・0907 台風 18 号。遺跡下の水田部分に一つ漸川の水があがる。
- 0915 雨天のため作業進まず。
- 0916 B1 区北半の境となる溝群の全貌が見えてくる。
- 0920 作業なし。
- 0927 B1 区北半の斜面部分の実測終了。
- 0928 午後より雨天のため作業進まず。
- 0929 台風に伴う雨天のため、掘削作業なし。
- 1004 B1 区北半、作業員対象に説明会実施。
- 1005 B1 区北半の調査終了。
- 1006 三重大学山中章教授・川南町教育委員会島岡武氏来跡。
- 1008 雨天のため作業進まず。
- 1011 雨天により作業なし。
- 1013 A 区南半、部分的に旧石器調査。
- 1018・1019 雨天のため作業進まず。
- 1020・1021 台風により遺跡進入路の崖が崩落。作業員なし。
- 1025 雨天により作業なし。
- 1026 雨天により A 区南半水没。作業進まず。
- 1029 雨天により作業進まず。
- 1102 A 区南半調査終了。
- 1105 B1 区北半の古代における造成の片鱗が見えはじめる。
- 1109 遺跡進入路の壁面崩落防止のためネットで養生。
- 1110 A 区北半の遺構掘削開始。雨天で作業進まず。
- 1111 B1 区北半の調査終了。石塔類の実測開始。
- 1122 空中写真撮影。
- 1125 石塔類の墨書き残着を赤外線カメラで精査。
- 1126 宮崎考古学会会長の日高正晴氏来跡。
- 1201 B1 区北半の石組遺構の実測について業者委託。
- 1210 B1 区の調査終了。
- 1221 A 区南半を排水土置き場として整備。たいへん冷え込む。
- 1227 現場仕事納め。

平成 17 (2005) 年

- 0105 現場仕事始め。
- 0106 雨天により作業進まず。
- 0114 宮崎大学柳沢一男教授来跡。
- 0118 調査区全体が霜に覆われ凍てつく。
- 0125 雨天により作業進まず。
- 0127 雨天により作業進まず。
- 0201 強風の中、降雪。
- 0202 強風・寒冷、霜柱ひどい。霜柱のひどい日続く。
- 0207 雨天により作業進まず。
- 0209・0210 雨天により作業進まず。
- 0214 明治時代の地籍図と遺構配置を検討。
- 0215 雨天により作業進まず。
- 0216 A 区北半、旧石器調査開始。
- 0218 雨天により作業進まず。
- 0221 B1 区北半、古代の造成土を掘削。
- 0224 雨天により作業進まず。
- 0225 遺跡一帯の通称について、最終的な聞き取り。
- 0302 石塔類の写真撮影。
- 0303 雨天により作業進まず。
- 0308・0309・0318 調査指導委員来跡。
- 0315 奈良文化財研究所戸井氏来跡。
- 0316 B1 区の古代造成の調査終了。
- 0317 雨天により作業進まず。
- 0322 雨天により作業進まず。
- 0324・0325 強風かつ寒い日。
- 0325 遺跡周辺の踏査。旧本蓮寺の位置を特定。
- 0328 作業員による掘削作業終了。
- 0330 現場における全調査終了。

第3節 整理作業の方法と経過

整理作業は、発掘調査中の平成16年5月から、東唯原整理作業事務所において開始した。同所における整理作業は、発掘調査の終了した平成17年4月以降、体制を増強し進め、平成17年10月末に終了した。作業内容は、水洗ならびに遺物一覧作成・接合対象遺物の選定までである。その後、平成17年11月から平成19年11月まで、埋蔵文化財センター本館において、注記以降の整理作業に間わる全作業を行った。

報告書は『本文編』『図面編』『図版編』『付図、全体遺構分布図』からなる。遺構・遺物等の観察表や自然科学分析関連の一覧表等は『本文編』巻末に掲載した。

1. 遺構の整理

遺構の整理は一覧表の作成より着手した。まず、全遺構を対象に、大グリッド単位の位置・検出面・大まかに遺構種別・土器等より割り出した遺構時期・床面標高・長軸長等の遺構規模・その他の補足情報を整理した(第1表)。検出グリッドの表記について、竪穴住居跡や溝状遺構等の複数グリッドにまたがる大規模のものについてはあるグリッド名で代表させた。検出面は最大で4回に分かれ、表中には何回目の検出面確認かを示した。遺構種別は以下のように略称を用いた。

SA=竪穴住居跡・SB=掘立柱建物跡・SC=土坑・

SD=土壤墓・SE=溝状遺構・SG=道路状遺構・

SH=柱穴を含む小穴・SI=集石遺構・SJ=龜・

SL=周溝墓・SP=土器埋設炉・SPP=地床炉・

SAZ=竪穴状遺構

柱穴を含む小穴については、本文中ではピットと記載する。また、土坑の中でその性格等が特定できた、あるいは特異な場合には、それぞれ備考欄に記載した。床面標高は遺構床中央付近の標高で代表して表記した。他の標高値は遺構実測図原図に記載・保管している。なお、第1表で番号のないものは最終的に欠番となつた遺構である。一部に、現場段階でのミスによって遺構番号の重複も生じているが、訂正是不可能なためそのまま掲載している。掘立柱建物跡は現地復元を基本とし、一部、1/20の遺構分布図を用いて図上復元し、その一覧表を作成した(第2表)。

遺構図は、全ての遺構について個別に掲載すると膨

大な頁数となるため、調査区別・検出面別に全遺構の配置・分布について付図を起こした。調査中に個別に図化したものについては、『図面編』に掲載した。各遺構図中の土層注記については、本編78・79頁にまとめて掲載している。図中に示す北は基本的に磁北である。地図の一部については国土地理院発行の1/25,000・1/50,000地図を用いた。

2. 遺物の整理・収蔵

水洗は調査区ごとに順次進め、取り上げ遺物全てを対象とした。水洗終了後の乾燥中に遺構・グリッド別で遺物の種別と総数を集計し、この結果を受けて、その後の本格整理の対象と方法を検討した。

注記は「遺跡名略号/遺構・グリッド名/層位/床直上出土ならびに埋土中で重要なものについて遺構内での通しNo.(いわゆるNo.付遺物)」を基本とした。例えば、S1000 埋土出土遺物には「ミヤヒ S1000」、S1000 の床直上出土で3番目に取り上げた遺物には「ミヤヒ S1000-3」、A1A グリッドのII層中の出土遺物には「ミヤヒ A1A II」である。注記は全点対象を基本としたが、遺物量の膨大であった縄文土器・弥生土器・土師器類のうち、水洗後の乾燥段階で接合対象から外した土器類については注記せず、ラベル情報のみで袋詰めした(収蔵段階でP.Dとなる)。

土器・陶磁器及び土製品は、約1万基を数える多数の遺構と遺物包含層から大量に出土した。このため、接合は遺構内出土遺物に特化し、遺構間・グリッド間の接合については可能な範囲までとした。石器は旧石器・石斧類についてのみ短期間の接合を実施し、他石器については気付いた範囲までとした。

実測は職員による手実測を基本とし、一部実測委託した。B1 区北半の石塔類は発掘調査事務所で実測・写真撮影した後、一部を残して廃棄した。製図は、石塔類・金属製品・ガラス製品を除いた土器類・石器類の大半をデジタルトレース委託した。写真撮影は大判カメラ・デジタルカメラを併用し進めた(詳細は『図版編』に記載)。

収蔵は、実測図掲載遺物(P.U)、それに準じる遺物(参考資料)、その他(P.D)の別で進め、金属製品のみ別に収めた。P.U はレイアウト番号順の収蔵を基本

とし、金属製品のみ別に収めた。参考資料の内訳は、土器類・石器類・ガラス製品・金属製品・自然遺物全般がある。土器類はレイアウト上、実測対象より落としたもの(参1)、参1以外を遺構・グリッド等別の順で並べたもの(参2)に分けて収めた。土器類以外は器種別の順で収集した。P.D.には旧石器時代の礫、水洗後の乾燥段階で接合対象から外した土器類がある。

3. 金属製品の保存処理

神宮分館のサンドブラスターを用いたクリーニングを基本とし、脱塩は炭酸水素ナトリウム・炭酸ナトリウムを純水に溶かしたものに浸した。脱アルカリは温かい純水に浸し、乾燥を経てソルベントナフサ・NAD-10Vで含浸させた。含浸作業は3回繰り返し、乾燥の後、接合・補修した。最終的に、シリカゲルあるいは調湿剤(湿度を50%に保持)とともに調湿機能のあるタッパー内で保管している。なお、図版用の写真撮影は脱塩前に実施した。銅腕の保存処理は外部委託し、その後、写真撮影した。

4. 実測対象の選定基準

実測対象は、遺構の時期や性格を示す遺物を基本とし、特に弥生時代以降の竪穴住居跡出土分については①床直上出土で遺構時期を直接に示す可能性の高いもの(No.付遺物)・②埋土中遺物を含めて一括性の高いと見られるものとした。さらに、遺構には伴わないが、遺跡の変遷や時期的な性格を考える上で必要な遺物もあわせて選定した。旧石器・縄文時代の石器については、いわゆる製品や剥片剥離の具体を示しうるものとした。縄文時代の石器のうち、石斧類は一部のみを図化した。縄文時代以後の打斧石錐は大量にあり、①のみを図化した。金属製品は遺構出土品を中心に、ガラス製品は完形率の高いもの、遺構の性格を把握できるものを中心に実測対象とした。

5. 磨の取り扱い

礫は、一旦は全て発掘調査事務所へ集積し、雨天等を利用して必ず水洗した。これは、縄文時代以降の削平等により失われた旧石器時代礫群等の分布把握を試みること、泥が付いたままでは識別困難な石器・石製

品を漏らさず回収することを狙ったもので、特に後者において大きな効果が得られた。

礫には①旧石器時代遺物包含層より出土したもの、②縄文時代以降の遺構・遺物包含層より出土したものがあり、それぞれで扱いが異なる。①については、水洗・油性マジックによる注記・接合を進め、最終的に礫そのものを保管対象とした。②については、大形礫・小形礫(最大径15cm以上を大形とした)・赤化ある礫に三大別し、それぞれの点数・重量を記録し、最終的に現場内で廃棄した。廃棄礫は、ぬかるみの臨時の補修等、安全衛生管理の上で威力を發揮したことと付記しておく。

第4節 遺物等の用語について

本節では、第IV章以降の本文ならびに『図面編』『図版編』での記述について、特に注釈の必要となるものについて解説する。

①本文・図面/図版タイトル等での遺物名称

古墳土器 =古墳時代の土師器・須恵器・土製品
古代土器 =古代の " "

中世土器 =中世の各種土器・陶磁器・土製品

近世土器 =近世の " "

近現代土器=近現代の " "

縄文石器=縄文時代の石器・石製品

弥生石器=弥生時代の " "

古墳石器=古墳時代の " "

…以下、近現代まで同様

敲石=礫に敲打痕が残されるもので、かつ片手で容易に保持できるものとした。磨痕と敲打痕等を合わせ持つ場合は、敲打痕を優先して敲石とした。

磨石=礫に磨痕のみを持つもの。

凹石=円礫の正面あるいは正面・裏面に一定の深さの凹んだ敲打痕を持つものを指す。磨痕を合わせ持つ場合でも敲石例と同様に凹石とした。

台石=竪穴住居跡床面等に据え置くように残される等、その出土状況から作業台であったと見られるものを指す。敲石・磨石・凹石と

の区別は片手で容易に保持できるか否かとし、後者は使用痕の種類に関わらず台石とした。整形等により明確な底部を持つものは石皿とした。

砥石=砥面と判断される使用痕を持つ砾。他使用痕と組み合わさった場合、砥面を持つものは優先的に砥石とした。

断面U字あるいはV字の溝状の削りが顕著に入るものについては筋砥石と呼んだ。

円礫・棒礫=出土状況から、ある目的で持ち込まれたと推定でき、かつ使用痕がない砾を指す。円礫は幅に対して長さが3倍より小さいもの、棒礫は幅に対して長さが3倍以上のものをさす。
(藤木)

②土器・陶磁器関連（第5～7表）

・種別

縄=縄文土器、弥=弥生土器、土=土師器、須=須恵器、瓦=瓦質土器、陶=陶器、磁=磁器、青=青磁、白=白磁、花=青花、ド=土製品、石=石鍋
※石鍋の用語は石器の頁で報告する。

・手法・調整・文様

U=指おさえ（指頭痕）、N=ナデ、J=縄文、K=貝殻条痕文、HA=ハケメ、IN=板状工具ナデ、T=タタキ、HT=平行タタキ、KT=格子目タタキ、DA=同心円当て具痕、HA=平行当て具痕、HK=ヘラケズリ、HM=ヘラミガキ、HG=ヘラ切り、IK=糸切り、R=隆蒂文、TT=突蒂、KO=貝殻押引文、YO=山形押型文、HJ=ヘラ描き条線文、SR=刺突列点文、HC=半截竹管文、HS=ヘラ描き斜線文、C=沈線、SK=三角文、KH=櫛描波状文、UK=打ち欠き

・胎土ならびに色調

土器・陶磁器の胎土や色調も重要な観察項目であるが、個々の観察記録の羅列記載では、逆に各時代の種別や器種ごとの特徴を把握しにくい恐れがある。そこで、第IV章の各節において全体的な特徴を文章で表現し、異なる色調や胎土をもつ遺物は、土器・陶磁器類観察表（第5

表）の「備考」欄に別途記載した。さらに、色調や胎土の様子、質感などは写真図版で補充することに留意した。
(今塙昭)

③旧石器関連（第3表）

・石器石材

Ch=チャート、Ho=ホルンフェルス・頁岩類、NOb=日東産黒曜石、Os=尾鈴山酸性岩類、Ry=流紋岩、Sa=砂岩
(竹田)

④縄文時代以降の石器・石製品関連（第11表）

・器種ならびに石材

磨斧未製品=磨製石斧未製品、部分磨斧=部分磨製石斧
黒曜石

→腰岳Ob=腰岳産、姫島Ob=姫島産、桑Ob=桑ノ木津留産（上青木産）、日東Ob=日東産、上牛鼻Ob=上牛鼻産
淀姫Ob1=火山岩特有の多孔質でガガガサした礫面。剥離面の特徴より灰黒色に風化しかつ白色の夾雜物が目立つものの、ガラス光沢を良く残しかつ夾雜物の見えないものがある。

淀姫Ob2=あばた状の礫面で転磨が進む。

安山岩

→ガラス安山=ガラス質の強いもの、多孔安山=多孔質のもの

尾鈴石=尾鈴山酸性岩類、

ホルン（質により良ホルン）=ホルンフェルス

⑤石器実測図中の表現について

・使用痕の表示について

面的に図示可能な磨面・砥面 →網掛け
断面図等での使用痕の範囲 →矢印+種類
(欠損等で範囲が不明確な場合、破線の矢印)

・使用痕の種類

コ=敲打痕（面）・ス=磨痕（面）・サ=削痕（面）・マ=摩滅痕（面）・ツ=潰れ・ト=砥痕（面）・ハト=剥離面に砥痕（面）
※複数使用痕が重なる場合、例えばコナマ。
・礫面の復元・欠損部位には復元線を入れた。

- ・その展開面が全面縫合である場合や二次加工部位が限定的である場合等は、最小限の図化に留めた。
- ・火打石は潰れの残る稜線に網掛けした。

⑥石材の特徴や产地等

ガラス質安山岩：特定産地名の付与困難であり一括りとした。

多孔質の安山岩：霧島新規溶岩類に伴う。黒色地に白色斑あり。大淀川流域で採取可能。

輝石安山岩：都城盆地一帯の薄手の打製石斧等に好まれる石材で、灰白色地に黒色の大きめの斑晶がある。

凝灰岩1：宮崎平野部の垂水凝灰岩である。化石は、白池国氏（宮崎地質研究会）・河野貴雅氏（宮崎化石研究会）等の御教示によると、ツキガイ科（ツキガイモドキ等）・フネガイ科（サルボウやアカガイ等）であるという。

凝灰岩2：推定始良カルデラ起源の溶結凝灰岩。

凝灰岩3：天草砥石等のような比較的の細かいもの。

砂岩：細粒から粗粒まで多様である。その中で、特に珪質の強いものについて珪質砂岩、特に目の細かいものについて細粒砂岩、硬質でやや青みがかったものについて硬砂岩とした。

頁岩：その風化面の色調から赤色頁岩・黒色頁岩・緑色頁岩に分けた。

チャート：粗質から緻密なものまで、また色調も乳白色系のものを中心に、灰白・灰黒・灰綠・淡綠・赤色等のさまざまな色調が見られる。赤チャート以外は一括してチャートとした。

玉髓：白色へ淡褐色で不透光あるいは半透明で珪質の強い石材をあてた。

(藤木)

⑦ガラス製品の分類基準

1. 製瓶工法 吹きガラスによるものと機械によるものに分類した。前者は成形時の痕跡がガラス製品の表面に横方向に向かってらせんを描くように観察される。これに対して機械製瓶は成形を型に入れて行うので、口又は首から底部にかけて型の痕跡である「合わせ目」が残る。技術的には吹きガラスの技術の方が古

くから存在する。また、合わせ目は口部まで及ぶか否かで分類している。首部付近で合わせ目がとぎれる理由は、型成形後、口部を別の工程で作り出すためである。この製瓶法は「半機械製瓶」と呼ばれる。これに対し、口部にまで合わせ目が延びる理由は、口部を作り出す工程を一括して進めているためである。この製瓶法は「完全機械製瓶」と呼ばれる。技術的には「半機械製瓶」の方が古い。また、技術の進歩によって、合わせ目は細く、目立たなくなる。ただし、合わせ目が残ると不都合な製品（ランプ等）では、吹きガラスの技術が残る。

2. 成形不良 器形の歪み、気泡（アワ）、厚みの不均一（底偏肉）等である。いずれも製瓶時の不良であり、時期が新しくなるほど成形不良はなくなっていく。

3. 色調 透明度、色味、濃度で分類している。色調を観察することによって内容物をある程度予想することができる。

4. 商品名 エンボス（陽刻）、ラベル、プリントで施される。エンボスとは、瓶表面に凸状に商品名等が刻印されたものである。古手の瓶に多い。瓶の時期が新しくなるにつれて、エンボスからラベル・プリントへ移行する。

(竹田)

第5節 普及活動

宮ノ東遺跡の調査中には、諸般の都合により広く一般市民対象の現地説明会等は開催できなかったが、発掘作業員向けのミニ説明会を随時開催した。

現地の発掘調査終了後、平成20年3月までの宮崎県埋蔵文化財センター主催で宮ノ東遺跡を主としたものとして、次のような企画が進められた。

『遺跡をたずねて』

「この世の鉄・あの世の鉄」(安藤2005.2)

「発掘からみたリサイクル事情」(竹田2005.10)

「古墳時代の火薬」(今垣2005.11)

『宮ノ東遺跡調査報告会』(西都原考古博で開催2008.2)

「大規模災害からの復旧～奈良時代の事件簿」(藤木)

「考古学からみた台所風景～古墳時代の一家團欒」(今垣)

「ガラスの考古学～出土した日葉瓶の歴史」(竹田)

(藤木)

第IV章 発掘調査の記録 (A区・B1区・B2区)

第1節 旧石器時代の調査

1. 基本土層

本遺跡の土層堆積は、基本的に小林軽石を含むローム層前後まで縄文時代以降の堅穴住居跡等によって削平されており、削平は浅くてもML1相当層、深い時は霧島イワオコシまで及ぶことを最大の特徴とする。

したがって、基本土層の作成は、旧石器時代の調査過程で得られた所見を中心に、V～VII層までをC区確認調査、XV～XX層までを調査区すぐ西隣の宅地跡に露出したカット面(図版47-5)、XX層以下を里道の壁面でそれぞれ観察して行った。なお、I～IV層までは第III章で触れたように、調査の都合上的人工層位である。

宮ノ東遺跡の基本土層

I 层	: 縄文時代以降の包含層ならびに遺構埋土
II 层	: "
III 层	: "
IV 层	: "
V 层	: 鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)
VI 层	: MB0相当
VII 层	: ML1相当
VIII 层	: 小林軽石を含む褐色土 (Kr-Kb)
IX 层	: MB1相当
X 层	: ML2相当
X I 层	: 始良Tn火山灰 (AT)
X II 层	: MB2相当
X III 层	: MB3相当
X IV 层	: ML3相当
X V 层	: 霧島アワオコシ (Kr-Aw)
X VI 层	: ML3相当
X VII 层	: 霧島イワオコシ (Kr-Iw)
X VIII 层	: MLA相当 (いわゆるキンキラローム)
X IX 层	: 始良岩戸火山灰 (A-Iw)
X X 层	: 碾層
X X I 层	: 宮崎層群

なお、ここで示した基本土層は、A・B1・B2区ならびにB1区北半で対応可能である。C区は全く異なった土層堆積となる(詳細は第VII章を参照)。(藤木)

2. 微地形の復元

第II章で触れたように、本遺跡の立地する岡富段丘面は新田原台地の高位段丘(新田原段丘面)が更新世に古一つ瀬川によって開析され形成された。完新世以後、岡富段丘面もまた一つ瀬川により開析され、今に見るような沖積平野が形成された。

旧石器時代の遺物包含層調査は、C7～10・E10～12/16・F9～12/16グリッドでX I層上面まで掘削した(第6図)。等高線図は、C～F6～9グリッドまでのサブトレンチからVII層およびIX層上面の標高を記録し、その数値に基づき内挿法で作成した。その結果、IX層上面の微地形は、B1区で西に延びる東西方向の尾根があり、尾根の北にあたるE/F16グリッド周辺には窪地状の低地が広がる。低地は、ラミナ構造のあるX I層が厚く堆積することから、AT堆積時は静水環境下であった(第6図土層断面図)。また、B1区の尾根から南に向かって緩く下がり、E/F10グリッド周辺で深い谷状の低地が入る。この低地を挟んで南側は、調査区南端の現在の崖に向かってなだらかな上り勾配となる。

3. 磨

C9・E9～12・F9～12グリッドにおいて、VII・IX層の層境で石器を伴って磨を検出した(第7図)。磨の分布は大きく3箇所に分かれます。

SII・2はE/F10グリッド周辺の深い谷状の低地に沿った緩斜面に分布する。磨石材構成はいずれも砂岩が大半で、尾鉛山酸性岩類がわずかに含まれる。磨の赤化率は高い(第4表)。SII・3はSII・2に比べ、磨の点数が少なく、小規模である。また、SII・2と同じくE/F10グリッド周辺の深い谷状の低地に沿った緩斜面に分布する。SII・4はB2区北端壁際に分布し、構成磨も3点と少ないため、全体像については不明である(図版6-2)。周辺で旧石器の出土はない。

その他、縄文時代以降の調査時に、C3C グリッドで赤化した砂岩礫がまとまって出土した。これらは、周辺に旧石器が分布することから見て、後世に削平を受けた疊群構成疊である可能性が高い。

4. 石器 (第 27~31 図)

石器は A・B1 区より出土した。そのうち、疊群を検出した A 区北半にあたる C9・E9~12・F9~12 グリッドでは、チャート・日東産黒曜石・砂岩・尾鈴山酸性岩類製石器とホルンフェルス・頁岩製石器の一部が出土した。他グリッド出土品に比べて小型の石器が目立つ。これに対し、A 区南半および B1 区で出土した石器はホルンフェルス・頁岩製が大半で、大ぶりの石器や尖頭器類の単独出土例が多い。以下に、出土石器の特徴を石材別に記述する。

チャート製石器 (1・2・7~9)

F9~12 グリッドで集中して出土し、ナイフ形石器 (1)・台形石器 (2)・剥片・石核 (7~9) がある。ナイフ形石器のサイズは、他グリッド例と比べて小型である。剥片 17 点のうち、いくつか石核と剥離接合するものがあり遺跡内の石器製作を窺わせる。剥片剥離は分割疊より打面転移をほとんど介すことなく進行するもの (7・9) と石核周縁よりランダムに進行するもの (8) があり、いずれも小型の剥片を獲得している。ナイフ形石器・台形石器はこれら小型の剥片を用いて製作される。

日東産黒曜石製石器 (3~6)

E10/12・F10/11 グリッドで集中して出土し、角錐状石器 (3)・二次加工ある剥片 (4~6)・剥片がある。石核は出土していない。角錐状石器は小型品で、欠損著しい。二次加工ある剥片は縦長剥片あるいは幅広剥片素材である。剥片は 32 点あり接合が 8 例見られた。石核はないものの、ある程度の剥片剥離ならびに二次加工があったものと推定される。

流紋岩製石器 (21~25・52・73・77)

E10/11・F9 グリッドより剥片・石核 (21~25) が出土した。剥片・石核の剥離接合があるが、偶発的に割れてしまったものが大半である。二次加工を伴うような製品は出土していない。また、後世の遺構埋土中で

あるが E/F15 グリッドでナイフ形石器 (52)・両面加工石器 (73)・削器 (77) が出土した。なお、未図化分として剥片 37 点がある。

ホルンフェルス・頁岩製石器

(10~20・30~51・53~72・74~76・78~89)

ナイフ形石器・台形石器・角錐状石器・搔器・ドリル・剥片・石核が出土した。E11・F11/12 グリッドで出土したナイフ形石器 (10~12)・台形石器 (13)・搔器 (14) は他グリッドのものと比較して小型品が多い。角錐状石器 (18) については、接合は未確認ながらも 18 と同一母岩のものとして E10 グリッド出土の剥片・石核がある。縦長剥片剥離を進めつつ最終的には横長剥片剥離で終わるものである。また、後世の遺構埋土や包含層から回収されたナイフ形石器・角錐状石器・削器等 (30~33・35~48・50~72・74・75・79・84・85・87~89) は、その出土位置より A 区南半に本来分布したものと見られる。ナイフ形石器・角錐状石器ともに比較的大ぶりである。削平の影響も考慮すべきであるが、全体に散漫な石器分布であり、A 区南半においては頻繁な石器製作はなかった可能性が高い。なお、未図化分は剥片 138 点・石核 4 点がある。

砂岩製石器 (27~29)

蔽石が大小 2 点出土している。2 点とも棒状で、両端に蔽打痕が観察される。最大長はそれぞれ 10.2 cm (27)、19.0 cm (28+29) を測る。とともに F11 グリッド出土で、使い分けによる大小のセット関係が予想される。27 は疊面に被熱による赤化が見られる。28+29 も疊面が赤化し、胴部で折れている。このことから、2 点の蔽石は、使用または欠損後、疊群の構成疊として再利用された可能性がある。

尾鈴山酸性岩類製石器 (26)

剥片 1 点が F9 グリッドから出土した。製品・石核は出土していない。縄文石器混入の可能性も残るが、風化の進み具合より旧石器と判断した。

なお、尾鈴山酸性岩類製蔽石や桑ノ木津留産黒曜石製剥片もⅧ・Ⅸ層中より出土したが、縄文石器の混入と見られる。

(竹田)

第2節 縄文時代の調査

1. 遺構(付図)

縄文時代各期の遺構は、後世の削平等により大幅に情報が失われている。確実な遺構としては晚期前半の堅穴住居跡 S6635 のみである。S6635 は弥生時代以降の集落の主分布域から外れていたことにより削平を免れたと見られる。長軸 3.0+αm の円形プランで、浅い掘鉢状に床面から壁面にかけて緩やかに立ち上がる。S6635 以外で縄文時代の堅穴住居跡の可能性を残すものとして、埋土中に縄文時代遺物のみを包含した S1095・9034・9761・9827・9873 が挙げられ、いずれも方形プランである。後期後葉から晚期前葉の遺物量から推すと、本来は調査区の広範囲にわたって当該期の堅穴住居跡群が存在し、廃棄場等も見られた可能性が高い。この他、底面に小穴を持ち平面椿円形をした陥入穴状遺構 S1135・2330 も、詳細時期は押さえられないながら縄文時代の可能性が高い。埋土は黒色で非常に硬質であった(図版 7-2)。

なお、埋土中に縄文時代以前の遺物のみを含む土坑・ピットがあるものの、縄文時代の遺構であるかは判然としない。赤化粧のグリッド別分布は、集石遺構・炉穴の存在を窺わせる状況ではない。これは、早期土器の少なさからも肯ける。(藤木)

2. 土器(第32~36図)

早期後葉～末の土器(90~97)

縄文土器全体の出土量の 0.9% (比率は破片点数による。以下同じ) である。またその出土分布は調査区のほぼ全面に広がるもの、各型式に明確なまとまりではなく、散漫である。土器型式としては桑ノ丸式(90)・妙見式(91)・片野 3 式(92~95)の他、山形押型文を施すもの(96)がある。

前期の土器(98~104)

縄文土器全体の出土量のうち 0.3% と最も少ない。貝殻条痕文地にミミズ腫れ状の微隆帯文を持つ一群を轟式の範疇として捉えた。深鉢のみの出土である。轟 C 式(98~100)・轟 B 式(101・102)の他、103・104 はヘラ描条線文のみの残存ながら轟 D 式と見られる。

中期前葉～中葉の土器(105~126)

縄文土器全体の 6% と前期までと比べ多くなる。出

土分布は F15・B13・E/F8 グリッドを頂点とする三角形におおよそ収まる。B2 区にまで分布域が広がる。また F9~11/14・E9~10 グリッドは特に出土量が多く、分布にまとまりが見られる。船元 II 式(105~123)・船元 III 式(124)がある。胎土は 1~2 mm 大の白色粒(長石か)・半透明粒(石英)を多く含む。107・116・120・122~124 は黒色の雲母を含む。125 は縄文の結節が太く、器壁も厚めで胎土も異なる船元式である。

後期中葉の土器(127~147)

縄文土器全体の 6% を占める。出土量や出土分布は中期とあまり変わらない。E/F9 グリッドとその周辺は中期の場合と同じく出土量が卓越するが、B2 区南半(B13・C13/14 グリッド)にもまとまった分布がある。深鉢は磨消縄文系・貝殻条痕文系ともに見られ、北久根山式(127・128)・納曾式(129)・西平式(130)・丸尾式(133~135)がある。131・132 は台付皿ないし浅鉢の一部と見なせるが、全形は不明である。また、136~147 は台付皿の口縁部と脚部で、磨消縄文系・貝殻条痕文系深鉢に伴う器種と考えられる。台付皿は調査区全体で 22 個体確認された。

後期後葉の土器(148~182)

縄文土器全体の 58% と最も多い。出土分布は調査区全体に拡大し、A 区北半(D9/10・E/F8~10 グリッド)や B2 区南半(B12/13・C12 グリッド)以外にも B1 区(F15/16)・A 区南半(D3/6 グリッド)で出土集中域が認められるようになる。148~176 は三万田式土器とその変容、後続形態である土器群である。深鉢は口縁端部内面に沈線を持ち、内外面をミガキ調整されるもの(148)、ミガキではなくナデ調整(151 等)、沈線を有さず、ナデ調整のみ(158 等)に分類される。156・157・173 は浅鉢、174~176 は高坏坏部とその脚部である。高坏は調査区全体で 5 個体確認された。

晚期前葉の土器(183~193)

後期後葉の土器群と比べて貝殻条痕文や粗いナデ主体の器面調整を施す作りの粗雑な一群を晚期前葉(後期後葉も一部含む)とした。縄文土器全体の 27% を占める。出土分布は後期後葉の場合と同じ傾向にある。特に B2 区南半(C/D12/13・D13 グリッド)が調査区全体で最も多く出土する。A 区南半の西側では出土量が増加傾向にある。183 は孔列文土器、184~187 は口縁

に断面三角形の薄い粘土帯を貼り付けた形状をなす。

この他、後～晩期の深鉢底部（188～198）がある。194は底部外面に焼成後穿孔が、196～198は底部に網代痕がある。土器片鍤は11点、円盤状土製品は49点出土した（199～222）。
（今塙屋）

3. 石 器（第42～68・141・157図）

No.付遺物（341）は後～晩期の堅穴住居跡S1095床直上出土の敲石1点のみである。342～354・362は縄文時代の可能性の高い遺構埋土中より出土したもので、磨製石斧未製品・敲石（砂岩製5点・尾鈴山酸性岩類製3点）・台石・筋砥石・有孔石製品未製品がある。尾鈴山酸性岩類製敲石は全て磨石の転用である。

包含層や後世の遺構埋土中出土で明らかに縄文石器と言えるもので、石刀・類石刀・類石棒・切目石鍤（355～361・363～369）がある。石刀は全て天附型の破損品である。類石刀は形態が特異なばかりでなく石材も本造跡にあって異質である。類石棒は石材の類似を根拠に磨製石斧未製品の可能性を残す。切目石鍤は扁平品と分厚品がある。A区南半とB1区北半とに分布する。

370～929は包含層や後世の遺構埋土中出土で、一部弥生石器かと推測されるものを含みつつも、大半は縄文石器と言えるものである。

腰岳産黒曜石製石器（370～379）

調査区全体で出土し、特にE/F18/19・B～D11～13・E10/11周辺・E/F8周辺・D/E2/3周辺グリッドに集中する。打製石鍤・剥片・石核がある。打製石鍤は全て平面正三角形で基部に抉りがある。剥片は、背面縦面（稜が通る）の綫長のもので、石核より最初に剥離されたものであろう。石核からは、最終的に周縁から内に向かって小型剥片剥離するもの、疊打面より打面調整なく小型剥片剥離を企画するものがある。前者は剥片剥離の最終局面であり、剥片剥離開始時点から同様の剥離であったかは定かでない。いずれにせよ、残核重量2～7g程度とかなり小さくなるまで剥片剥離を維持している。石質の良好でない379については早い段階で放棄されたものか。

淀姫産黒曜石製石器（380～410）

A区北半・B2区南側に大半が集中し、特にB/C12/13グリッド周辺・D7/9・E8/10・F8/11グリッドに多く

分布する。A区南半・B1区で少ない傾向がある。打製石鍤・削器・二次加工ある剥片・剥片・石核・原石がある。剥片剥離は、原石から搬入されている。原石には試し割りと思しき1～数回の剥離が見られる。疊分割の後、基本的に打面調整なく疊面から求心状に小型剥片を剥離する。打面を準備するものは少数である。作業面再生剥片が一定数見られる。小型剥片等は打製石鍤・石匙・削器・二次加工ある剥片等の素材となつたものと見られる。打製石鍤は縦齒縁を意識している。石匙は横匙で刃角は鋭い・鈍い両者がある。この他、610の縦長剥片は出土石核等から予想される剥片剥離に合致しないものである。

桑ノ木津留産黒曜石製石器（411～418）

調査区全体に非常に散漫に出土し、打製石鍤・楔形石器・二次加工ある剥片・剥片・石核がある。打製石鍤は縦齒縁小型品を含む。楔形石器は小型剥片の獲得にあつたものか。原石はいずれも重量4～5gと小振りで、表面の特徴は三者三様である。

上牛鼻産黒曜石製石器（419）

剥片等が調査区全体に非常に散漫に少量出土し、打製石鍤1点のみ固定化した。

ガラス質安山岩製石器（420～434）

C～E3～6グリッドで削器・二次加工ある剥片・石核が散漫に出土した他、打製石鍤・石錐・石匙といった製品のいくつかは単独で出土した。打製石鍤は小型剥片の縁辺を粗く整形したもので素材面を全面に残す。石匙は縦形・横形がある。

日東産黒曜石（435～443）

調査区全体に分布は広がり、特にE8グリッドを中心としてA区北半に多く出土した。石錐・楔形石器か・剥片・石核がある。剥片は幅広剥片が多い。石核は最終的に打面と作業面を入れ替え小型剥片が剥離される。剥片・石核両者に見られる剥片剥離は一致しない。

姫島産黒曜石製石器（444～453）

調査区全体で出土し、特にF18周辺・B～D12/13・E10/11周辺・F9周辺・E/F2周辺グリッドに集中がある。打製石鍤・石匙・二次加工ある剥片・石核がある。打製石鍤は弱い縦齒縁である。石核は最終的に重量4～7gとたいへん小さくなるまで剥離が続く。

チャート製石器（454～479）

打製石器・石匙・石錐か・二次加工ある剥片・微細剥離ある剥片・石核がある。調査区全体に出土し、出土量は多い。打製石器の形態は一様でなく、各時期のものが混在している。

玉髓製石器 (480~482)

石錐・石匙、未図化ながら打製石器と思われるもの・石匙つまみ部の破片がある。全て別母岩で碎片等もないことから、各石器は搬入品であろう。

ホルンフェルス・頁岩製剥片石器 (483~544・546~609)

打製石器・石匙・石錐・二次加工ある剥片・両面加工された石器・石核1~6がある。打製石器は特に裏面に素材面を大きく残す、あるいは粗い成形の後、周縁のみ細かに整形するものが目立つ。鋸歯縁で作りの丁寧なのは495のみである。石匙は幅広剥片をほとんど改変することなく末端の角につまみ部を作出するもので、他石材製に比べ粗野な作りとなっている。石錐はその大半が平面二等辺三角形へ涙滴・木の葉形であり、断面台形～レンズ状の錐部を持つ。1点のみ細長い断面三角形の錐部が作出され、他と一線を画する(510)。打製石器と石錐の分布は重ならず、前者はA区北半からB区に分布するのに対し、後者はA区北半・南半の境付近によく分布する。分布から見ると、石錐の大半は弥生石器の可能性がある。

石核は、石材利用や剥片剥離の特徴より石核1~6がある。石核1 (547~568) は最大で大人の拳大の良質の円錐素材。剥片剥離には幾つかのパターンがある。1つは、縫分割の後、打面調整を介さず、分割面を薄くカットするかのように縫面から剥片剥離する。少数派で打面調整を介することもある。2つは、あたかも細石刃核のような残核形状をするもので、小型の縦長剥片剥離を企画する。一部には細石刃核と見紛うものもある。この他、厚手の剥片の剥片主要剥離面で小型剥片剥離するものがある。石核2 (569~572) は縫の小口で剥片剥離するもので、特に打面に対して下窄まりになる縫を用いることで、石核成形なくそのまま縦長剥片・先細りの剥片等を剥離することに成功している一群。石核3 (573~581) は縫の広口で剥片剥離するもので、石核成形はほとんどない。得られた剥片は規格性に乏しかったものと見られる。石核4 (582~588) は縫打面から内に向かって次々に不定形剥片を剥

離する一群。縫面に対して若干の打面調整を加えることもある。分割縫素材の可能性が高い。石核5 (589~601) はいわゆる縫器と識別困難な一群。そこで、刃部と見られる位置に摩滅の見られるものを縫器とし、それ以外を石核とした。石核6 (602~609) は上記石核1~5に該当しないものをあてた。

円盤状石器 (610~627)

扁平縫あるいは縫片を素材に、素材を大きく変形させることなく、簡単な成形によって円盤状に仕上げたもの。石材は砂岩が多く、他に千枚岩・打製石斧に好まれる節理の目立つホルンフェルスが見られる。成形された縫辺が摩滅するものもある。

打ち欠きある縫 (628~632)

縫に不規則な打ち欠きを入れたもの。片方に聞く痕状の扁平円縫を用いるものは特徴的であり、必ず両側縫に打ち欠きを持つ。

潰れるある縫片 (633)

太形始刃石斧に好まれる硬砂岩製。縫片の長辺が大変よく潰れる。この他、硬砂岩製二次加工ある縫片 (545)・石核 (730・731) も少量出土した。

縫器 (634~667)

縫端が剥離され、その縫辺が潰れが観察されるものとした。潰れない場合は、石核に含めた。石材はホルンフェルスを中心とし、少數の砂岩・硬砂岩・尾鈴山酸性岩類が見られる。ホルンフェルス製のものは縫の一端を数回打ち欠いて刃部を設けた簡素な一群がある。石核の転用の可能性が高い一群がある。砂岩製には縫の一端を打ち欠いたものが多く、中には台石等の転用と見られるものもある。刃部は軟質石材であることも起因するのか、他石材製のもの以上に角が取れて丸みを帯びることが多い。尾鈴山酸性岩類製・硬砂岩製のものは分厚い剥片素材あるいは縫片素材であり、刃部が良く摩滅するものが多い。

素刃石器 (668~729)

縫片等に二次加工があり定形化しないものを一括りにしたもの。大半は縫面より打面調整等なく剥離された、比較的大振りの剥片素材。縫から早い過程で剥離されたと見られる、背面全面が縫面となるものが好まれる。二次加工は素材剥片の長辺にあることが多い。

打製石斧 (737~769)

堆積岩源で節理構造により薄くはがれやすいホルンフェルスが好まれる。板状剥片素材で基部は長細く尖り両側縁から入念に調整されるもの(737・738)、幅広の剥片素材で、基部端・下端は丸い木の葉状のもの(739・740)、これらより小ぶりのもの(741・742)、砂岩の大形礫片素材で周縁より粗く成形し、弥生時代の可能性があるものの(743・744)、基部から刃部にかけてなで肩に広がるもの(745~751)が特徴的である。

有肩打製石斧(770~772)

肩の張りが明確である。弥生時代以降の石器である可能性が高い。いずれもホルンフェルス製で、中には团扇のような大形品も見られる。

横刃形石器(773~780)

一見打製石斧に類するものの、平断面形が極端にシンメトリーでないものをあてた。一長辺が刃部に相当すると見られる。

部分磨製石斧(781~793)

ホルンフェルス製が多く、刃部周辺のみ研磨されるものである。全体に薄手で礫面を刃部のカーブとして取り込むもの、脇部は厚手で刃部周辺のみうすく礫面を刃部のカーブとして取り込むもの、打製石斧の石質に近く素材・調整ともに打製石斧に類するものがある。

磨製石斧(794~926)

単独で弥生石器とわかるもの、あるいは弥生時代遺構埋土からの出土品・古墳時代以降のNo.付取り上げ品を除くと、磨製石斧は546点出土した。出土分布はB1区北半のF18/19グリッド、B12グリッドを中心とするB2区、D~E6~8グリッドを中心としたA区北半で多く、A区南半・B1区は相対的に少ない。そのうち、A区の遺構埋土や包含層より出土した147点を図化した。

ホルンフェルス製磨製石斧ならびに未製品(794~798・805~830・832~923・925・926)はいわゆる乳棒状石斧で、製作工程の追える資料が多数出土した。粉状に風化する石質のものが大半を占める。まず、礫から大きな剥片を獲得する。中には、剥片に礫面のカーブを取り込み、そのまま刃部のカーブにあてるものも少なくない。次いで、剥離・敲打により成形してゆく。剥離→敲打と単線的な作業工程ばかりではなく、剥離→敲打→剥離というように必要に応じた成形工程である。脇部断面は凸レンズ形あるいは蒲鉾形に仕上げら

れ、多くは側面に稜が立つ。脇部断面蒲鉾形の場合、側面から見ると、完全なシンメトリーとならず、正面側が膨らみ裏面は平坦となる。この工程に相当する打ち溝(927~929)を一部図化した。礫面のカーブを刃部に活かす場合は、礫面以外について刃部端一杯まで敲打整形する。刃端のみ礫面を残す場合もある。基部は断面凸レンズ状であり、うすく扁平なものと膨らみのあるものとがある。前者は、基部端の成形剥離が薄く仕上げられたため、結果、脇部厚より薄くなっている。後者は成形剥離後に大半は整形敲打で覆われる。研磨は刃部周辺に限定されることが多く、両刃に仕上げられている。欠損等の後、敲石に転用されるものもある(732~734)。

この他の形状をしたものとして基部が細長く尖る磨製石斧(794~797)・剥離・敲打整形後、基部端を丸くかつ脇断面を橢円形になるよう全面研磨する磨製石斧(798)・断面橢円形で、脇部から刃部まで幅が狭く、鑿状の磨製石斧(805~809)・扁平で幅狭な磨製石斧(810~812)がある。

非ホルンフェルス石材のものとして、蛇紋岩製の磨製石斧(924)・砂岩あるいは硬砂岩製の磨製石斧(799~804)がある。後者のうち801・803は石斧未製品が欠損後、刃部側の方(803)を敲石に転用したものである。801はM4024(F11グリッド)出土、803はS3244(F19グリッド)出土であり、少なくとも70m以上離れた位置での接合関係となった。

その他の縄文石器

有孔石製品の一部(第141図2350~2352)・類石冠(第157図2652~2655)も縄文石器の可能性を残すものの、出土遺構等を優先して第4節で掲載している。また、図化対象から落としたものとして、縄文時代以降の打欠石錐(図版69-3)がある。石材比は砂岩>ホルンフェルスで、重量は最大で500gで大半が重量200g以下と小さい。B12グリッドを中心としたB2区南側、C8・E8グリッド他のA区北半に多く出土し、B1区・B1区北半に少ない傾向がある。

この他、弥生時代以降の遺構埋土・包含層出土品に縄文時代の敲石・磨石・凹石・砥石・台石等も含まれるであろうが、明確な抽出は困難であった。出土遺構等を優先してそれぞれ掲載している。

(藤木)

第3節 弥生時代の調査

1. 遺構(付図)

1-1. 壓穴住居跡の時期と分布

中期後葉～後期前葉の壓穴住居跡が A 区北半を中心として 36 軒・B1 区 2 軒の合計 38 軒検出された。一部、出土土器より見て中～後期と幅を残すものもある。前期末～中期初頭・後期後葉の土器も出土するが、壓穴住居跡は未確認である。

中期後葉～後期前葉の壓穴住居跡は、①高密度の切り合い関係を持つ、②旧地形のうち、周囲より標高のやや下がる位置に多い、③遺構密度の低い範囲に多い、という 3 点から、本来、高密度で壓穴住居跡群が広がっていたところを、古墳時代以降の削平等により見かけ上の遺構数を大幅に減らしたものと推測される。弥生時代の壓穴住居跡が検出されなかった B2 区をはじめ、遺構密度の低い地点においても、包含層中や後世の遺構埋土中から多量の弥生時代中～後期土器が出土したことからも窺われる。

1-2. 壓穴住居跡の構造・埋土

明確な円形プランは少ないが、D/E5/6 グリッド周辺に集中する (S3658・3713・3751・4711)。他は方形プランで、間仕切り構造を持つものや (S5231)、壁に突出部を持つもの (S8869)、大型土坑を持つもの (S3795) 等がある。床面はその大半が Kr-Kb～ML1、場合によっては AT 前後や Kr-Iw のことあったが、いずれも地山に掘り込まれる。壁に沿ってベッド状遺構が巡り、床面が 2 段に分かれるものもある (S3713・3734・4711)。埋土は褐色土ブロック (遺構床掘削面の地山ブロック) を含む黒褐色土で、縄文時代例より黄色みが強くしまりにかける。貼床のあるものについては、褐色土あるいは Kr-Kb ブロックの混じる黒褐色土が貼られていた。床直上等で土器等の大量出土があったのは S3713・3795・4711・5231・6851・8721・8869 である。S3795 は特に床直上等で土器等の大量出土があった。S4711 は壓穴中央付近に遺物分布が偏り、ベッド状遺構床面と同レベルで床面より若干浮いて出土した。なお、ピット S3745 (中期・平面的に壓穴住居跡 S3734 と重複) から磨製石鎌 (974)・礫器 (975)・偏平片刃石斧 (978) 等がまとめて出土した。

1-3. その他の遺構

この他、埋土中に弥生時代以前の遺物のみを含むピットも多数検出されたが、明確に弥生時代のものと言え切れるものはなかった。したがって、掘立柱建物跡の有無は明確でない。

(藤木)

2. 土器 (第 37～41 図)

前期末～中期初頭 (223～247)

E/F8・C6・D4 グリッド周辺にまとまって出土した。下城式の古式タイプ・下城式・いわゆる亀の甲タイプの甕、板付式・西部瀬戸内の特徴を持つ壺がある。胎土は、中期後葉～後期前葉に比べ砂粒そのものの混入は少ない。1 mm 以下の円滑度の高い赤色や白色砂粒・2 mm 大の石英粒・風化した雲母を含む。

中期後葉～後期前葉 (248～325・331～333・335・336)

中溝式系土器が調査区のほぼ全域から出土した。甕は口径から大型甕 (40cm 大・57cm 前後)・中型甕 (25cm 前後)・それ以下の小型甕と分類した。器種を問わず全体的な特徴として、円滑化した 1 mm 以下あるいは岩片状で 2 mm 以下の赤褐色・褐色・灰色の砂粒が多く入る胎土となる。浅鉢や高杯は、甕や壺に比べて砂粒の混入は少ない。なお、313 は他の胎土とは異なり 1～2 mm 大・5～10mm 大の石英粒が混入する。色調は褐色・橙色・黄白色、焼成は良好で 263・273 といった大型品の一部を除いて器壁内部まで還元が進む。この他、包含層中出土で装飾壺 (331～336) がある。(今塩屋)

なお、壓穴住居跡 S3795・4070 埋土中より管状土錐が 1～2 点出土したが、混入品であろう。

(藤木)

以下では、当該期の土器を多く出土した例について説明する。

S3713 (250～261) 甕のうち 250～252 は口縁部の屈曲が明確で、その付け根のしまりがよい。突帯の刻目は他遺構土器より大きめで、その間隔も広い。また、底部は明確な上げ底で端部は外方へしっかりと張り出す。253 は突帯がなく、口縁部の屈曲が弱い。257 は底部を失う高杯である。

S4070 (264～266) 甕 (264～266) は、小粒でその間が狭い突帯刻目で、口縁部の屈曲が弱い一群である。266 の底部は平底に近い。

S4711 (267~290) 最も出土量が多く、良好な器種のセット関係が認められた。中型甕 (267~271) は、口縁部付け根のしまりがなくなり、直線的な胴部に接続する形態が多い。底部 (280 等) は S3713 例と類似する。大型甕 (274・282) は、口縁部付け根のしまりが強くなり、器形全体が丸みを帯びている。壺は大型壺 (283) の他、加飾された中型壺 (284・285) がある。286 は動先口縁の須玖式系壺である。290 は口縁部の内清気味の大型鉢か。

S8721 (318~325) 壺 (319)・甕 (320~323) とともに大型品が多い。大型甕は S4711 例と同形態で、はね上げ口縁 (320) も見られる。類品に 313 等がある。後期後葉 (326~330・334・338~340)

土器自体は調査区全体から少數出土する。在地系土器群 (326~330)・凹線文系土器群 (338~340) がある。340 の胎土と色調は在地系と異なる。

この他、中~後期の勾玉 (337) がある。(今塙屋)

3. 石 器 (第 69~74 図)

No. 付 (930~965) には削器・石核・礫器・磨製石斧とその未製品・打欠石錐・敲石・磨石・凹石・筋砥石・台石・円鍬がある。いずれも中期後葉~後期後葉のものである。削器・石核・礫器はいずれもホルンフェルス製で、繩文石器との区別が十分でなく混入の可能性を残す。932 は石材や形状から見て、太形蛤刃石斧の未製品である。磨製石斧 (933・934) は一見、繩文時代の磨製石斧であるが、933 の研磨の程度や基部端の形状等から弥生石器と見てよからう。打欠石錐は全て砂岩製で、1 軒の堅穴住居跡に最大で 2 点 (S4711) と少ない。S4711 の場合、埋土中出土分を加えて 5 点である。敲石石材は 8 点中 4 点と半数が砂岩で、ホルンフェルス 3 点、尾鈴山酸性岩類 1 点と続く。磨石は敲石への転用例も含め 2 点と少ない。石材は砂岩・尾鈴山酸性岩類各 1 点である。台石石材は 14 点中 13 点と大半が砂岩で、1 点のみ尾鈴山酸性岩類である。939 は全面にわたって敲打整形された可能性がある。この他、尾鈴山酸性岩類の円鍬がある。敲石・磨石・台石等の礫塊石器の石材は砂岩優勢で尾鈴山酸性岩類はあまり用いられない。

単独で明らかに弥生石器と言えるものとして磨製石

鐵ならびに磨製石鐵用石核・礫器・類磨製石劍・柱状両刃石斧・扁平片刃石斧・太形蛤刃石斧・磨製石斧を敲石に転用したものの・磨製石庵丁 (966~982) がある。

磨製石鐵の色は緑・黒があり、緑には素材剥片・石核がある (966~974)。大形品は根抜き溝が明瞭である。なお、未図化ながら、赤色頁岩の磨製石鐵用石核 1 点も出土した。赤色頁岩の磨製石鐵はない。

石斧類のうち、太形蛤刃石斧 (797) は硬砂岩製である。全面敲打整形の後、全面研磨している。刃縁は使用による摩滅が著しく、刃縁に直交して削痕が粗く走る。基部側を大きく欠損する。柱状片刃石斧 (977) は縦方向に大きく 1/2 以上、さらに基部も欠損する。刃縁に対して石の目を直交させる。全面研磨で側面はやや膨らむ。刃端は摩滅する。扁平片刃石斧 (978) は風化面が 3 面あり、その重複より新しい方から灰色・褐色・灰色みのある褐色に分けられる。後二者は連続的であり、灰色と後二者の関係は断続的である。この風化面の切り合いから、左側面が何らかの理由により剥離成形され、その後、右側面のように面上に研磨されることなく、稜を残す格好で研磨されたとわかる。おそらく、もう一回り大形であった石斧が欠損し再加工される中で、求められる刃部幅を得るために左右非対称の研磨成形となつたのであろう。石の目は、刃縁に対して平行方向の斜めである。最終的に基部を欠損する。

976 は正面・裏面の側縁付近に偏って研磨がある。欠損著しい。砥石の可能性も考えたが、石材が他砥石と合わないため除外した。正面・裏面に残される擦痕の方向が異なること等より、擦切用の石器でもないと見た。繩文時代の石刀の可能性は、周辺遺跡を含め利用石材が異なることから除外した。磨製石斧・磨製石劍 (未製品) 等が候補となろうか。

983~1018 は弥生時代の遺構埋土中より出土した素刃石器・円盤状石器・有肩打製石斧・磨製石斧とその未製品・敲石・磨石・砥石・台石等である。(藤木)

4. 金属器 (第 74 図)

形態より弥生時代のものと見られる鉄製鏃がある (1019・1020)。1020 には、茎部に木質が残る。(竹田)

第4節 古墳時代の調査

1. 遺構 (第8~10・12図ならびに付図)

1-1. 壊穴住居跡

古墳時代に相当する壊穴住居跡あるいはその可能性がある遺構が418軒検出された(第1表)。また、遺構精査の過程で遺物出土状況からは壊穴住居跡であろうと思われるが、そのプランを描めなかった遺物集中区6地点がある。それらについてはグリッド一括のNo.付遺物として記録した(B12・B14・B15・D4・D13・E10グリッドNo.付遺物)。

1-1-1. 概要

i. 壊穴住居跡の軒数

5C代に収まるもの19軒、6C代に収まるもの108軒+遺物集中区4地点、7C代に収まるもの260軒+遺物集中区2地点、時期の絞り込みが困難なもの31軒となる。なお、この他に、古墳時代～古代の中で時期を絞り込みなかつたものが325軒ある。

ii. 壊穴住居跡の分布

5C代は切り合による消失を考慮しても、A区北半・B2区に疎らに展開する。A区南半は2軒・B1区は2軒と少ない。台地平坦面の中央付近に集まるような分布を見せる。

6C代はA・B1・B2区全体に分布が拡大する。5C代には見られなかつた段丘崖にほど近いA区南半C/D2/3グリッド周辺や、山際に近いB1区E16グリッド周辺等にも分布する。5C代に多く分布したA区北半・B2区には引き続き多く分布する。

7C代は壊穴住居跡の軒数がピークを迎える調査区のほぼ全面に分布する。5~6C代に引き続いでA区北半・B2区に多く分布する他、段丘崖より約20m内側に入ったA区南半D/E3・F4グリッド、台地中央部のA区北半C/D5~7・E/F8/9・F10/11グリッド、台地中央部から山際にかかるB1区F14~16グリッド周辺に、特に集中して分布する。

iii. 壊穴住居跡に付設された火廻

5C代は壠・土器埋設炉ともに見られず、地床炉がある。6C代は地床炉が引き続き見られ、前葉以降か

らは壠・土器埋設炉を設けるものが始め、6C後半以降は多くなる。7C代は壠・土器埋設炉を持つものが多く、地床炉は激減する。

iv. 壊穴住居跡の床直上遺物のあり方

5C代は11/19軒(58%)・6C代は73/108軒(68%)・7C代は124/260軒(48%)である。5~6C代までは埋土中も含め、多くの遺物が壊穴住居跡中より出土する。7C以降は、小破片が目立ち、床直上遺物の量も減少する。

v. 壊穴住居跡の埋土

5C後葉のものは小林峰石層(Kr-Kb)か上層の褐色ローム面まで下げて検出されることがあった。地点によっては埋土にAT、小林峰石や褐色ロームのブロック等が目立って混入する場合もあったが、埋土は一般に黒褐色土であり、焼土粒および炭化物を含んでいた。繩文・弥生時代の壊穴住居跡埋土と比較して、赤みが強く、また、しまりは弱い印象がある。貼床はよくこなれた褐色土(硬質な地山に由来する)ベースに黒褐色土が斑状に入ることが多い。貼床が見られないものもあった。平面プランは方形が大多数であった。柱穴は明確でないものも少なくない。

6C後葉～7C中葉頃のものは5C後葉例と比べ、埋土が焼土粒および炭化物を含んだ渦った褐色土のことが多くなる。これは、壠構築土等に由来する灰黄褐色・にぶい黄褐色・暗灰黄色をした土が埋土中に混じるためと見られ、他時期の遺構に比べ埋土の粘性がより強くなることも壠構築土由来の土が混じることに関係しているよう。貼床は大半で施され、土質は5C後葉例に近いながらも、色調・混入物の特徴で大きく2分される。1つは拳大の地山ブロックを多く混入するもの、もう1つは土器片や焼土・粘土塊・炭化物を多く含んで黄色みが強くなるものである。後者では、貼床の厚みが10cmほどとなるものも見られた。

1-1-2. 5C代の壊穴住居跡

以下では、主にB1区の壊穴住居跡について説明する。
S9857 5C前葉～中葉。2.3m四方の超小型プラン。床直上より甕・壺・高杯(1049～1059)等が大量に出

土した。床面2段掘りの豊穴住居跡の可能性を残す。
S5349（地床炉 S5350付き） 6C中葉～後葉。南半が別造構により失われ、また東半は調査区外へ延びる。地床炉は直径60cm以上と大型で、高壺・壺(1089・1090)が埋土中より出土した。

S942（地床炉 S940付き） 6C後葉。A区南半で検出。豊穴プランは不明瞭ながら、東壁より2m離れて地床炉がある。

1-1-3. 6C前葉の豊穴住居跡

S2577（竈 S2578付き） 壁溝が明瞭に巡り、壁帯溝の床は凹凸が見られた。床面には住居構築材と見られる炭化材が広がる。焼土は床面に直接貼り付くもの・炭化材の下にあるもの・炭化材の上に載るものがある。西壁付近に砂質の岩塊677g分が出土したが、その性格は不詳である。炭化材はA～Nまで番号を与え、年代測定・樹種同定を実施した（第12図）（詳細は第VII章を参照）。

S6330（地床炉 S6663付き） 床面はA1まで下げられ、四周に高低差3cmのベッド状のテラスが巡る。中央西に寄つて地床炉が付設され、種実等が含まれていた（詳細は第VII章を参照）。埋土中には床直上資料よりも若干新しい6C前葉～後葉にかけての遺物集中S6593が見られた。

S3815（地床炉 S3816・3817付き） A区検出。4.9×3.4mの長方形プラン。地床炉は西壁に寄つて2基見られた。

1-1-4. 6C中葉～後葉の豊穴住居跡

S713 6C中葉。A区検出。遺物は造構内で土器溜まり状に堆積した状況で出土した。

S2739（竈 S2740付き） 6C後葉。3.0m四方と小型の方形プラン。竈は焚き口寄りにピットがある。燃焼部床の左袖寄りで壺(1430)が口を右奥に向けて横倒しになった状態で出土した。右袖側には棒縫が立った状態で出土し、支脚であったとも言えそうである。しかし、竈埋土中には磨製石斧(3467)も含まれ、棒縫も混入品の可能性を十分残す。

S2771（竈付き） 6C後葉。燃焼部には焼土層が厚く堆積し、左袖寄りの焼土層上に壺(1436)が口を右

奥に向けて横倒しになった状態で出土した。壺底部下には別個体と見られる壺破片がある。

S5658（竈 S5011付き） 6C後葉。竈は天井が完全には落ちず煙道が残っている。燃焼部には床から浮いた状態で土製支脚(1472)・壺が出土した。

S1115（竈付き） 6C後葉。B2区検出。竈燃焼部より鉢・壺(1693・1698・1699)等が潰れた状態で残され、他に床直上で壺等も出土した。

S1309（地床炉付き） 6C後葉。B2区検出。床直上遺物群の他、埋土中に6C後半遺物の集積S1321がある。

1-1-5. 7C前葉の豊穴住居跡

S2005（竈付き） 南半は別豊穴住居跡により失われる。竈は近世以降の土坑S2000に切られていたものの、燃焼部床には壺(1712)が口を上にして埋め込まれ、その奥に壺(1713)が潰れた状態で出土した。

S2044（土器埋設炉2基付き） 廬体土器は中型壺・中型壺であり、炉心間距離は50cmとなる。

S2030（竈付き） 3.0×2.8m四方と小型である。竈燃焼部から壺(1719)が潰れて出土した。

S2307（土器埋設炉 S2804付き） 床面南西寄りに直径約30cmの焼土の広がりが見られ、ごく浅い地床炉の残骸であった可能性を残す。土器埋設炉は西に偏った位置にある。検出当初は2～3軒の豊穴住居跡の切り合いに見えたが、床面が揃うことと床直上の遺物に時期差がほとんどないことから、最終的に5.8×5.2+αmの1軒の豊穴住居跡と見なした。

S2849（竈 S2850付き） 切り合いが激しく竈右袖ならびに燃焼部の一部あたりが残るばかりである。

S5628（竈 S5014付き） 竈は豊穴外にやや張り出すもので、両袖が部分的に残っている。

S5651（竈 S5010付き） 竈はほとんど原形を留めず、わずかに燃焼部の回部と右袖の一部を残すばかりであった。燃焼部床には鉢(1777)が口を上にして立っており、その奥に壺2点・鉢1点(1774・1776・1778)が潰れて出土した。なお、竈左袖の外で出土した土器群は、壺(1774・1776)と接合する。

S739（竈付き） A区検出。豊穴プランが不明瞭ながら、竈の設置される壁の対面に竈構築土塊がある。

S1097（竈付き） B2 区検出。竈燃焼部左袖寄りの埋土中に土製支脚（1671）が斜めに立った状態で見られ、燃焼部右袖寄りには胴部中位から口縁部を欠く甕（1670）が立った状態で出土した。

1-1-6. 7C 中葉～後葉の竪穴住居跡

S2426（竈 S2425 付き） 7C 中葉。床面は平面台形で、竈付設の壁が広く対壁は狭い。壁溝はほぼ全周に巡り、ピット列とも見えるような回みが連続した。竈焚き口は竪穴内に向かって大きく延び、甕（1834）が潰れて出土した。燃焼部左寄りの床上には甕（1829）が口を上にして据え置かれ、その奥からは土製支脚（1833）が立位で出土した。竈天井は落ちており、竈埋土上部より甕（1836）が潰れて出土した。なお、S2426 埋土中遺物は特に南東隅側より流れ込んだ様子が見られた。

S2821（竈 S2822 付き） 7C 中葉。竈は天井が完全に落ちており、両袖がわずかに残るばかりである。焚き口から燃焼部にかけては緩い段が付いており、その高低差は約 10cm ある。煙道は竪穴外に 1m 以上突出している。

S2068（竈 S2760 付き） 7C 後葉。燃焼部床より浮いた状態で高坏・皿（1917・1918）が出土した。

S651 A 区検出。7C 前葉～中葉。2.4×1.9m の方形プラン。主柱穴が竪穴四隅に寄って検出された。

S1775（竈付き） A 区検出。7C 中葉。3.9×3.4m の方形プラン。竪穴東壁から 40cm 内側の完全に竪穴中にに入った位置に竈が設けられる。

1-2. 挖立柱建物跡・土坑 他

掘立柱建物跡 SB30 は古墳時代のものか、この他、古墳時代以降と見られる掘立柱建物跡 26 棟がある。掘立柱建物跡 SB15・17 は D17/18 グリッドにあり、掘り方方形である。この他、床面以下まで削平された竪穴住居跡の主柱穴かと思われるものもある（第 2 表）。

土坑 S2209・2121 は 5C 後葉で、前者より高坏（2043）・高坏が、後者より高坏（1088）が床直上より出土した。両土坑とも D13 グリッドで検出された。（藤木）

2. 土 器（第 75～118 図）

2-1-1. 5C 前葉の土器の概要

胎土は①弥生土器胎土に近似（赤褐色・褐色・灰色で 1mm 以下の円磨著しい砂粒と 1～2mm 大で岩片状の砂粒が混入）、②赤褐色・褐色・灰色で 1～5mm 大の円磨著しい砂粒が混入の二者がある。砂礫混入の度合いは『新版標準土色帖』記載の面積割合に基づくと、①は 40～50%、②は 3～15% である。色調は薄茶色や灰白色である。小型器種は灰白色が多い。焼成は、器壁内部までは還元が進まず、破断面中央には黒色帯が残る傾向が強い。

5C 代を含めて古墳時代～古代の土器器臺は、大型（口径 19cm 以上、胴部最大径 23cm 以上、器高 20cm 以上）、中型（14～19cm 前後、15～25cm 前後、20～28cm）小型（10～14cm、10～15cm、15～18cm）の大きさに区分される。5C 代では大型甕と中型甕がセットとなる（1054・1051）が、小型甕の存在は認めがたい。器形の特徴は、倒卵形の胴部に大きく開く口縁部がつく（1029）。口径は胴部最大径より大きく、口縁部の屈曲度は頸部の水平面から 70°～80° である。口縁端部は平坦に仕上げる。胴部最大径は、肩部付近に位置する。底部は尖底でわずかに丸みを帯びる（1029・1051）。外面の器面調整は、平行タキ後に板状工具でナデ消すのが一般的で、タキ調整を残す場合は、一括出土遺物で 1/3 以下程度の割合となる。土器器臺は布留式系高坏の影響を受けた、大きく開く坏部にエンタシス状の脚部が接続する器形である（1043・1045）。坏底部は広く平坦で、口縁部は坏底部との境で屈曲して外方に開く。その境は明瞭なため薄い稜線や接合線となる。脚柱部は中空で、脚裙部は「ハ」の字に開く形態が多く、脚柱部からそのままスカート状に開くものは少ない（1059）。坏部と脚部の接合方法は、坏底部中心と脚部内部は中空のまま直接接着した後、截頭円錐形の粘土塊を坏部側から「ほぞ」のように差し込み、それの中空部分を充填する（1043・1045）。土器器臺には大型臺（1023）と広口の中型臺（1033・1056）と小型丸底臺（1035・1036）がある。小型丸底臺は、古墳時代前期に比べてつくりは粗雑化し、口径と胴部最大径が近似してくる。この他、球形胴に大きく開く口縁部を持つ土器鉢（1046）がある。鉢そのものの出土量は

少ない。壺はない。手握土器は鉢形ないしコップ形のものが堅穴住居跡から1～2個出土する。

2-1-2. 5C前葉の遺構出土土器

S7823(1021) 壺(1021)の底部はタタキ目を持つ平底ある。本遺跡出土の古墳時代の土器では最も古い(4C後葉～末葉)と考えられる。

S1321(1022～1048) S1309の埋土中遺物。壺・壺・小型丸底壺・手握土器・高杯・鉢がある。大型壺(1048)底部のつくりは、木の葉を下敷きに粘土紐を積み上げて底部外表面を形成後、さらに粘土を充填して底部内面を形成する技法である。大型壺(1029)口縁部の屈曲は弱く、高杯(1043)の口縁部付け根の稜線が薄い特徴は、後出する要素である。土器群全体としては、5C前葉でもやや下る時期と考えられる。

S9857(1049～1059) 大型壺・中型壺・小型丸底壺・中型壺・高杯がある。1051・1053は頸部のしまりが緩く、胴部最大径が肩部付近から中位に下がる。土器群全体は5C前葉でも中葉に近いと考えられる。杯部の深い高杯(1058)は6C前葉か。

2-2-1. 5C中葉～後葉の土器の概要

土師器壺の胎土や色調は、5C前半と同じで他器種も同様な傾向である。器形は、口縁部の屈曲が弱くなり(1106)、頸部のしまりが弱くなり、胴部最大径は胴部中位に下って口径と胴部最大径が近似する(1062)。口縁部は平坦、丸くまとまる、先細り気味等多様化する。底部は5C前半より丸みを増す尖底(1062)や緩い平底気味(1096)となる。土師器高杯は杯部全体が深くなり、杯底部は水平にならない(1068)。杯底部と口縁部付け根との境にある屈曲は弱まる。また、杯底部から脚柱部内へと垂下した粘土塊の端部は、指で回ませるか、丸くまとめられる(1077・1097)。大型の高杯(1077)も認められ、脚柱部が二段になるもの(1088)もある。土師器壺のうち中型壺は頸部のしまりが良くなる(1099)。底部成形は輪積み後、内部から粘土を充填する技法(1115)も引き続ぎ認められる。小型丸底壺は、さらに萎縮化・粗雑化して口径と胴部最大径が等しくなる(1093)。土師器鉢はバケツまたは砲弾形に似た(1091)や壺に近い球形胴(1092)があ

る。壺の出土はない。土師器杯は器高が口径の1/2大に近い大ぶりなもの(1100)と1/3大で小ぶりなもの(1101)がある。口径は13.5～14.0cmで内湾口縁が主体である。須恵器蓋杯の形態を模したタイプ(1111)も出現する。須恵器は2基の遺構のみ(S2385・S3815)に杯身・杯蓋が1点ずつ出土した。陶邑編年TK23～TK47型式に相当する。包含層からの出土も僅少である。

2-2-2. 5C中葉～後葉の遺構出土土器

S1057(1060～1070) 壺・壺・杯・高杯がある。大型壺(1062)・中型壺(1070)はセットである。1070の口縁部は内湾口縁である。壺底部(1062・1064・1065)は丸みを帯びる尖底である。高杯の杯底部(1068)は丸みを帯びる。5C中葉～後葉。

S1140(1071～1079) 高杯は大型品(1077)・中型品(1074～1076)があり、大型の高杯はS2121(1088)に類品がある。二段に開く脚柱部が特徴である。

S9140(1091～1094) 鉢・小型丸底壺・高杯がある。鉢(1091)の口縁部はS9857(1049)と同様に指頭痕で加飾される。小型丸底壺(1093)は萎縮化が進んだ最終形態を示す。高杯(1094)の杯部・脚部の接合部は円板状の粘土で充填される。5C中葉～後葉か。

S9815(1095～1104) 中型壺・高杯・壺・杯がある。壺の底部は丸みを帯びた平底で、壺頭部のしまりは強い。杯は新たに見られる器種であり、器高は口径の1/2大に近い大ぶりなもの(1100・1103・1104)と1/3大で小ぶりなもの(1101・1102)がある。5C後半代でも5C後葉である。

S2385(1113～1116) 大型壺・壺・須恵器杯身がある。大型壺(1114)の口縁部は直立気味に立ち上がり、その端部は外反する形態で新しい様相を示す。須恵器杯身(1116)は陶邑編年TK23～TK47型式に併行。概ね5C後葉～6C初頭の土器群。

S7259(1123～1128) 大型壺・中型壺・大型壺・杯がある。大型壺・壺や杯は5C後葉の特徴で、中型壺はS1777(1178・1179)のような長脚化著しい壺に類似する新しい様相(6C前葉)を示す。

2-3. 5C後半～6C前半代の土器

S1332・7172の出土土器は、遺構埋土の上～中位に

かけて厚く堆積した状態で出土した。

S1332 (1130~1147) 墓・壺・杯・高杯がある。墓 (1132) は口縁部が直立し端部は外反する。壺 (1130) は頸部のしまりが強い。墓 (1136) は丸底の底部で6C前葉か。

S7172 (1148~1165) 墓・壺・高杯がある。墓 (1148~1152) 外面には S9857 (1053) と同様にヘラ描条線が施される。墓 (1153) は短く屈曲する内湾口縁気味の口縁部で、頸部に指一本分の凹みを一周させる中型壺である。胎土や色調も他の墓とは異なる。底部の特徴から 5C 前葉か、大型壺 (1155) の底部成形は S1321 (1048) と同じである。高杯は、①口縁部付け根の屈曲が顕著 (1158)、②杯部がやや深くなる (1159~1161)、③杯部は壺形となり口縁部と杯底部の境がない (1160~1162~1165) の 3 タイプがあり、①は 5C 前葉、②は中葉~後葉、③は 6C 前葉の時期か。

2-4. 6~7C の土器

土器器の墓・鉢・瓶といった煮沸・貯蔵具の胎土は粒のそろった緻密な粘土に赤褐色・褐色・灰色で 1~5mm 大の円磨著しい砂粒が混入する。砂粒混入の度合いは、『新版標準土色帖』記載の面積割合に基づくと 3~15% 程度である。土器器の小型食器類 (杯・高杯・皿・小型丸底壺) には、砂粒の混入はほとんど認められず、精製粘土を使用している。また、黒雲母を含む杯や壺もある。色調は、器種を問わず薄茶・赤橙色・桃色で焼成は器皿内部まで還元が進む。須恵器では、胎土に白色粒 (長石や石英) 混入するものが多い。

2-5-1. 6C 前葉の土器の概要

土器器の口径は胸部最大径より小さく、胸部最大径は中位となる。口縁部の端部は丸くまとまるか鋭い。また、口縁部は①頸部の水平面に対して 80° 前後の角度で屈曲 (1178)、②頸部のしまりは強く、明確な「く」の字口縁で、60° 前後 (1220)、③直立に近い (1171~1198) の三者がある。口縁部の長さは 5C 代より短い。底部は丸底 (1181) や平底 (1205) である。平底例は少ない。また、外面に平行タタキ調整を残すものは少數である。胸部形態は①球形に近い倒卵形 (1172~1166) と、②胸部の張らない長胴なタイプ (1177~1180) があ

る。土器器高杯全体の出土量は 5C 代に比べて極端に少ない。5C 代高杯の系譜上にあるものと、土器器杯に脚部を付けたような形状 (1225) がある。土器器杯の器高は口径の 1/2 大近くで逆三角形の体部 (13.5~16.0cm 以下)、底部に平坦面があり全体形が低平なもの (13.5~17.0cm 以下) がある (1191~1197 等)。口縁部形態は内湾口縁と短く外反するものがある。底部にヘラ記号を持つものや、須恵器模倣杯もある。食器組成の中で杯類の比重が高くなる傾向にある。土器器壺のうち中・小型壺は、5C 代から続く形態 (1209) と頸部のしまりが緩く、短く反するタイプ (1208) がある。他方、大型壺は多く出土するようになる。倒卵形の胸部で、頸部に絡縫突帯を付すタイプ (1245) もある。この他、土器器瓶 (1217 等) や土製支脚 (1186) が見られる。手捏土器には鉢形と皿ないし杯形が 1~2 個ほど、竪穴住居跡より出土する傾向がある。

2-5-2. 6C 前葉の遺構出土土器

S1777 (1171~1196) 大型墓 (1172) は球形に近い倒卵形の胸部である。中型墓 (1177~1180) は胸部の張り出さない長胴形である。杯 (1188~1194) は、逆三角形の体部のもの (1190~1193)、底部全体が丸みを帯びるもの (1188~1194) がある。1196 は須恵器有蓋高杯の蓋か。

S2577 (1198~1203) 中型墓・小型墓・小型壺・杯がある。中型墓 (1198)・杯 (1203) の外面には明確な条線のハケ目調整痕が残る。

S2977 (1204~1214) 中型墓 (1204・1205・1207)・壺 (1208・1209)・杯 (1210~1212)・手捏土器 (1213・1214) がある。中型墓は接地面の広い平底である。1204 はタタキ調整が底部まで丁寧に施される。壺は扁球形の胸部に長い口縁部のもの (1209) と倒卵形の胸部に短い口縁部のもの (1208) がある。1207 は S4537 (1217) と同じく胸部上半部全体が内湾し、輻の可能性がある。墓底部 (1206) の内面はシボリ痕が顕著で底部中心は凹む。手捏土器は皿または杯形である。

S4610 (1220~1229) 墓・壺・高杯・杯がある。杯は内湾口縁主体で、わずかに外反する口縁 (1229) も見られる。1227 は底部にヘラ記号を持つ。

S6330 (1235~1255) 墓・手捏土器・鉢・壺・杯・

須恵器模倣坏がある。甕は直立気味の口縁が主体である。大型甕（1245・1246）の頸部には刻目突帯（布を巻いた工具で施文）がある。坏は器高の高いもの（1250・1251）と低平なもの（1252～1254）があり、後者の口縁部形態は多様である。

2-6-1. 6C 中葉の土器の概要

土師器甕の口縁部は、頸部で屈曲する「く」の字口縁ではなく、全体が緩やかに聞く C 字形に近い形態になる（1267）。底部は丸底（1273・1287）やわずかな平坦部を持つ平底に近い丸底（1272・1274）が主体である。外面調整に平行タタキ目を残す甕が多く、同一遺構出土の場合は、3～5割を占めるようになる。タタキ目を残す甕は、底部付近のみを板状工具でナデ消す場合が多い。また、大型・中型甕に加えて小型甕（1298）が器種構成に加わる。本遺跡出土の古墳時代土師器甕の胴部・口縁部の器厚は 5～7 mm と揃う（1267）が、6 C 中葉以降には 1 cm を超える厚手なもの（1274）も認められる。土師器坏・甕は概ね 6 C 中葉段階と同じ器種構成と考えられる。土師器高坏は坏に脚部を接続した形態であり、長脚（1342）や短脚（1343）タイプが見られる。土師器瓶は竪穴住居跡内より 1～2 個体ほど認められる。大型の瓶が主体で、タタキ目を残す（1305）ものもある。土師器鉢には大型の片口鉢（1303）が出現する。大型瓶や鉢の平行タタキ目調整は、底部は縦、胴部は斜めと方向が異なる（1303・1305）。小型の鉢にエッグカップ状の台付鉢（1356）がある。須恵器は TK10 型式に相当する坏蓋や坏身、提瓶がある。

2-6-2. 6C 中葉の遺構出土土器

S456（1263～1266） 土器埋設炉の炉体土器（1263）の他、瓶・甕・須恵器模倣坏がある。1263 は外表面をハケ目調整しており、器形や胎土も含めて在地系の甕とは異なる要素が多い。

S713（1267～1322） 甕・鉢・壺・片口鉢・瓶・高坏・坏・須恵器模倣坏・須恵器坏蓋・須恵器提瓶がある。胴部の細片化が著しく、本来の全体形を復元できず、口縁部や底部のみ掲載したものもあるが、掲載土器数は出土個体数に近い。甕は外面の最終調整がタタキ目（1267～1280）と板状工具ナデ（1281～1295）で

約半々の割合である。大型甕（1299・1300）や瓶（1304～1310）も同様な傾向である。1291～1293 は甕の可能性がある。須恵器坏蓋のうち 1319・1320 は TK10、1321 は MT85 型式に併行か。須恵器提瓶（1322）の口縁部は打ち欠きがある。なお、短い口縁部で外反の程度の緩い甕（1285・1289 等）・短く直立する甕（1284）や須恵器坏蓋（1321）等、後出する様相も含まれるもの、土器群全体としては 6 C 中葉か。

S8833・3770（1347～1358） 大型甕・中型甕・瓶・壺・台付鉢・須恵器模倣坏・手捏土器がある。甕口縁部の外反具合は、S713 出土遺物とくらべて弱い。1347 は大型瓶の可能性がある。6 C 中葉よりは後葉に近いか。

2-7-1. 6C 後葉の土器の概要

土師器甕の口縁部形態は、①緩やかに外反する C 字形で、立ち上がり気味なもの（1379・1381 等）、②頸部で屈曲をなすもの（1384・1386）、③直立するタイプ（1439・1440 等）がある。①は 6 C 中葉よりも外反度は弱い。②は頸部水平面からの角度は 60° で、口縁部の長さは 6 C 中葉よりも短い。①～③の底部は平底か、丸みを帯びた平底が主体で、その接地面積は 6 C 中葉より広くなる。外面の最終調整は板状工具ナデが多く、タタキ目の残る甕は少数である。タタキ目を残す場合でも、全体が粗くナデ消される（1456）か、底部のみにタタキ目が残される（1562）、底部のみがナデ消される（1443）等何らかの調整が施されている。平行タタキ以外に格子目タタキ（1467・1490・1569）も認められる。竪内から出土する土師器甕（1430・1436 等）は、直線的な胴部で器高の割に口径や胴部最大径が小さい長胴な器形である。こうした竪専用と考えられる甕と大・中・小型の甕が組み合わさるのがこの時期の特徴である。布留式系高坏の影響を受けた土師器高坏はわずかで、坏に脚部を付けたタイプが盛行する。長脚化の傾向が強い。坏部と脚部の接合は、5 C 代から続く粘土塊を充填する技法だが、脚部内に垂下した粘土を潰すか、脚部内側からも粘土を充填して完全に密閉する（1396・1410）。脚裾部はスカート状に開くものが主体である。土師器坏は逆三角形の体部の、器高が口径の 1/2 大ない坏は認められなくなる。全体形が低平で丸底のタイプが主体を占める。口縁部形態は短

く外反するものが多い。須恵器模倣坏の受け部のつくりは、簡略化されて口縁部を内側に屈曲させた形状となる。土師器壺に小型・中型壺は少なくなる。大型壺（1445等）は引き続き認められる。土師器瓶は各堅穴住居跡から出土するようになる。大型の瓶（1394・1510）や中・小型のもの（1465・1529）がある。口縁部も直線的に開くもの（1518）や短く外反するもの（1465）、内湾するもの（1529）等多様性が見られる。器形全体は丸みを帯びる。底部の円孔径は4cmと6cm大で、口径や全体形に比して小さめである。土師器鉢には大型の片口鉢（1393）が引き続き認められる。6C中葉に見られたエッグカップ状の台付鉢もある。土製支脚は竈の増加と伴って、竈や堅穴住居跡内より1～2点出土する傾向が強い。小型品（1545）や大型品（1550）等大小様々である。手捏土器は6C中葉と同様なあり方である。須恵器はTK43～209型式に相当する壺蓋や蓋坏が伴う。長脚高坏（1484・1553）や甕（1563）や甕等器種自体は増える。蓋坏1～2点程度という出土傾向は変化しない。

2-7-2. 6C後葉の遺構出土土器

S1056（1378～1402） S1056と接合関係をもつM1000出土遺物も合わせて掲載した。甕・片口鉢・瓶・壺・高坏・須恵器模倣坏・須恵器壺蓋・須恵器高坏がある。甕口縁部形態には、口縁部全体が緩く外反するものの（1379・1381・1387）、口縁部が屈曲をするもの（1380・1382・1384・1386・1388）、口縁部全体が直立気味で端部は緩くわずかに外反するもの（1390）があり、さらに1385～1388は口縁端部が丸くまとまる等、多様である。甕外面の最終調整も、板状工具ナデ以外にタタキ調整（1391）、底部のみナデ消し（1379）、底部にタタキ目を残す（1381・1386）と様々である。高坏（1396・1397）は長脚である。須恵器壺蓋（1400・1401）はTK43～TK209型式に併行か。甕（1381・1387）は6C中葉と見られるが、全体としては概ね6C後葉を中心とする土器群であろう。

S2740（1430～1432） 竈内から出土した土器群である。中型甕（1430）は口径と胴部最大径が近似し、胴部があまり張らない長胴のものである。S2771（竈）出土の甕（1436）と同様に、竈用の甕と見なせる。

S4393（1438～1449） 片口鉢・大型甕・中型甕・大型壺・須恵器提瓶・須恵器壺身が出土した。甕の口縁部は、①直立気味（1439・1440）、②口縁部全体が緩く外反する（1441・1443）、③口縁部付け根が屈曲をなす（1444）がある。②は粗くナデ消されたタタキ目が残る。大型壺（1445・1446）の口縁部や底部も甕の形態と似ている。須恵器壺身（1448・1449）はTK43～TK209型式に併行か。

S4446（1456～1466） 甕・壺・鉢・瓶・坏が出土した。甕（1457）は短く直立する口縁部と平底の特徴を持つ。甕（1456・1464）は粗いナデ消しのためタタキ目が残る。1464の底部は焼成後穿孔である。

S8704（1483～1489） 高坏・須恵器高坏・須恵器提瓶・須恵器壺蓋・須恵器壺身がある。須恵器が比較的多く出土した遺構である。須恵器壺身（1488）はTK209型式でも新相に併行すると考えられる。土器群全体としては、概ね6C後葉（末）～7C初頭か。

S8191（1490～1493） 甕（1490～1492）のうち、1492の外面調整は手持ちヘラミガキ、1490は格子目タタキである。格子目タタキ調整の甕は、他にS2189（1423）・S4509（1467）等がある。須恵器壺身（1493）はTK10型式に相当するが、甕（1492）の底部が平底であるため、土器群全体としては、6C中葉でも後葉に近い時期あるいは後葉（古相）と見られる。

S1331（1504～1511） 甕（1504～1509）、瓶（1510）、高坏（1511）と須恵器壺蓋・壺身の細片がある。1511の口縁部は直線的に逆「ハ」の字に開く。須恵器の細片はTK209型式の新相に併行するので、土器器もTK209型式の時期（6C末～7C初頭）か。

S1500（1514～1525） 甕・瓶・高坏・坏・須恵器模倣坏・須恵器壺身がある。瓶（1520）は口がすぼまり、坏（1523）は鉢の可能性がある。須恵器模倣坏（1524）の受け部は消え、口縁部を内側へ屈曲させた単純な形態である。須恵器壺身（1525）はTK209型式の新相に併行すると見られ、概ね6C末～7C初頭の土器群か。

S4254（1527～1532） 甕・内湾口縁の瓶・須恵器模倣坏・須恵器壺身がある。甕（1528）は口縁部が緩く外反する。須恵器模倣坏（1530）には明瞭な受け部があるが、須恵器模倣坏（1531）の受け部は退化している。須恵器壺身（1532）はTK209新相ないしTK217古相の

型式に併行か。概ね6C末～7C初頭の土器群。

S6774(1539～1542) 中型壺・高杯・須恵器杯蓋・須恵器杯身がある。須恵器杯蓋(1541)・須恵器杯身(1542)はTK209新相～TK217古相の型式に併行するか。概ね6C末～7C初頭の土器群。

S8771(1543～1545) 壺(1543)・土製支脚(1544・1545)がある。6C後葉～7C初頭か。

S8804/8805(1547～1553) 壺・大型壺・土製支脚・須恵器高杯がある。土製支脚(1550)は円筒形で大ぶりなものである。壺(1548)の口縁端部は外方へ突出気味である。6C後葉～7C初頭にかけての土器群。

2-8. 6C後葉～7C前葉

B14D グリッド出土遺物(1556～1565) 壺・大型壺・須恵器壺・須恵器壺がある。壺(1557)の口縁部はS713(1267・1288)と類似した古い形態である。壺(1560)は胸部の張り出しが少なく、口縁部の特徴は他の壺に比べて新しい様相を呈す。壺(1561)の底部は上げ底に近い平底である。土器群は6C後葉～末葉(1556・1559・1562～1565)が主体で、一部は7C前葉(初)に下る(1560・1561)。

S1176/1315(1566～1590) 壺・鉢・大型壺・須恵器杯身・須恵器壺がある。他に、杯・高杯が1個体ずつ出土した。壺(1569・1579)の外面調整は格子目タキである。須恵器杯身(1588・1589)はTK209型式に併行か。土器群全体は、概ね6C後葉でも末に近い時期が中心と見なせる。壺(1572・1573・1578)は、頸部のしまりなく胸部の張り出しもないため、7C前葉(初)に下る土器と考えられる。

S1177(1591～1606) 壺・瓶・須恵器類がある。瓶(1600)の底部に板目压痕がある。壺の口縁部は「く」の字(1593)、直立気味(1595)、直立気味で端部が短く外反(1596)と形態差がある。須恵器杯類(1604～1606)は、TK10～TK209型式と複数にわたる。

S1325(1607～1633) 壺・大型鉢・高杯・小型鉢・須恵器模倣杯・須恵器壺・須恵器杯身がある。壺(1609・1618)は直立口縁で端部は外反する。小型鉢(1629・1630)の口縁部は萎縮化する。土器群全体は、6C後葉～7C前葉に収まる。なお、壺(1610)は胸部最大径が肩部付近で頸部のしまりが強く、古い様相を残す。

2-9-1. 7C前葉の土器の概要

土師器壺の口縁部は、6C後葉段階に比べてさらに短く、肥厚気味になる。形態的には①短く屈曲し端部は外方へ突出気味(1637)と、②直立気味に立ち上がり、端部は外反する「コ」の字形(1640)、③萎縮化の著しい(1675)がある。胴部形態は球形胴が少くなり、長胴のタイプが主体となる。大・中・小型と専用の壺の組み合わせで、大型壺は減少する傾向にある。

土師器壺の口縁部形態は、土師器壺の②に近い。胴部は長胴ないし倒卵形というより、球形胴に近い(1648)。底部は丸底気味となる。小型壺はほとんど認められなくなる。土師器高杯は長脚より短脚のものが量的に多く、小型化する。高杯と脚部の接合法は粘土塊を充填する場合(1756)と、杯部を直接脚部に貼り付ける(1819)がある。短脚の高杯(1818・1820)は後者の技法が多い。高杯の脚部内面にはヘラ記号(1755)を付す場合もある。土師器鉢は杯類と類似した器形で法量の大きい鉢(1653・1665・1702)や砲弾形ないしバケツ形(1753・1764)が見られる等、中・小型の鉢類が充実する。エッグカップ状(1643)もある。片口鉢は小型のタイプ(1676)もある。土師器瓶の器形は、バケツ形ないし砲弾形の直線的な形状が主体となる。内湾口縁や外反口縁は見られなくなる。底部の円孔径は、10cm前後と6C後葉段階より大きい傾向がある。

土師器杯の口縁部形態は短く外反、内湾するもの以外に、そのまま開口タイプ(1704)が見られる。内湾口縁自体も直立気味になる(1657・1658)。底部は平底のタイプが現れる。また、同一器形でも大きさに差が生じている。手捏土器は壺形や鉢形といった器形上の区別が困難になる。土製支脚も認められる。須恵器はTK209～TK217型式に相当する蓋杯が出土している。合子形のいわゆる杯Hとかえりの逆転した杯Gがある。須恵器は、大量の土器と比べ依然として客体的な存在である。

2-9-2. 7C前葉の遺構出土土器

S556(1637～1639) 壺は長胴化の傾向が認められる。壺(1637)の外面は、植物の茎状の工具(草本類か)で荒く掻きナデがなされる。

S662(1640～1646) 窯内出土。壺・瓶・高杯・杯・

鉢・須恵器坏蓋がある。甕用の甕と瓶の良好なセットと見なせる。須恵器坏蓋(1646)はTK217型式の古相に併行か。

S990(1655~1662) 甕・坏・須恵器模倣坏・手捏土器・須恵器蓋坏がある。甕の口縁部・底部は、古相が残る。須恵器蓋坏(1661・1662)はTK217型式に併行。

S1055(1664~1667) 坏・鉢・須恵器無蓋高坏・須恵器平瓶がある。鉢(1665)は坏(1664)と類似した器形。須恵器類はTK217型式でも古相に併行か。

S1114(1674~1685) 甕・片口鉢・高坏・坏類・土製支脚があり、器種構成的にまとまった資料である。甕(1674)底部に木葉痕、坏(1681)には板目圧痕が残る。

S1115(1690~1699) 甕・鉢・瓶等がある。鉢(1692・1693)は直立気味に立ち上がる口縁部をもつ。

S1326(1700~1706) 甕・鉢・坏がある。鉢の口縁部は大きく開き、底部は平底をなす。坏(1704~1706)は鉢の器形に近い。

S1805(1708~1710) 瓶・高坏・須恵器坏蓋がある。高坏(1709)は大型。須恵器坏蓋(1710)はTK217型式の古相に並行か。

S2005(1712~1716) 甕・大型甕・鉢・坏がある。鉢(1714・1715)はS1326(1702・1703)より小さいが相似形である。

S2044(1721~1723) 甕・甕とともに炉体土器。甕(1721)の上・下端部には人為的な打ち欠き調整がある。

S2307(1724~1734) 甕・甕・鉢・高坏・坏がある。高坏(1730)は短脚の小型品。坏は法量的には小さい。

S2805(1737・1738) 高坏・須恵器坏身がある。須恵器坏身(1738)はTK217型式の新相に相当する。

S3616(1749~1758) 大型甕・中型甕・小型甕・鉢・瓶・高坏・須恵器甕・須恵器坏身がある。高坏(1755)の脚部内面にはヘラ記号を持つ。須恵器坏身(1757)はTK217型式の古相に併行か。土器群全体は概ね7C前葉であるが、大型甕(1749)の全体形は6C後葉の、小型甕(1751)の口縁部は7C中葉の特徴に近い。

S3700(1759~1762) 中型甕・坏・須恵器提瓶・須恵器坏蓋がある。坏(1760)は底面に放射状の暗文があり、色調は赤褐色で胎土は緻密である等、異質であ

る。須恵器坏蓋(1762)はTK209の新相ないしTK217型式の古相に併行か。

S4535(1763~1766) 炉体土器に転用された甕・鉢・須恵器坏蓋がある。須恵器坏蓋(1765・1766)は法量的に見てTK217型式の古相に併行か。

S8999(甕 S3500付き)(1789~1796) 壺穴住居跡とその竈出土。大型甕・甕・高坏・手捏土器・須恵器甕がある。甕(1791)は口径から見ると中型甕ながら、胴部が張り出す形態の大型甕であろう。甕(1792・1793)の底部はそれぞれ異なる。

S668(1805~1809) 中型甕・大型鉢・坏・須恵器坏蓋・須恵器坏身がある。中型甕(1805)は短い口縁部と平底の形態が特徴である。須恵器坏蓋(1808)はTK217の新相ないしTK46型式に併行しよう。土器群全体としては7C前葉である。

S1775(1810~1820) 竈とその周辺出土。甕・坏・高坏・土製支脚がある。短脚の高坏が比較的多い。

S2426(甕 S2425付き)(1822~1836) 壺穴住居跡とその竈出土。小型甕・中型甕・大型甕・中型甕・大型鉢・大型甕・坏・手捏土器・土製支脚がある。甕の底部は平底で木葉痕を持ち、1822・1826は短い口縁部で軽く屈曲する。高坏・須恵器類は埋土中出土。7C前葉～中葉の土器群か。

S4663(1848~1851) 大型甕・小型甕・坏または小型鉢がある。坏または小型鉢(1850・1851)の底部は平底で木葉痕を持つ。概ね7C前葉～中葉の土器群か。

2-10-1. 7C中葉～後葉の土器の概要

土師器甕口縁部の形態は、①短く屈曲する(1884・1903)②逆「L」字状に近い(1925・1926)がある。①は頭部の水平面から40~60°の角度で屈曲し、口径が胴部最大径を上回ることから7C中葉の、②は7C後葉の特徴である。7C後半代の底部は平底化が定着し、木葉痕を持つや上げ底気味となる。土師器甕は胴部の張らない、砲弾形の長胴化した甕(1907)が認められる。甕・鉢・坏・高坏等は、器種そのものの出土量が少なくなるため様相は不明である。土師器坏や小型・中型鉢は平底化が進む。高坏は短脚のみとなる。こうした非回転台成形の高坏や坏類は8C前葉の土器には認められないので、7C後半代でほぼ消滅するよ

うである。土師器皿は7C後半代（中葉）からある。手捏土器は7C後半代を境に消滅する。土製支脚は7C後半代ではまとまった資料に乏しい。須恵器はTK43～TK48型式に相当する塊蓋と高台付塊が出土している。出土傾向は、7C前半代と同じく客体的な存在である。

2-10-2. 7C中葉～後葉の遺構出土土器

S641 (1863～1865) 坯・須恵器坯蓋がある。須恵器坯蓋（1865）はTK217の新相ないしTK46型式併行か。

S903 (1876～1883) 竈内出土。甕・瓶・坏類・鉢を掲載した。甕のうち、1879は1878に比べてかなり小型である。7C中葉の土器群。

S1191 (1884～1885) 中型甕がある。直線的な胴部と短めの口縁部を持つ。7C中葉の土器群。

S2126 (1886～1887) 中型甕・大型壺を掲載した。中型甕（1886）口縁部は緩やかな逆L字状である。7C中葉の土器群。

S2821 (竈 S2822付き) (1890～1894) 壁穴住居跡とその竈出土。小型甕・須恵器坯蓋・土製支脚がある。須恵器坯蓋（1892）はTK46型式に併行する。

S4609 (1896～1900) 大型壺・大きめの坏または鉢・皿・手捏土器がある。大型壺（1896）口縁部付け根に刻目（絡繩）突脊があり、宮崎県南西部（内陸部）の特徴を持つ。皿（1899）は内外面を手持ちヘラミガキ調整で、内面には放射状の暗文がある。色調や胎土とも他の土器群とは異なる。7C中葉～後葉の土器群。

S7241 (1903～1905) 竈内出土。小型甕・坏がある。小型甕（1903）は長胴を呈し、竈専用の煮沸土器か。7C中葉の土器群。

S8939 (1907～1912) 甕・坏・須恵器高台付塊・須恵器直口壺・須恵器甕がある。甕（1907）の体部は逆Hの字形に広がらず長胴である。須恵器高台付塊（1910）はTK46型式に併行か。

S2760 (1917～1918) 高坏・皿がある。高坏（1917）の脚部内面にはヘラ記号がある。7C中葉～後葉。

S8936 (1919～1922～1924) 甕・瓶・須恵器高台付塊がある。須恵器高台付塊（1924）はTK46～48型式に併行か。

S4430 (1926～1928) 甕（1926）は炉体土器に転用されていた。口縁部は逆L字状になる。須恵器高台付

塊（1928）はTK48型式に併行する。

S5822 (1932・1933) 須恵器塊蓋（1932）・須恵器高台付塊（1933）はTK48型式に併行か。1933の高台端部の跳ね上げが顕著である。

2-11. その他の遺物 (1943～2123・5444)

包含層や遺構埋土中出土のものである。甕（1944・1952・1953）はS1869(1021)と同じく、わずかな平坦面を持つ平底。甕（1952・1966）は底部成形が特徴的。

甕（2000）は口縁部端を指押さえで加熱する。大型甕（2014～2016）は頭部付近でヘラ描きの線刻がある。

高坏（2033）は赤色塗彩で脚部外面に種子圧痕（イネ）がある。手捏土器（2040）は壺形で、底部に種子圧痕（ドングリ等）がある。皿（2058）は赤色塗彩で、内面に放射状暗文がある。底部外面はタキ調整か。須恵器有蓋高坏（2095・2096）は、天井部外面にカキ目やヘラ描きの羽状文・短沈線文があり、内面には藁灰が付着した痕跡も認められる。須恵器坏身（2110・2111）は生焼けのもの。須恵器甕（2119）はTK208～23型式に相当か。須恵器台（2132）は脚部のみである。手捏土器（5444）は丁寧なヘラミガキが施される。胎土は精良で、器壁も薄い。外表面の色調は均一な黒色で、黒色処理の可能性がある。古墳時代の遺物と考えられる。

（今塙屋）

管状土錐は計1003点あり、古墳時代あるいはその可能性の高い遺構埋土中出土が53点ある。そのうち特徴的なもの12点を図化した（2068～2079）。6C後～7C前と見られる2068は胎土に多くの砂粒を含み、全形も大きい。須恵器のもの（2073）は推定7C前～中である。S1775（7C前～中）例（2077・2078）は胎土・成形等が酷似する。

（藤木）

3. 石器 (第119~157回)

3-1. No.付石器

No.付 (2133~2349・5442)には打欠石錐・敲石・磨石・凹石・砥石・筋砥石・台石・石皿・円盤状石器・棒礫・摩滅面ある礫がある。大半が堅穴住居跡床直上出土である。

5C 前葉 (2133~2135)は一抱えもあるような砂岩製台石がある。いざれも摩滅痕のみで敲打痕はない。この時期は遺構数も少なく、石器組成全体は不明確である。なお、6C 後葉の堅穴住居跡 S1309 の埋土中に見られた遺物集中 S1321 も 5C 前葉の良好な一群である (2207~2217)。棒礫 (2209~2213・2571~2574) がよく目立っている。

5C 中葉～後葉 (2136~2166) の敲石・磨石の量は少なく、石材も砂岩・ホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類と様々である。砥石は明確なものはほとんどなく、溝状の削り痕の走る筋砥石が少数見られる。台石は一抱えもあるような砂岩製が大半で、1点のみ硬砂岩製がある。台石の中には一旦割れてしまった台石をそのまま使い続けたものや砥石を転用したものが見られる。台石の使用痕は摩滅痕・敲打痕を基本とするが、凹むような敲打痕を持つものもいくつか見られた。棒礫はいくつかの堅穴住居跡でまとめて出土した。円盤状石器は縄文石器の混入の可能性を残す。

5C 後半～6C 前半 (2167~2172) は 5C 後半と基本的に変化ないが、台石に尾鈴山酸性岩類製のものが1点ある。

6C 前葉 (2173~2190) の敲石はコッペパン状の砂岩礫が好まれる。尾鈴山酸性岩類製の敲石 (2178) は縄文石器との区別が困難である。砥石・台石は一抱えもあるような砂岩製が多い。台石の中には連続した敲打による強い凹みを複数箇所持つものがある。棒礫はいくつかの堅穴住居跡でまとめて出土した。

6C 中葉 (2191~2206) の敲石は砂岩製でコッペパン状の礫の端部や胴部寄りに敲打痕を持つものが多い。磨石は全て砂岩製。砥石は細長いホルンフェルス礫を用いたものが見られた。台石は一抱えもある砂岩製が大半で1点のみ花崗岩製がある。摩滅痕と浅く広がった敲打痕を持つものが多い。棒礫は少ない。

6C 後葉 (2218~2251) の敲石 (磨面を持つものを

含む) 石材は砂岩・ホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類と様々である。尾鈴山酸性岩類製敲石 (2238) は厚みある楕円礫の両端を激しく使い込むものである。台石は全て砂岩製で中には10kgを超えるものもある。台石の中には整形された可能性あるものや一旦割れた台石を再利用するもの、砥石を転用したものが見られる。摩滅痕と浅く広がった敲打痕・凹んだ敲打痕を持つものがある。打欠石錐や棒礫はいくつか出土した。

6C 後葉～7C 前葉 (2252~2274・5442) の敲石は少ない。台石の大半は一抱えもあるような砂岩製で、1点のみ尾鈴山酸性岩類製がある。台石には一旦割れた台石を再利用するもの、砥石を転用したものが見られる。台石の使用痕は摩滅痕と浅く広い敲打痕のものが多い。砥石・筋砥石も砂岩を好み中、尾鈴山酸性岩類製のもの1点がある。打欠石錐や棒礫も出土した。

7C 前葉～中葉 (2275~2307) の敲石・磨石は少ない。磨石はあまり風化が進んでおらず、縄文石器混入の可能性は低い。台石の半数以上は一抱えもあるような砂岩製で、花崗岩製・尾鈴山酸性岩類製のものも一定数見られた。台石の使用痕は摩滅痕と浅く広い敲打痕のものが多い。砥石は砂岩を好み、量は少ない。棒礫はいくつかの堅穴住居跡でまとめて出土した。打欠石錐はいくつか出土したが、堅穴住居跡1軒につき1~2点と少ない。

7C 中葉～後葉 (2308~2320・2326・2327) の敲石・磨石は砂岩・尾鈴山酸性岩類製がある。尾鈴山酸性岩類製のものはコッペパン状の礫を用いる。台石は全て砂岩製で、磨面を併せ持つものや、摩滅痕と浅く広い敲打痕を持つものがある。砥石・棒礫・打欠石錐も出土した。

2321~2325・2328~2349 は No.付のうち、遺構の時期に幅の大きいものである。2330 は整形された砂岩製石皿である。

古墳時代全般の特徴として、敲石・磨石は砂岩・尾鈴山酸性岩類が好まれる。特に尾鈴山酸性岩類製の方は縄文石器との区別困難な場合もあったが、一方で、厚みある楕円礫の両端を激しく使い込んだ敲石やコッペパン状の礫を用いた磨石等、縄文石器にはない特徴を持つものも見られた。また、縄文石器と比較して風

化の新しいものも見られた。台石は一抱えもある砂岩が多く用され、尾鈴山酸性岩類・花崗岩は少数派であった。また、破損後も利用が継続されるものや砥石と兼用されるものがある。使用痕は、摩滅痕と敲打痕を併せ持つものが多く、特に強く凹んだ敲打痕を持つものが見られた。砥石も台石と同質の砂岩礫が好まれる。棒礫はいくつかの堅穴住居跡において一定数まとめて出土があった。

3-2. 埋土中出土とその他の石器

2358~2651 は堅穴住居跡の他、古墳時代の遺構埋土中より出土した敲石・磨石・砥石ならびにその未製品・棒礫・台石・円礫である。弥生時代以前のものを含む可能性も残されるが、その区別は明確でない。

この他、特記されるものとして、砂岩や頁岩を用いた有孔石製品ならびに勾玉形石製品(2350~2355)・碧玉製管玉(2356)・蛇紋岩製で線刻ある紡錘車(2357)・棒状調整具(2563~2570)・類石冠やその未製品(2652~2655)がある。いくつかは包含層ならびに古墳時代以降の遺構埋土中より出土したが、その特徴より古墳時代の所産とした。有孔石製品の一部・類石冠は縄文石器の可能性を残す。

紡錘車は蛇紋岩製。日高優子によれば「狭面を削り取るように再加工されている。広面と側面に残存する鋸歯文の具合からは、本来断面台形のものであり、かつ全面に鋸歯文が施されていたと見られる。さらに、再加工後、文様の消えた狭面側に、彫り込み自体も浅い星形とでも言うべき崩れた鋸歯文を不規則に施している。また、広面に雑な鋸歯文が施されている。文様の割り付けは非計画的で、施工時に工具が滑りはみ出した痕跡まで見られる」(『山崎上ノ原第2遺跡II』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第130集、2006年より抜粋・改変)。

棒状調整具あるいはその可能性の高いものは計8点ある。頁岩が用いられ、断面径1.5cm前後の細長い棒状品で、端部を中心に多面をなす研磨面や摩滅・削痕・潰れ等が残される。

類石冠ならびにその未製品は各2点ずつ合計4点あり、E13 グリッドを中心に B1 区南半から B2 区にかけての、時期がわかるものでは6C後半から7C前半の遺

構埋土より出土した。平面分布上は縄文後期の遺物集中範囲とも重なる。基本的には全面敲打製の後に全面研磨する。類石冠未製品は敲石と共に通項が多いが、繩形状が底面を持つ三角形おにぎり風であることや、敲打痕の位置が底面に集中し一部正面等にも広がりを見せる点が特徴である。

(藤木)

4. 金属器(第157図)

出土遺構の時期ならびに形状から判断して、当該期と見られる鉄製鎌(2656~2661)・鉄製刀子(2662~2669)・鉄製鎌(2670)がある。遺構は大半が6C後半・7C前半である。鎌には方頭鎌・三角形鎌がある。この他、2671 は6C 中葉~7C 前葉の堅穴住居跡 S1114・1115 埋土中出土であるが、外形と内面に残る芯からは鉄鐸の可能性を考えた。X線写真で確認すると、芯の基部付近は不明確であり、いわゆる舌とは判断できなかったため、鉄鐸としての決定打はない。鉄製石突も候補に挙がるが、いずれとも別物の可能性も残っている。また、銅芯金箔貼耳環(2672)も当期のものであろう。

(竹田)

第5節 古代の調査

1. 遺構 (第8~11・13図ならびに付図)

1-1. 竪穴住居跡

1-1-1. 概要

i. 竪穴住居跡の軒数

古代に相当する竪穴住居跡あるいはその可能性がある遺構が213軒検出された(第1表)。8C代に収まるもの118軒、9~10C代に収まるもの91軒、時期の絞り込みが困難ながら古代に収まるもの4軒である。10C前葉まで下がる可能性のある竪穴住居跡はS640・744・2400・6473・7695・7748・7749・7764・8691と少ない。なお、この他に、古墳時代~古代の中で時期を絞り込めたものが325軒ある。

ii. 竪穴住居跡の分布

8C代の竪穴住居跡はA区・B1区に広く分布し、特にA区C6グリッド周辺、F11グリッド周辺、B1区E/F16/17グリッド周辺の3地点に多く集まっている。7C代にピークを迎えた竪穴住居跡の軒数と比べると大きく減少しており、また分散化したように見える。なお、B2区については、8C中葉までに収まる竪穴住居跡S1011・1172の2軒のみと少ない。B2区には、8C後葉以降、本来的に竪穴住居跡はなかったと思われるが、中世以降の住吉神社関連による削平も考慮すべきかもしれない。

9~10C代はA・B1区に分布する。特にA区C/D6グリッド周辺・B2区D17グリッド周辺・A区E/F5グリッド周辺の3地点に多く集まっている。特に、A区C/D6グリッド周辺・B2区D17グリッド周辺は8C代にも竪穴住居跡が多く残された地点である。

古代の竪穴住居跡の分布は、後に報告する「1-2. 掘立柱建物跡」の分布と密接に関係する。

iii. 竪穴住居跡に付設された火廻

8C代は古墳時代以降、継続して竈・土器埋設炉ともに見られ、中には竈が2基併設されるものもある。地床炉は少數ながら見られる。9~10C代も竈・土器埋設炉は引き続ぎ見られる。地床炉は9C初頭までに見られなくなる。

iv. 竪穴住居跡の床直上遺物のあり方

8C代は49/118軒(42%)、9~10C代は38/91軒(42%)である。前節でも触れたように、7C以降は床直上遺物の量が少ない。

v. 竪穴住居跡の埋土

古代のものは、焼土粒や炭化物を多く含み、また埋構築土由来の白色粘土が混入する濁った灰色土が埋土となることが多かった。下位に古墳時代以前の遺構群があったためか、埋土に地山ブロックの混入はあまりない。貼床はほとんどに施されており、6C後半~7C中頃例に近いものや、埋土との区別困難で遺物の出土レベルや硬化面等でようやく判別できるもの等がある。

1-1-2. 8C前葉の竪穴住居跡

以下では、主にB1区で検出された古代の竪穴住居跡について説明する。

S5998(竈 S5999付き) 3.2×2.4mの長方形プラン。竈は長辺にあたる北壁に設けられ、対する南壁には粘土塊が見られた。粘土塊は出入り口等の可能性がある。また、南東コーナー床直上には土壤化した炭化材を多く含む範囲があった(詳細は第VII章を参照)。竈は燃焼部が深く、焚き口へは高低差5cmの段差を持っている。焚き口の中央には直径10cm・深さ15cmの円筒状の小さな穴が、左側には斜めに抜けるビットがある。後者は別遺構の可能性が高い。土器類(3059・3060)はいずれも燃焼部で浮いた状態で出土した。

S2893(竈付き) 2.5×2.2+αmの小型方形プラン。竈は煙道・燃焼部・焚き口が詰まった位置関係にあり、天井がわずかに残っていた。燃焼部中央には直径5cm・残深5cmの小さな円筒状の穴がある。かなり浮いた位置で須恵器壺(2788)ならびに土師器壺の破片が出土したが、竈に直接伴うものではなかろう。また、燃焼部に落ち込むように川原石(使用痕なし)が出土した。

S6324(竈 S6323・土器埋設炉 S6325付き) 3.8×2.7mの長方形プラン。竈は長辺にあたる西壁中央に設けられ、竪穴壁の内側に収まる。天井は完全に落ち、奥壁から両袖までが便座状に残る。須恵器鉢(2814)破片が燃焼部の焼土を多く含む埋土中より出土した。

土器埋設炉は竈正面に竈から 1.4m 離れて設けられる。炉体土器は口縁端が欠けている。東壁寄りには上面が平らな 25×15cm 四方の川原石（使用痕なし）が貼床中に埋め込まれていた。

S6328（土器埋設炉 S6326 付き） 2.5m 四方の小型方形プラン。竪穴中央に土器埋設炉がある。炉体土器の口縁は打ち欠かれていない。

1-1-3. 8C 中葉の竪穴住居跡

S2852（竈 S2851 付き） 8C 前葉～中葉。2.2m 四方の小型竪穴住居跡である。竈は損壊著しく、竈構築粘土と見られる白色粘土とその周間に焼土が広がるばかりであった。竈奥の壁面は若干外に張り出している。

S5930（竈 S5945/5990・土器埋設炉 S5925 付き） 8C 前葉～中葉。竈 2 基・土器埋設炉 1 基を持つ竪穴住居跡である。竈 S5945 は竪穴外に大きく煙道が延びる。土器類（2793）は床より浮いた位置である。竈 S5990 は壁面よりわずかに突出する。土器類（2797～2800）は破壊された袖の上や燃焼部埋土等より出土した。土器埋設炉は長軸 0.8m の土坑に炉体土器が据えられる。炉体土器の口縁周辺には焼土が広がる。なお、竈周辺の焼土・炭化物等の多く見られた床面を 50cm メッシュで区画し、A～J 区画の床上 5cm の土壌をフローテーションした（詳細は第 11 図・第Ⅷ章を参照）。

S5985（竈 S5986 付き） 8C 前葉～中葉。竈右側の竪穴床面上より瓶ならびにその可能性あるもの（2795・2796）が出土した。

S6001（竈 S6000 付き） 8C 前葉～中葉。竈は平面プランで瓢箪形になることより焚き口・燃焼部が区分され、その床はほぼ平坦に連なっている。燃焼部や手前側には小穴に甕（2801）下半を埋め込みつつ口を上にして据えられる。甕のすぐ脇には甕口縁とほぼ同じ高さの埋土中より須恵器塊蓋（2802）が出土した。竈構築粘土は左右に大きく崩れしており、天井も失われている。なお、竈手前から竪穴中央付近までの床面を 50cm メッシュで区画し（壁際や竪穴中央の区画は任意）、A～S 区画の床上 5cm の土壌をフローテーションした（詳細は第 11 図・第Ⅷ章を参照）。

S6055（竈 S6056 付き） 8C 前葉～中葉。床面が深かつたためか、竈の天井は良く残り、煙道壁が一部崩

落するのみである。焚き口から燃焼部までは一連の浅い凹みがあり、そのまま竪穴外に張り出す煙道となる。埋土中より坏身・塊蓋（2803・2804）が出土した。

S2167（竈 S2178 付き） 8C 中葉。竈周辺を除いて別構造に切られる。竈は天井が落ちているものの、袖から天井にかけて良好残っており、竈内面にははっきりと焼土が見られる。竈内からは甕が出土した。

S2381（土器埋設炉付き） 8C 中葉。土器埋設炉のみが検出された。竪穴住居跡のプランは描めていない。

S2834（竈 S2832 付き） 8C 中葉。竈は燃焼部と見られる凹みが西壁際で検出された。右袖寄りから軽石加工品（3423）が出土した。

1-1-4. 8C 後葉～9C 初頭の竪穴住居跡

S2874（竈 S2873・土器埋設炉 S5008 付き） 竈は西に開口する。竈の手前約 1.5m の位置に土器埋設炉が設けられ、焼土・炭化物・粘土等の混在した土で炉体土器の上端周辺を埋めている。

S5007（土器埋設炉付き） 土器埋設炉は竪穴ほぼ中央にある。炉体土器は豊後型系甕（2910）である。西壁際には台石（3434）が置かれる。

S6060（竈 S6065 付き） 竈構築粘土は左袖がわずかに残るばかりであるが、燃焼部の中で甕が口を上にして立った状態で出土した。

S570（竈付き） A 区検出。竈は竪穴外に三角形に張り出す。

S4412（土器埋設炉付き） A 区検出。企数型甕が炉体土器として転用される。同様の転用例は多い。

1-1-5. 9C 前葉の竪穴住居跡

S5977（竈 S5013 付き） 竈は両袖から奥側を残して壊れている。燃焼部は手前に大きく延び、奥には煙道の残骸かと思われる穴が見られる。

S6057 切り合いが激しくプランは明確でないが、西壁寄りに掘り込みを伴わない焼土面があり、地床炉の可能性がある。台石（3449）が竪穴中央付近の床直上より出土した。

S6228（土器埋設炉 S6282 付き） 道構プランは切り合いで明確でないが、東壁から 1.9m の位置に土器埋設炉がある。炉体土器の口縁が残る。

1-1-6. 9C 中葉～10C 前葉の堅穴住居跡

S2400（竈 S2391 付き） 竈埋土中より円盤状高台坏が出土したことから当該期の堅穴住居跡と見なした。

S640（土器埋設炉付き） A 区検出。炉体土器はループ状把手を持つ瓶？（3134）である。堅穴プランが不明瞭であるが、土器埋設炉は西壁より 60cm の位置にある。

1-1-7. 8～10C 前葉の堅穴住居跡

この他、A・B1 区検出の古代堅穴住居跡の中で詳細時期を特定しがたかったもののがいくつかある。

S2992 (=5002)（竈 S2993 付き） 3.5×3.2m の方形プラン。竈は天井が完全に落ち、両袖を残すばかりである。袖部の内側は著しく赤化する。

1-2. 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は、古代のもの 26 棟、古代以降と見られるもの 10 棟、古墳時代から古代までの時期幅を残すもの 67 棟がある（第 2 表）。

以下では特徴的ないくつかの掘立柱建物跡について、その分布等より 3 つのグループに分けて報告する。

掘立柱建物跡群 1 A 区南半の段丘崖際 C2/3 グリッドに、SB67・69・70 の掘り方方形あるいは布掘りの一群が軸を揃えて並ぶ。これらと主軸を越えるも重複して掘り方布掘りの SB71 がある。

同じく、A 区南半の段丘崖際 F1/2 グリッドに、2×4 間の縦柱で掘り方円形・布掘りの SB81 がある。主軸は越えるも、掘り方布掘りの可能性がある SB85 が SB81 西に接する。

掘立柱建物跡群 2 台地中央部の A 区北半 E/F7 グリッドに、3×6 間の側柱で掘り方方形・布掘りの SB80 がある。やや離れた C8 グリッドで、2×6 間の縦柱で掘り方方形・布掘りの SB36 が SB60 と主軸がほぼ揃う。

掘立柱建物跡群 3 B1 区 E17 グリッドで、2×3 間の縦柱で掘り方方形の SB103 がある。

同じく、B1 区 F16 グリッドで、2×3 間の縦柱で掘り方方形の SB125・SB124 が並び立つ。掘り方埋土は、黒色土・褐色土を互層状に埋め戻す。

この他、SB106（柱穴 S5877）は掘り方内より 8C 後半～9C 初頭の須恵器高台付塊（2913）が出土した。

1-3. 大規模な地崩れとその復旧（第 13 図）

1-3-1. 調査の方法と経過

B1 区の調査中に、D17/18 グリッド周辺で、比較的大ぶりな地山土ブロックを多く含む、明らかに本遺跡の一般的な構造埋土とは異なる“汚い”土の広がりが確認された。これと同様の土は B1 区北半に走る中世以降の溝状遺構群の壁や床面でも見られた（詳細は第 V 章を参照）。当初、この“汚い”土について、AT ブロックが特に目に付きやすかったことから、地山の一つである AT の自然堆積層が風化等によってブロック状になっているものと理解した。その上で、“汚い”土面で認識しうる黒色土の広がりや遺物の集中箇所でもって堅穴住居跡等の構造を認定し、掘削・記録を進めた（堅穴住居跡と認定したのは S6257・6258・6306 (=6256)・6313）。

しかし、調査を進めらるうちに、以下に示すような“汚い”土の特徴①～⑤が把握されていった。

- ① 分布が非常に広いこと
- ② 遺構と認識されたものについて掘削していくと、遺物には一定の分布・時期上のまとまりが見られる割に、遺構床面が認定しづらいこと
- ③ ② に関連し、本遺跡の堅穴住居跡床面に特徴的であった台石・貼床・硬化面の存在が見られず、土器類も不自然に立った状態等で大きな破片で出土する場合があったこと
- ④ 目に付きやすかった AT ブロックの他、古代以前の竈の残骸と見られる白色粘土塊の他、霧島アワオコシ・イワオコシのブロックやその前後の褐色ローム土ブロックも含まれること
- ⑤ ④ に関連し、ブロックがこなれておらず、一般的な構造埋土中のものと比較して明らかに大きいこと

この頃までには、B1 区の調査は“汚い”土の範囲を除いて大半が終了し、E17 グリッドで AT 下位の MB3 相当の XIII 層まで掘り下げる等、旧石器時代の遺物包含層調査を進めていた。E17 グリッドには“汚い”土は見られず、一般的な自然堆積層が確認できていた。そこで、“汚い”土と自然堆積層の関係把握を目的に、両者をまたぐ D17/18 グリッドの境にトレーンチを設定・掘

り下がった（第13図G～Hライン・図版26-1）。

“汚い”土を除いていくと、驚くことに「地山壁が引きちぎられた状況」で検出され、地点によっては大きくオーバーハングしていた。それは、あたかも崖崩れ跡のような姿であった。オーバーハングがあまりに著しい地点については、随時、壁を切り落とす等の安全対策を講じて掘削を続けた。しかし、2m近く掘り下げても底は出ず、安全管理上、掘削は一旦中止とした。ここまで作業によって、“汚い”土は「大規模な地崩れ跡を復旧した造成土（以下、造成土と略す）」の可能性が高いと理解するようになった。振り返ると、B1区山手の確認調査の中で、溝状造構の壁面に何故かATが断層状にずれて2つ以上の高さで検出され、その理由について全く理解できなかった点も、大規模な地崩れの痕跡と思えば大いに納得できることであった。

その後、任意に地点を選定し、造成土を掘削した。ほとんどの地点が掘削深度2m近くになっても底が出ず、安全管理上、人力による掘削は造成土中の遺物回収を目的とした最小限度に留めることとした（図版27-3・5）。その過程で、地点を越えたトレンドごとにS3415・3416・3265・3267・3269と遺構No.と同様に番号を与えて取り上げた。また、結果的には、造成土を認識する以前に堅穴住居跡等の遺構として記録したS6257・6258・6306（=6256）・6313は、造成土中の黒色土ブロックを誤認したものであった（図版26-5）。

造成土の底を探る作業はバックホーを投入して継続し、いくつかのトレンドで地崩れ基底面と見られる硬質の土層面の広がりを押さえることができた。地崩れ面ならびに造成土の記録は、掘削深度が4m近くに及ぶことも出てきたため、対象断面をロープ等で割り付けし、写真記録等も併用しつつ安全を確保して進めた。当然のことながら、たいへん危険な状態であることに変わりなく、早急に最低限の記録を済ませた後は、観察用の畦等を残しつつ即日中に埋め戻した。

1-3-2. 地崩れの規模と被害状況（第13図）

地崩れの生じた範囲は広く、D17Cグリッドの西側ならびにD17A/18～E19～20・F18A/B～20C/D・G19A/Cグリッドにまで及んでいる。谷側は掘削深度が限度を超えることや排水処理等の問題により、直接の掘削対

象からは除外した。地崩れ肩のラインを平面的に追っていくと、谷の方向に向かって大きく2つの単位に分かれる地崩れ跡が連続するよう見える。以下では、A～Dラインを含む方を地崩れ跡1・E～Hラインを含む方を地崩れ跡2と呼ぶ。

地崩れ跡1のうち、谷から見て、最も奥まった地崩れ跡の土層断面図はA～Bラインである。安全管理上、地表下4mまでの掘削で終了したため（標高約29m）、地崩れ基底面は掘めていない（図版28-2）。地崩れ跡の左右壁を見ると、左方は壁面が大きくオーバーハングし、右方は壁面が内に向かって断裂するように崩れつつあったとわかる。なお、1・2層は地崩れ以前に堆積していた黒色土等である。この土層断面から西に1.3mで地崩れの範囲は収束している。壁面はA～Bラインの壁面と同じく、ほぼ垂直からオーバーハング気味に落ち込み、基底面はあまりに深いため確認できていない。B1区北半の山手側にあたるC～Dライン（図版27-1・6）では、左壁面が垂直からオーバーハング気味に深く落ち込んでいる。最終的に、バックホーで左壁面を追いかける要領で掘り下げを継続したものの、基底面には到達できなかった（標高約29m）。

地崩れ跡2のうち、E～Fライン（図版26-2・3）は、B1区山手の確認調査の中で、溝状造構の壁面に何故かATが2つ以上の高さで検出され、その理由について全く理解できなかった地点である。地崩れ面に載る地山が複雑に垂直方向に裂け引きちぎられつつ崩れている。地崩れ基底面は標高約29m（推定、表土下3～4m）にあり、始良岩戸火山灰層（以下、A-Iw）からその直下の、非常に細粒で、かつバックホーで削り込んで歯が立たないほど硬質な土であった。G～Hライン（図版26-4）は最初に触れたD17/18グリッドの境に設けたトレンド壁面で、最終的にバックホーで掘り上げた。右に地山壁面がKr-Kb～A-Iw面までの3.5m近く垂直に立ち上がり、地崩れの大きさをよく示している。基底面はE～Fラインよりもやや深い位置にある。また、地崩れ壁に近い位置には旧表土からの亀裂が走り、今にも新たに地崩れを起こすような状態であった。地崩れ基底面はE～Fラインに同じくA-Iw下の細粒で硬質の層であり、トレンド底の狭い範囲ながら面的な広がりを確認した（標高約29m）。なお、この硬質層面で湧水が

見られた（図版 26-4 下側の白い部分）。

この A-Iw 直下の細粒で硬質の土について、調査当初、宮崎層群と認識していた。しかし、調査地の工事が本格化した段階で、宮崎層群まで切り下げられた高速道路法面を観察したところ、A-Iw 下には砂礫層、宮崎層群と連続して堆積することが判明した（図版 26-3～5）。すなわち、当初、宮崎層群と認識した A-Iw 直下の硬質層は宮崎層群ではないことになる。赤崎広志氏・松田清孝氏（宮崎県総合博物館）に図版 26-3～5 を見ていただいたところ、A-Iw 直下の硬質層について「A-Iw が水等の影響を受け、かつ下位が砂礫層であったこと等により、A-Iw 上部に粗粒部分が、下部に極細粒物質が淘汰されて残ったことにより生成された」ものではなかろうか」との御教示を得た。

まとめると、地崩れ跡 2 は標高約 29m の A-Iw 下部の非常に硬質の土層面が滑り、土地自体が横にずれるような格好で生じた。地崩れ跡 1 は標高 29m 以下でも基底面見えないものの、おそらくは礫層中あるいは宮崎層群上面付近を基底面とする、より大規模な地崩れであった。地崩れ跡 1 が発生した後、これに引きずられて地崩れ跡 2 が生じたものと理解できる。

なお、地崩れによって破壊された堅穴住居跡は、確認できたもので少なくとも 4 軒ある。S6300 は 6C 前葉、S6249 は 7C 後葉～8C 前葉、S6307・6283 は古墳時代～古代まで遺物からの絞り込み困難である。地崩れの生じたタイミングが、これらの堅穴住居跡が家屋として機能していた期間なのか廃絶後であるのか、調査の中では明確にできていない。

1-3-3. 地崩れ箇所の復旧作業

G～H ライン（図版 26-4）は地崩れの底面である A-Iw 下層面の上にいくつかの単位を持ちつつ、乱雑に崩落土を戻していく（10～18 層）。その後、10・11 層面で一旦水平面ができ、その上に黒色系の土砂（2～9 層）を載せて旧状に復している。なお、1 層は、B1 区・B2 区を分け下の水田等へ通じる追道の肩である。E～F ライン（図版 26-2・3）は、複雑に縦に裂け引きちぎられた地山土の隙間を埋めるかのように崩落土が戻されている。B1 区北半の山手側にあたる C～D ライン（図版 27-2）では、底面から 16 層までは不詳ながら、その上

に地山塊の転がり込み（15 層）があり、壁側より 15 層を覆っていくように土砂が大きく 3 回以上の単位で盛られていく。最終的に埋められたと見られる A～B ライン付近では 17 層以下は掘り上げていないため不詳。左右壁の崩落土等にあたる 15 層をそのままにしつつ 4～14 層が投入される。この層は他造成土と比較して黒色系の混じりが少ないものであり、遺物も大量に含んでいた。4・6～8 層上面がなす緩い凹面には、黒色土とともに一抱えもあるような川原石が大量に集積された状態で出土した（5 層・図版 27-4）。川原石は割れておらず赤化等も見られない。5 層の周囲には 3 層のような黒色土がある。この川原石の集積の性格について調査の中で明確な答えは出なかったものの、地崩れの最深部に相当する位置であることから、雨水等の天水対策、あるいは土留め機能を意識したものであろうか。祭祀行為等に関わる可能性も残っており、調査の中で直接の性格付けはできない。

1-3-4. 地崩れ・復旧作業の時期

掘削の安全管理上、検出面から 1～2m 前後の深度までの部分的回収であったにも関わらず、A～B・G～H ラインで見られたような黒色系土中より大量の遺物が出土した。遺物の時期は、縄文時代～9C 初頭前後までに収まっている（特徴①）。「1-3-2. 地崩れの規模と被害状況」で触れたように直接的に破壊された堅穴住居跡 3 軒の時期は 8C 前葉までに収まっている（特徴②）。地崩れ跡の壁面がこなれていない点からは、地崩れが生じてほとんど間を置くことなく復旧されたと見られる（特徴③）。

この特徴①・②から、地崩れは少なくとも 8C 前葉以降に生じ、9C 初頭までの約 100 年間のうちに復旧された。これに特徴③を加味すれば、どちらかと言えば 9C 初頭に近い時期の災害と復旧と言えよう。

また、本節「1-1. 堅穴住居跡」で報告したように、地崩れ跡の復旧範囲に接して 9C 初頭前後の堅穴住居跡が多く分布し、2×3 間の縦柱で掘り方方形の掘立柱建物跡も見られる。復旧範囲に直接載るものは見られない。復旧範囲に直接載る構造として最も確実なのは、B1 区北半の 12C 中頃以降に開削された道路状遺構群を持つことになる。

（藤木）

2. 土器・陶磁器 (第158~176図)

2-1-1. 8C前葉～中葉の土器の概要

土師器壺（中型壺）は古墳時代終末期と比較して胴部最大径の拡張、器高の減少で寸胴形となる（2801・2813）。8C前葉は、口縁部付け根のしまりがなく、直線的な胴部となる。8C中葉は、口縁部が「く」の字状でその付け根はしまり屈曲が明確になる（2785）。また、胎土精良でやや厚手の甕も見られる（2823・2846）。土師器壺は古墳時代以来の非回転台成形（2773・2796）、回転台成形（2774・2795）がある。後者は、口縁端部が平坦でかなり矮小化した把手を持つ。赤褐色を呈し胎土は精良である。二孔の甕（2817）もある。土師器壺は大きく三者がある。壺①：口縁端部内面に段を持つ（2778・2808等）。体部全体が緩く内湾し、外面のヨコナデや内面の板状工具ナデの痕跡が明瞭で、底部外面は丁寧なナデ仕上げとなる。器厚は薄手で、発色は褐色・黄白色等統一感はない。胎土は1mm以下でやや角張った褐色系統の砂粒を多く含む。壺②：全体的に厚手な作りで、底部に回転ヘラケズリ・ヘラ切りを持つ（2799・2805等）。発色は橙色で、胎土は精良あるいは1mm前後のよくこなれた砂粒を含む。壺③：須恵器に類似した器形と調整（2804・2809等）を持ち、発色は明褐色である。土師器皿の特徴は壺①と同じである。良好な造構出土資料が得られなかったものの、壺①との共通性からこの時期である可能性が高い（3183～3185等）。また、ループ状暗文を有す畿内系土師器（2820）も見られる。土師器壺・鉢・高台付塊・脚台付皿の器形は須恵器と同じ形態で、調整や焼成の異なる回転台成形の器種である。特に、胎土・調整から二者に大別される。①群：色調は橙色・黄白色で、胎土精良なもの。焼成堅緻なものはサメ肌状で軟質になると粉っぽい。回転ヘラミガキのある甕（3190・3191・3202）もある。②群：色調は鈍い赤褐色で、焼成堅緻なもの。胎土は基本的に精良ながら、2～3mmの白色粒（石英か）が混入する（2826・2827等）。②群は少数派である。

須恵器壺蓋は口縁のかえりが失われ、断面三角形状の短い屈曲となる。搬みは擬宝珠形が崩れて平らになる。須恵器高台付塊の高台は短くなる。須恵器広口鉢（2814）・須恵器甕は貯蔵具であろう。

2-1-2. 8C前葉～中葉の遺構出土土器

S670（2773～2779） 甕は非回転台成形（2773）・回転台成形（2774）がある。壺（2778）は口縁端部内面に段をもち、回転台成形である。須恵器壺蓋（2776・2777）は大ぶりである。

S2893（2785～2788） 須恵器壺蓋（2786）・甕壺形の須恵器甕（2787）がある。なお、甕（2785）は8C前半でも中葉、須恵器甕（2788）は口縁端部形態から後半か。

S5986（2795・2796） 甕は、S670同様に古墳時代的なもの（2796）・古代的なもの（2795）の二者がある。

S5990（2797～2800） 甕・鉢・壺のセットである。鉢（2798）はヘラミガキ調整と底部に木葉痕があり、古墳時代的な手法である。

S6000（2801・2802） 甕・須恵器壺蓋があり、8C前葉の様相を示す好資料。

S6306（2808～2812） B1区の造成土（S3415等）面で堅穴住居として認めたものであるが、時期的なまとまりを持つことからここに掲載した。土師器食器類（2808～2810）は調整や胎土が各自異なる。須恵器甕（2811）は古墳時代に比べて口縁端部の凹凸が少ない。

S8146（2820～2822） 墨書（記号か）を持つ畿内系土師器皿と須恵器甕がある。須恵器甕（2821）は中～南部九州的な二重口縁を呈するものか。

S8791（2823～2830） 甕（2823）の胎土は精良で、内面は削りに近い指ナデが特徴。脚台付の皿類（2826・2827）も認められる。須恵器甕（2830）底部は手持ちヘラケズリ調整である。

S6800（2854・2855） 須恵器壺蓋（2854）は口縁部形態から8C前葉でも中葉に近い。中型甕（2855）の口縁部形態は8C中葉の様相を示す。

S8640（2862～2865・2867） 壺は、口縁内面に段を持つもの（2862）・直線的に開くもの（2864）がある。2864は須恵器壺蓋（2863）・須恵器高台付塊（2865）に後出する8C後葉に近い時期か。

2-2-1. 8C 後半～9C 初頭の土器の概要

土師器壺は胎土が精良なもの（2896・2929）と砂粒混入が著しいもの他に、胎土または調整の異質な外来系の一群が出現する。企救型壺（2904）・豊後型壺に類似した一群（2910）である。後者は、胎土と外面の調整は在地的であるものの、内面に當て具痕が残る。また、外来系壺の要素は、調整のみならず口縁部形態にも影響が見られる（2888・2896）。こうした、外来系壺やその影響を受けた在地胎土の壺の出土量が多くなる。土師器壺は回転台成形と非回転台の両者が見られる。把手は8C前半（2795）と比較して外へ開かずには全体が直立する（2860）。また、非回転台成形（2857等）も含めて棟（円形ほぞ穴）を対持つものがある。土師器壺は、8C前半に比べて壺①は減少し、壺③はほぼ見られない。壺②も少數である。皿も同様な傾向を示す。主要な食器類は、土師器・須恵器高台付塊に置き換わる。土師器壺・鉢・高台付塊・脚台付皿は8C前半で同様で、①群を主体に②群は少數（2926・2976等）のあり方を示す。畿内系土師器皿といった暗文土師器も存在するが少數である。布痕土器は遺情に伴って出土する。

須恵器の胎土は、白色粒（長石・石英等）が混入せず緻密になる。焼成は、堅密なもの（暗灰色や赤褐色等）と不良のもの（灰白色）の差が極端である。歪に変形したもの、灰かぶりや自然釉が頗著に見られるものが多くなる。器形・調整上の特徴として、須恵器壺の口縁端部は丸くまとまる（2917）か、平坦面（2922）ないし凹線（3376）となる。跳ね上げ口縁（2899）の形態もある。外面のタキ目は粗い平行（2838）や格子目の他に、新しい様相（2903・2917）が出現する。また、内面には平行當て具痕（2902）が認められる。須恵器高台付塊口縁部は外反からやや内湾気味、直線的に開く形態となる。高台は体部に接近していく。高台付塊や塊蓋の内面中心の高まり（突起）を不定方向にナデ消すもの・ナデ消さないもの、内面全体に不定方向にナデ調整を施すものがある。内面全体ナデ調整のものは、器形の外縁に沿って大きく四角形あるいは六角形等といった多角形状にナデした後、内面の中心部あたりを直線方向にナデ調整する。この手法は8C中葉～9C初頭に認められる。

2-2-2. 8C 後半～9C 初頭の遺構出土土器

- S460 (2870～2872) 須恵器高台付塊（2871）・布痕土器（2872）がある。
S4412 (2904～2906) 壺（2904）は企救型壺である。壺（2905）はハケ目とヘラケズリ調整が施され、技法的には異質な在地胎土のものである。
S5001 (2910～2912) 壺（2910）は口縁部形態と内面調整（同心円當て具）に特徴のある在地壺である。
S6060 (2917・2918) 壺（2918）は豊後型壺で、平行當て具痕が残る。
S6313 (2920～2922) B1区に見られた造成土（S3415等）面で堅穴住跡として誤認したものである。最終的に2920～2922は造成土中のものであるが、ある時期的なまとまりを持つことからここに掲載した。
S3415・3416・3265・3267・3269 (2938～3052)

地崩れ跡復旧の造成土中出土。高台付塊（2978）の胎土は土師器壺そのものである。コップ形に近い高台付塊（2979）は回転ヘラミガキがある。撒みが高台の茶托状をなす須恵器塊蓋（2997・2998）や輪の羽口（3023）も出土した。須恵器横瓶（3042・3043）は焼成や調整の特徴から古代に属すると考えられる。

この他、S5884の須恵器高台付塊（2916）底部に「也」と読めるヘラ描きがある。S7242は小型壺（2927）があり、外面ハケ目・内面ヘラケズリを持つ。

2-3-1. 9～10C の土器の概要

土師器壺は全体的に丸みを帯び、外面にはハケ目調整、内面にはヘラケズリが施される（3073・3107等）。全体をカキ目状にハケ調整した後、底部付近はタテ方向へのハケ目とする。口縁部は大きく伸びて凹凸をなし、端部は玉縁または平坦面を持つ。口縁部内面にもヨコハケ目を施す。S7523（3122）は外面に平行タキ調整が、底部内面に指頭痕が残存する。胎土は直径1～2mm、大きい場合で3mmの大岩片が多く含まれるようになる。一見して弥生土器の胎土に近い。法量的には、胴部最大径24cm前後の大型壺・16cm前後の中・小型壺（3092等）に収斂する。3073・3107に代表される壺は、9C初頭～前葉まで企救型壺（3103・3104）や前代までのタイプ（3074・3115）と併存するが、そ

れ以降は主体となる。土師器瓶の胎土および外面調整は、甕と同じくハケ目である。把手は円環状となる(3134)。8C代に見られた胎土精良・発色が赤褐色の回転台成形の甕は見られない。食器類は、土師器坏(3088等)・土師器高台付塊(3108)の他、円盤状高台を有する土師器坏(3256)・黒色土器(3139・3150)等が見られ、9C後葉～10C前葉にかけて多様化する。胎土は甕と異なり、精良または微細な砂粒が多く混入する。土師器高台付塊(9C前半代)は一見して弥生土器の胎土に近い。高台付塊の高台には、伸長して外に張り出しあ氣味のもの(3136)、高台内面に花弁状指頭痕を持つもの(3237・3238)がある。布痕土器も引き続き見られる。土製支脚の存否は不明である。

須恵器高台付塊(3083等)は高台が体部と一体化する。その出土量は、円盤状高台を有する須恵器坏(3360)も含めて急減し、逆に土師器食器類が増加する。須恵器甕は8C代で見られた特徴に加えて、車輪文當て具が主に使用される。

2-3-2. 9C前葉～中葉の遺構出土土器

S4425(3107～3110) 甕・高台付塊・布痕土器がある。9C前葉段階の器種構成を窺える資料である。

S4709(3111～3114) 甕・須恵器高台付塊がある。

S4432出土遺物(3116・3117)と同じく、9C前葉の煮沸具と食器の組成を示す。

この他、S457は新しい様相の甕(3073)と古い様相の甕(3074)が伴っている。S1854は小型甕(3092)・瓶(3095)があり、瓶は二孔である。S4411は企型甕(3102・3103)があり、3103の口縁部は単純化している。S8985は須恵器高台付塊(3124)・甕(3126～3129)があり、3128は内面に車輪文當て具痕を持つ。

2-3-3. 9C後葉～10C代の遺構出土土器

S640(3134～3136) 瓶・高台付塊がある。高台付塊(3136)の体部は丸みを帯び、高台は伸長する。9C後葉より下る10C初頭～前葉か。

S7695(3139) 黒色土器の塊(3139)外面上には墨書きと丁寧なヘラミガキが残る。

S744(3142～3147) 大型鉢(3142)の底部は丸底

で、全体形の窺える資料である。坏(3143)と高台付塊(3147)があり、10C前葉に近い土器群か。

S8140(3148～3151) 甕(3148)の口縁部は短くなり、内面のハケ目調整は省略されている。回転ヘラミガキを持つ高台付塊(3149・3150)は全体的に薄手で高台は短いつくりとなる。10C後半代の土器群か。

2-4. 遺物包含層出土土器・陶磁器(8～10C)

土師器坏類・陶硯類・綠釉陶器・越州窯系青磁がある。土師器坏類のうち、土師器坏(3187)・皿(3189・3190等)は回転ヘラミガキが施され、口縁端部は短く外反する特徴を持つ。概ね8C代にあたる。3250～3262は9C後葉～10C代の幅に収まる。陶硯類は須恵器の風字硯(3382)・圓面硯(3383・3384)がある。その他、容器内面に擦痕や墨の付着が認められる須恵器(3385～3402)があり、転用硯の可能性がある。綠釉陶器は高台付塊(3403～3406)がある。高台や胎土の特徴から畿内・東海産と考えられる。越州窯系青磁は碗(3407～3411)がある。3409は輪花の大碗、3411は蛇の目高台である。

なお、当該期の移動式窯の可能性あるもの・瓦は別に報告している(本章第9節を参照)。(今塙屋)

この他、管状土錐は近世以降のものまで含めて計1003点あり、古代あるいはその可能性の高い遺構埋土中から105点が出土した。そのうち特徴的なもの39点、ならびに遺物包含層等出土で須恵器質のもの13点、棒状土錐3点(出土分全て)を図化した(3278～3332)。当該期の管状土錐は、全体に長さ3～5cm・断面径1.5cm前後・孔径0.4～0.8cmに収まり、小型の筋錐形のことが多い。8C後～9C初の堅穴住居跡S7242出土管状土錐(3278～3299)は一括性が高く、いくつかの胎土・サイズでまとまる。3309は超小型品で胴が強く張り出す。3310・3311は赤みの強い胎土で他土錐の中で異色である。棒状土錐(3317～3319)は復元長6.0cm・断面径1.2cmの小型品である。須恵器質の管状土錐(3320～3332)は生焼けに近い焼き上がりのものや明瞭な面取り痕の残るものが見られる。胎土・焼成からは複数窯からの供給が予想される。(藤木)

3. 石器 (第177~198図)

3-1. No.付石器

No.付(3412~3487・5443)には敲石・磨石・凹石・砥石・台石・棒礫・円礫・打欠石錐・抉りある石器・摩滅面ある礫・軽石加工品がある。大半が堅穴住居跡床直上出土である。なお、削器・二次加工ある剥片・石核・磨製石斧・磨製石斧未製品・打製石斧・櫛器は縄文石器等の混入である。

8C前半(前葉～中葉)(3412~3428)の敲石・磨石・凹石は少ない。凹石が尾鈴山酸性岩類である他は全て砂岩製である。敲石(3425)は細長い縦を用い、胸部端よりの平坦面表裏にそれぞれ敲打による大きな凹みが残る。砥石石材はホルンフェルス・砂岩・台石石材は全て砂岩である。いずれも比較的小ぶりである。台石は弱い敲打痕の残る場合が多い。摩滅面ある礫は砂岩の破断面に強い摩滅が残るもので、破碎面の凹凸が求められた可能性がある。この他、軽石加工品が見られる。

8C後半～9C初頭(3429~3439)の敲石は砂岩・尾鈴山酸性岩類製があり、後者は厚みある楕円礫の端部を使い込むものである。砥石は硬砂岩製で板状の小さなものがある。台石石材は全て砂岩で、台石(3430)は礫を意図的にうすい平石様に分割し用いた可能性がある。いずれの台石も摩滅面がよく観察され、強く凹むような敲打痕は残されていない。

9C前葉(3440~3450・3454・5443)の敲石・磨石は全て砂岩製で、全体にあまり使い込まれていない。台石石材は砂岩が好まれ、尾鈴山酸性岩類・ホルンフェルスが各1点ある。大半の台石には摩滅を中心とした使用痕が残される。

9C後葉～10C前葉(3451・3452)は堅穴住居跡S744の1軒のみで石器が出土した。尾鈴山酸性岩類製円礫と砂岩製棒礫が各1点ある。

3453・3455~3463はNo.付のうち、遺構の時期に幅の大きいものである。抉りある石器(3453)は砥石等の一部であろうか。縄文石器等の混入の可能性も残る。目の細かい粘板岩製の砥石(3456)はよく使い込まれている。風化激しく使用痕不明瞭ながら花崗岩製磨石と見られるもの(3462)もある。

古代全般の特徴として、まず、石器自体の数量が古墳時代以前と比較し少ない。敲石・磨石は砂岩が好まれ、一部、尾鈴山酸性岩類が見られた。台石は砂岩が多用され、ホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類が少數見られた。台石は敲打痕の顕著なものはほとんどなく、摩滅と弱い敲打痕が広がるものが多い。砥石も砂岩製が好まれ、少數派であるが粘板岩・硬砂岩・ホルンフェルス製のものも見られた。摩滅面ある礫も砥石に関連する石器であろう。この他、抉りある石器・軽石加工品がある。

3-2. 埋土中出土とその他の石器

3493~3719は堅穴住居跡の他、古代の遺構埋土中出土の敲石・磨石・凹石・砥石・台石・円礫である。No.付石器の様相から見ると、敲石・磨石・凹石の大半は縄文石器等の混入が疑われる。砥石石材のうち凝灰岩はNo.付石器に見られなかったものであり注意される。同石材は本遺跡では中世以降に多用される。砥石・台石は古墳時代以前のものが混入する可能性がある。

特殊遺物として火打石(3488~3490)・砥石転用の紡錘車(3491)・石帶(3492)がある。

火打石は8C後半～9C前半の堅穴住居跡埋土や8～9Cの土器片を含む土坑埋土より出土した。本遺跡から出土した計28点の火打石をはじめ、火打石用の原石・分割礫等は、遺物包含層ならびに古代以降の遺構埋土中出土で占められる。一方で、多数を占める古墳時代以前の遺構埋土中からは火打石関連資料が一切出土していない。これを根拠に当該期の火打石と認定した。

紡錘車を砥石転用と見た根拠は、その形状と石材である。穿孔は先細りの工具でなされたものか、孔径は上下に広い。孔は上面中央にあき、下面はやや片寄る位置となる。側面の四面には砥石面がそのまま残されるようであり、また、引っ掛けたような記号が刻まれる。出土遺構からは9C初頭前後までに収まる。

石帶(丸鞘)は欠損著しい。正面や上～側面といつた外に見える部分は無数の削痕を残しつつも、非常に丁寧かつ平滑に研磨される。見えなくなる裏面は正面等ほど丁寧な研磨でない。潜穴は小さい。色は黒。10C前葉の土坑S8097埋土より出土した。

(藤木)

4. 金属器（第198図）

出土遺構の時期ならびに形状から判断して、当該期と見られる鉄製鐵（3720～3726）・鉄製刀子（3727～3729）がある。

円面鏡・瓦はそのほとんどが遺物包含層中から出土し、堅穴住居跡には伴っていない。

（藤木）

（竹田）

5. 特殊遺物の出土分布

遺構埋土や遺物包含層中より出土した、企救型甕・豊後型甕・越州窯系青磁・綠釉陶器・移動式竈の可能性あるもの・風字鏡・円面鏡・瓦・石帶といった特殊遺物について、分布状況をグリッド別で示しておく。なお、各遺物間にはもちろん時期差があるものの、分布には一定のまとまりを見ることができるため、分布1～3ならびに分布α（分布1～3より外れたもの）と分けた。分布1はE/F4/5グリッドを中心とするA区南半と北半の境周辺、分布2はE/F12グリッド周辺、分布3はB1区である。

器種等 分布：グリッド名×点数（点）

企救型甕 分布1 : C4×1・D5×1・E4×4・
F4×1・F5×3・F6×1
分布2 : F11×2・F12×1
分布3 : D17×1・E14×1・E17×1・
F15×1

豊後型甕 分布3 : D17×1・E16×1・E17×1・
F15×1

越州窯系青磁 分布1 : E5×1・E7×1
分布3 : E14×1
分布α : B12×1・B1区北半×1

綠釉陶器 分布1 : D5×1・E4×1・F4×1
(他、A区南半M62(位置不詳)に1点あり)
分布α : D9×1

移動式竈か 分布1 : F4×1

風字鏡 分布1 : E6×1

円面鏡 分布2 : E12×1・F12×1

瓦 分布α : F8×1・表採1

石帶 分布α : C7×1

豊後型甕の全て・企救型甕の大半は古代の堅穴住居跡より、石帶は土坑より出土した。一方、越州窯系青磁・綠釉陶器・移動式竈の可能性あるもの・風字鏡・

第6節 中世の調査

1. 遺構(付図)

1-1. A区南半の様相

A区南半は、溝状遺構 S52・53・58 を挟んで東西で様相を違える。

溝状遺構 S58 は検出面幅 2m 前後であるが、検出に手間を要する程度掘り下げた上での幅であるため、本来は幅 2m 以上と見られる。断面は外に大きく開く緩い台形である。S58 底面より 16C 後半～末と見られる瀬戸焼の天目茶碗(3783) が出土し、埋土中からも 13C 後葉～15・16C にかけての遺物が多いことから、近世を待たずに埋没したのであろう。

溝状遺構 S52 は S58 から東に 3～4m 離れて平行して走り、溝状遺構 S53 は S52 より枝分かれするような格好で走る。S52・53 について、土層断面でも切り合ひが明確でない。埋土中遺物からは、S58 と同じく、近世を待たずに埋没する。溝状遺構 S52・53・58 は南北の段丘崖から始まり(崖面との関係は調査区外のため不詳)、A 区北半・南半を分ける F5/6 グリッド付近で東に曲がり調査区外へ延びる。

溝状遺構群東側は、中世以降と見られる掘立柱建物跡(第2表を参照)・15～16C の土製鋳型の出土した土坑 S131 が広がり、居住・作業空間であったのであろう。古手のものでは、12C 後葉で北寄りの床面よりやや浮いて土師器壺・皿(3731・3732・3736) 3 点が内面を上にして並んで出土した土壙墓 S581 も見られる。溝状遺構群が東に曲がるのは、これらを囲む意識があったものと見られる。

一方、溝状遺構群西側は、東側に比べてわずかに高い地形になっていた。そのための削平を考慮しても遺構密度は極端に低く、床面からわずかな立ち上がりを残して検出された土壙墓 S330・336・337 等にはほぼ限られた。一帯は墓域であった可能性がある。S337 は長軸 1.0m の隅丸方形プランか。土師器壺 1 点が南より床面より出土した。13～16C のものである。S336 は S337 の南西隣に位置する。床付近の遺物はないものの、埋土中遺物から 16C のものか。S330 は埋土中より土師器壺 1 点が出土した。13～14C のか。S303・351 は遺構形状・位置・主軸方位等より土壙墓の可能性がある。

1-2. A区北半の様相

溝状遺構 S7044 は南北に走る 2 段掘りのもので、底は V 字状に狹くなり一旦弱いテラスのようなものを介してラッパ状に開く断面形状である。底寄りの下半は幅 1m と狭く、開いた上半は幅 2.8m と広い。埋土中遺物はほとんどないものの、中世土師器が見られた。S7044 は南が調査区外へ、北端が現在の里道に切られるものの、延長上には住吉神社西にある追道が控えており、これとつながる可能性がある。追道は、集落と段丘下の水田を結ぶものである。S7044 に斜行する溝状遺構 S4896 も埋土中遺物は中世までに収まる。

溝状遺構 S4861・4911・4938・4966・4991・4996 ならびに道路状遺構(S-No.なし・波板状凹凸のみ検出)は複雑に切り合うため前後関係が掴めていない。ただし、S7044 と平行して南北に走ることから、それらの開削は中世に遡る可能性を残す(詳細は本章第7節を参照)。この他、竪穴状遺構 S7765・8380、土壙墓 S7207・7558 や、中世以降と見られる掘立柱建物跡(第2表)がある。また、F9 I 層より遺構検出中に銅鏡(3924)が出土した(園版 29-6)。

1-3. B1・B2 区の様相

B1 区では掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土壙墓等が検出された。竪穴状遺構は可能性のあるものも含めて 12 基あり、E13 グリッド周辺、E16/17・F16～18 グリッド周辺に分布する。全般に埋土中・床直上遺物は多くない。S2742 床には土坑 S5904 が掘り込まれ、破碎した大量の赤化廻とともに東播系須恵器壺の破片・円碟・台石等が出土した。なお、S2742 と主軸を描えて 30cm 南西に離れて S2727 がある。S2727 は S2742 に比べて一回り小さく、竪穴内に壁より 30cm 内側でピット 9 基が巡っており、中央には土坑 S2737 がある。付近には、竪穴状遺構 S5885、土壙墓の可能性ある S2720 が分布する。S5885 の床直上には土師器壺(3751)の他、古代の壺破片も出土している。S5953 は北西コーナーの西壁側に張り出しを、北東コーナーには高低差 20cm の平面三角形のテラスを持つ。S2028 は竪穴内の壁際にピットが巡るもので、床面には平面を持つ川原石が 3 点、棒砾が 1 点残されていた(いずれも使用痕なし)。東壁には突起状に 1 段高い小さなテラスがあり(段差

高約 10cm)、テラスから転げ落ちたような状態で台石 (3845・3846) が出土した。竪穴空間外ではあるが、南側には灰を多く含む土が広がる。**土壤墓**は E/F15 グリッド周辺に 17 基ある。楕円～隅丸方形という遺構平面形と土師器皿が数枚程度まとめて出土するという状況より認定した。陶磁器類の副葬はない。**S2427** は長軸 2.8m で、北端埋土中より土師器壺が出土した。**S2868・2867・2866** は調査時では 3 基切り合うように掘えたが誤認の可能性を残す。

B2 区は、中世遺構・遺物とともに希薄である。住吉神社等による削平、あるいは土地利用の変化等を考慮すべきであろう（詳細は本章第 8 節を参照）。

1-4. 挖立柱建物跡の柱穴埋土について

中世以降の挖立柱建物跡は、その柱穴埋土について、白色粘土が充填されたもの・黄みの強い黒色土で乾燥すると硬くブロック状に破碎しやすいものの二者がある。なお、柱穴埋土から土師器壺・皿の完存品等がまとめて出土することもあった。（藤木）

2. 土器・陶磁器（第 199～201 図）

竪穴状遺構のうち、**S2028** の柱穴より回転糸切り底の土師器皿 (3738・3739) が出土した。3738 は口径が大きく低平な器形のため 12C 前～中葉、3739 は 13C 代に収まるか。**S7765** にはやや厚手の土師器壺 (3753) がある。14C 中葉～15C 前葉か。

土壤墓からは土師器のみ出土した。**S581** で壺 (3731・3732)・皿 (3736)、**S2427** で S581 例より器高変わらず径のみ小さくなる壺 (3733)、**S2956** で 3733 と口径・器高の同じ壺 (3734)、**S2867** で 3733 と類似するもやや器高が大きい壺 (3735・3741)、**S2865** で壺 (3742・3744)・皿 (3747・3748)、**S2868** で S2865 例に類する壺 (3743)、**S7207** で法量や器高が S581 例に類する壺 (3740・3745・3746)・皿 (3749・3750)、**S2659** で縮小化し作りも難な壺 (3760) が出土した。

この他、柱穴出土として **S777** の土師器壺 (3730) は器形に古代的な様相を残す。**S2311** で土師器壺 (3754・3755)・皿 (3756～3758) のセットがある。**S152・2788** の土師器壺 (3752・3759) は S2311 例に器形は類するものの法量は大きい。**土坑 S131** では土製鋳型 (3785

～3787)・輔羽口とその付帯部分 (3788) が出土した。鋳型の円弧から大型の鋳造物が想定される。古代の土師器高台付塊 (3789) の他、中世土師器破片も見られることから、15～16C の遺構であろう。溝状遺構 S52・53・58 (3762～3783) は図化に耐えうる遺物を掲載した。

この他、遺物包含層より土師器鍋・釜 (3792・3793)・瓦器塊 (3810～3812)・東播磨系須恵器鉢 (3818)・白磁碗・皿 (3828～3831) などが出土した。（今塙屋）

3. 石器（第 202～206 図）

No. 付遺物 (3843～3848) は 13C 後半の竪穴状遺構 S2028 で台石 (3845・3846) がある他、詳細時期不詳ながら竪穴状遺構 S2742 床に掘られた土坑 S5904 で円礎 (3843)・台石 (3844)、中世以降のビット S2631 で台石 (3847)、中世以降の土坑 S8149 で敲石 (3848) がある。3843～3848 まで全て砂岩製である。3847 は柱の根固めの可能性がある。

埋土中出土 (3849～3922) で特記されるものとして、石錫転用の皿 (3851)・チャート製火打石原石 (3853)・溝状遺構 S58 出土の硬砂岩製敲石 (3891・3892) 等がある。この硬砂岩製敲石や尾鈴山酸性岩類製敲石・磨石の一部には風化があまり進んでないものが含まれ、繩文石器と容易に区別できる。砥石石材は砂岩・頁岩が半数ずつあり、少數ではあるが凝灰岩質のものやシルト岩も見られる。頁岩はコッペルン状で節理の頗著な河原石で、続く近世以降でも砥石石材として好まれている。この他、各遺構埋土より旧石器時代以降の多数の石器・石製品が出土した。（藤木）

4. 金属器（第 206 図）

土壤墓 S7558 より身断面方形の鉄釘 (3923) が出土した。頭幅 2.3cm・釘身長 9.2cm・断面径 0.5cm と大ぶりである。遺構の時期を優先してここに掲載した。銅鏡 (3924) は密教法具の六器と見られ、1 点のみの出土である。

なお、鉄滓については時期の特定が困難であったため、第 7 節の近世の金属器の中でまとめて報告した。

（竹田）

第7節 近世の調査

1. 遺構(付図)

1-1. A区北半の様相

第II章でも触れたように、A区北半には昭和50年まで家屋等が建っており、これらに伴うコンクリート製の基礎等を除去する目的で、表土下の主に中世以降の遺物を多く含む遺物包含層まで一気に表土剥ぎを進めた。このため、A区北半の遺構分布等は掘立柱建物跡(第2表)や深い溝状遺構を中心に確認される。

溝状遺構 S4861・4911・4938・4966・4991・4996ならびに道路状遺構(S-No.なし・波板状凹凸のみ検出)は、複雑に切り合いつつ南北に走り、A区南半との境付近で東に曲がる。土層断面で切り合いを検討したものの、土層断面ごとに堆積が変化しており、たいへん複雑な重複関係にあったようである。C9グリッド付近からは各遺構とも底面が徐々に高くなり、そのまま掘り方を失っていく。埋土中からは礫の集積がいくつか見られた他、主に近世後半の遺物が出土し、一部、近代まで下がるものもある。前節でも触れたように、溝状遺構・道路状遺構群の開削は中世に遡る可能性を残し、近世後半以降には徐々に埋没したのであろう。

これを如実に示すのが、明治時代の地籍図を元に作成した土地利用図(第26図)である。S4911等の溝状遺構・道路状遺構群は、屋敷地A・Bに挟まれた空閑地(畠地)に相当し、A区南半との境付近で東に曲がる部分も地籍図上の区画として残っている。少なくとも、溝状遺構・道路状遺構群の痕跡は明治時代までは意識された空間として残っていたようである。これと関連し、溝状遺構 S4861は埋没後、そのまま、長径30cm前後の細長い川原石による石組列に置き換わる。明治時代の地籍図で見える屋敷Aの西側の境界にはほぼ重複しており、最終的に屋敷地と外を区画するものへ変化したようである。川原石の間からは、近世後半へ近代の陶磁器類(3933~3936)が出土した。中世の溝状遺構 S7044も、屋敷Bの西側の境界とほぼ平行しており、これも S4861と同じように埋没後も空間を分ける意味が残ったものであろう。

1-2. A区南半の様相

A区南半は畠地として利用されていたようである。耕作に関連する遺構として、A区南半で段丘崖線に直交して走る素掘小溝がある。東側より順に、素掘小溝 S400・156/414・157/413・No.なし・158・No.なし×3条・70・71・No.なし・300の合計12条検出された。素掘小溝のいくつかは16C末以降に埋没したS52等の溝状遺構群を切るために、早ければ17C代には残されたことになる。最大延長14m・上面幅30~40cm前後、残深20cm前後であり、断面形態はU字を基本に多様である。溝は最小2m離れて平行する。出土遺物はいわゆる細片化する。埋土はしまりがなく、検出後すぐによく乾燥した。なお、溝状遺構 S8391とそれに接するS-No.なしの溝状遺構は屋敷空間と畠地空間を分ける何らかの痕跡であった可能性がある。

1-3. B1区の様相

明治時代の地籍図では畠地であり、その山廻にあたるB1区北半は溝状遺構ならびに墓域となっていた(詳細は第V章を参照)。

F16グリッドにおいて3点の棒礫が三ツ葉状に並んで出土した(S2596)。周囲を精査したところ、掘り込みは失われていたが黒いシミ状の床面と思しき方形プランが認識された。礫は全てよく赤化しており、作業小屋等の炉あるいは屋外炉等の可能性が十分考えられた。そこで、礫の脇より出土した、燃料材と見られる炭化物2点を採取し樹種同定・年代測定を実施した。その結果、マツの仲間と広葉樹で17C後半以降のものと判明した(詳細は第VII章を参照)。

その他、土坑 S2000がF14グリッドにある。楕型をしたもので、床面から壁まで丁寧に黄白色粘土を貼り付けていた。一見すると手水鉢のようであり、近現代の家屋に伴う排水沟中ゴミ等の沈殿物 S4736に酷似する。粘土を貼るのは漏水防止と想像されるが、S2000の用途は不詳である。埋土は黒色土で、下部の粒度は粗い。埋土上部で鉄製品(脆弱なため取上困難)とその下より錆着した寛永通宝(4169・4170他)が出土した。

なお、B1区でもA区南半で検出された素掘小溝がないか注意して検出作業にあたった。しかし、全くその痕跡すら見ることはできなかった。

(藤木)

2. 土器・陶磁器 (第 207~209 図)

柱穴・土坑等

S2165 (3925~3926) 陶器壺 (3926) は薩摩焼である。3925 の底部に墨書 (漢字の「竹」) がある。青磁碗 (3928) を除き、18C 後葉~19C 前葉の陶器である。S4733 (3929~3931) 白磁皿 (3931) 以外は陶器で、近世でも前半以降の遺物である。

S4934 (3940~3943) 薩摩焼甕・鉢 (3940・3941) と唐津焼擂鉢・鉢 (3942・3943) の他、近世前半~後半の遺物が多く出土した。

S9017 (3971~3977) 近世白磁 (3971)・陶器仏飯器 (3973)・萩焼碗 (3974)・堺および明石系擂鉢 (3976)・陶器大甕 (3977) といった近世後半の遺物が主体である。縁釉陶器 (3972) や景德鎮系青花皿 (3975) も混入していた。

溝状遺構

S4938 (3938・3939・3946・3951) 遺物は各時代に多岐にわたる。福建・広東系青花碗 (3951) と、それより新しい近世前半を中心に近世後半までの陶磁器類が主体的に出土した。

S4966 (3937・3944・3945・3947~3950・3952・3953) S4938 と同様に遺物は各時代多岐にわたる。肥前系の陶器皿や碗 (3948・3953) といった近世前半を中心として、近世後半にかけての陶磁器類が出土した。

S4861 (3933~3936) 陶器仏飯器 (3934) 等、近世後半~近代の陶磁器類を中心に出土した。

S4991 (3954~3970) 堀・明石系陶器擂鉢 (3970) といった近世後半の遺物が主体で、近現代陶磁器も出土した。常滑焼甕 (3959)・備前焼擂鉢 (3962・3963)・陶器おろし皿 (3964)・福建・広東系青花皿 (3968・3969) といった中世陶磁器と京焼風陶器碗 (3967) のような近世前半の遺物も認められる。

2 包含層出土の土器・陶磁器

土師質の甕 (3978)、陶器は近世前半 (3979~3985)、近世後半 (3986~3991) がある。萩焼 (3991)・肥前系 (3981・3988)・薩摩焼 (3984・3985) がある。磁器のうち、染付は近世前半 (3992) と後半 (3995) で、近世白磁の碗 (3993・3994) は中国産である。景德鎮系 (3996・3997) と福建・広東系 (3998) の青花碗・皿

は、絵付けの全体形が不明であるため、時期的に下限となる近世の遺物として報告したが、むしろ中世のものと考えたい。その他に土製人形 (3999~4001) がある。動物像 (3999) は彩色が残るが、それ以外は残っていない、あるいは無彩色と考えられる。近世の佐土原人形と推測される。

(今塙屋)

3. 石器 (第 210~217 図)

全て埋土中出土 (4002~4143) で、特に溝状遺構 S4938・4966・4991 出土が大半を占める。特記されるものとして、S4966 出土の硯 (4033)・砥石 (凝灰岩質のもの 4036・4038 等、頁岩製 4034・4035・4037・4039 等、砂岩製 4044・4045 等)・チャート製火打石分削礫 (5438)・S4991 出土の台石 (4131)・挽き臼 (4133)・砥石 (凝灰岩質・頁岩製・砂岩製) といった各種生活用具の他、空風輪 (4056)・板碑 (4057) といった本来葬祭空間にあるべきものも溝状遺構 S4991 より出土した。砥石石材は砂岩・頁岩が半数ずつあり、少數ではあるが凝灰岩質のものやシルト岩も見られる。凝灰岩質のものには、木目調の美しい天草砥石を含む。頁岩はコッペパン状で節理の頗著な河原石であり、破損が著しい中、破損面も巧みに砥面として利用し続いている。この他、遺構埋土より旧石器時代以降の石器・石製品が出土した。

(藤木)

4. 金属器 (第 217・218 図)

鉄釘 (4144~4149)・銅片 (4150)・銅製の容器蓋かと見られるもの (4151)・煙管 (4152)・鉄滓 (4153~4159) がある。

鉄滓は、A 区を走る中世~近世後半 (一部、近代まで下がる) の溝状遺構群 (S52・58・4938・4966・4991) 等の埋土中やその周辺に分布が見られる。特に、炉壁や轆羽口が出土した D4/5・E/F3 グリッドを中心に鉄滓の集中が見られることから、遺構としての確認はできなかったものの製鉄関連の場があったものと見られる。

この他、銭貨については、洪武通宝 (4176~4178)・古寛永通宝 (4160~4162・4183~4188)・新寛永通宝 (4163~4175・4189~4200)・元豊通宝 (4201) がある。新寛永通宝の出土が目立つ。また、洪武通宝 (鉄錢) も見られた。

(竹田)

第8節 近代以降の調査

1. 遺構 (第14・15図ならびに付図)

1-1. 住吉神社関連の遺構

1-1-1. 境内・鳥居基礎

B2区は住吉神社境内である。境内のうち、參殿・本殿部分の表土直下より、たいへん硬くしまったローム土に破碎された土師器皿細片の集中 (S1039・1046) が見られた。土師器皿は16C代のものを含む。S1039・1046は表土直下の、重機で動かされたコンクリート・凝灰岩切石等 (第14図) の隙間に残るような状態で検出された。また、古代以前の堅穴住居跡群は S1039・1046 等の載る「面」によって大きく削平されていた。この状況からは、地表面を切り下げる整地の後、土師器皿細片を混ぜつつ建物等の基壇 (S1039・1046はその残骸) を作り出した可能性が考えられる。建物の実体は想像の域を出ないが、後の住吉神社本殿の建立が1702(元禄15)年とされることから、その前身の建物等も想定される。

その他、S1000の脇に積まれた礫がある。「手水」あるいは「天神様の祠」(本章第10節を参照)に関連するものか。また、神社移転に伴う廃材等を埋めた大規模な廃棄穴 (S1000～1003・1005・1018等) が見られた。廃棄穴には床面にバケット痕が残され、また遺構・地山土が一抱えもあるようなブロックで混入した。重機で一気に掘られ、かつそのまま廃材等とともに埋め戻されたのであろう。埋土からは主に古墳時代以前の大量の遺物の他、鳥居の残骸等が出土した。

1-1-2. 石垣・石段・鳥居

石垣は神社正面に築かれ、石垣中央に境内へ上がる石段が配置される (第15図)。石垣構築は南西に向かって緩く下がる斜面を里道に沿って最大で旧地表下1.8mまで大きく切り出すことから始まる。次いで、石垣最下段の位置に浅い溝状遺構 S1311を設け、大人拳大の川原石を敷く (図版32-1)。石垣は砂岩礫で積まれ、その積み方は下石の間に上石を斜めに落とし込む谷積みである。また、隅石には直方体に近い凝灰岩切石を用い、その長辺と短辺を互い違いに積み上げる算木積みに近い工法が採用される。石垣表面側は川原石の曲面や平面を活かして平滑にする意図が働いており、

積んだ結果はみ出した凸部分についてはハツリ (打ち割りを指す方言) が認められた。ハツリに伴う「礫片」がA区表土中より出土し、鉄錘の固着も見られることから、ハツリは鉄製工具で進めたと推測される。興味深いのは、石垣頂部を水平にする工夫である。地山の傾斜にあわせて、低い位置では積み段数を増やし、部分的には小振りの平石を横置きしつつ石垣頂部の水平を保っている。石垣最上段は凝灰岩製切石である。石垣の築造時期は、石積み手法や石垣の裏込め S1021の年代観を根拠とすれば、古く見ても明治30年代である。

なお、神社境内西の崖面にも丸く描った川原石を積んだ石垣が存在した (図版32-5)。丘陵下の水田と集落を結ぶ道壁面の崩落を補修するもので、当初よりコンクリートで石の隙間を埋めている。少なくとも神社正面の石垣とは別機会に構築されたものであろう。

石段は里道より4段上がって踊り場、5段上がって境内となる。最終的に、石垣・石段の撤去を重機で進めた際、境内下の石段下より凝灰岩製石段5段分が現れた (図版31-6)。断面の観察からは、上から3段目がずれる他は全て凝灰岩製石段を基礎にコンクリートを貼て新たな石段を設けたとわかる。同様に、踊り場下4段分も凝灰岩製石段を基礎とする。凝灰岩製石段は上面が磨り減り凹面となっていた。石段の両脇は、石段に合わせて凝灰岩製の角柱状石と川原石で美しく造作されており、人の往来で傷みの激しい石段本体部分にのみコンクリートを貼っている。石段の最下段両脇には鳥居基礎が検出された。

鳥居① (S1028・1170)・鳥居② (S1169・1170に付随するような小穴 (SNo.なし))・鳥居③ (S1034・1079) がある。鳥居構築順については、切り合ひ関係より鳥居①は鳥居②より新しい。規模が小さい鳥居③は鳥居①②を遡る鳥居基礎あるいはその付随物のものの可能性がある。鳥居①のうち S1170は根石が残っていた。根石は、まず土坑中央に直径40cm大の川原石1点を据えその周りに梅花状に同じサイズの5点の川原石を並べる。川原石の上には白色粘土や最大径20cm大の川原石を積み、鳥居の基礎としている。これと対になる S1028では川原石等は出土していないが、わずかに白色粘土を含んでいた。

1-2. 第二次世界大戦関連の遺構

1-2-1. 防空壕

結果的に防空壕 S2138 となった遺構は里道脇のB1 区南端にある。重複して設けられた確認調査トレンチ T108 より近現代遺物が大量に出土したため、当初、ゴミ等の廃棄穴と認識していた。本調査では、S2138 周辺にも高密度に古墳時代遺構等が分布すると判断したため、近現代遺物を除去しつつ S2138 を掘り下げていった。防空壕自体は現在の里道下にもわずかに延びております（調査せず）、正確な規模は不確定ながら一辺およそ 5m・残深最大 1.5m を測る大きなもので、立った状態の大入 50 人近くが一同に入ることも可能であった（図版 33-5）。

入り口は里道寄りの西側にあったと見られ、削り出された階段と見られる大小のテラスが 5 段確認され、その先は広い踊り場となる。踊り場から北に下がると、床面円形で直径 1m 前後の小さな空間が 2 箇所ある。同じく南に下がると最深部となり、床面方形の 2m 四方（江戸間で 2 歳分ほど）の踊り場北よりも広めの空間となっていた。

里道にかかる壁面で観察すると、床面上に鉄板とみられる錆層が見られ、トタン板等であった可能性がある。床直上には完存品の陶器 2 点が残されており、防空壕として機能していた時期に伴うと考えられる。埋土上層からは統制陶器等も出土している。

現在の土地利用状況から見ると、防空壕の位置は里道と煙突の境にある。埋土の状況からは、防空壕はある程度埋まつた後（人為的なものは不詳）は窪地であったと見られ、大量の生活雑器・瓦等が投棄されていた。特に埋土上層に新しいものが多く、年代の判別できるものとして最新例は 1960 年代以降発売の「コカコーラ」瓶、1949～1963 年に「カゴメ株式会社」に社名変更するまでの 15 年間操業した会社「愛知トマト株式会社」のエンボスあるケチャップ瓶、昭和 27（1957）年銘の 10 円硬貨等が挙げられる。

1-2-1. 爆弾炸裂痕

遺構として明確であったのは B1 区北半の S3217 のみであるが、A・B1・B2 区では艦載機より投下された爆弾のプロペラ部分と見られるものが、最小 8 発分出土している。これらはいずれも整理作業過程で確認でき

たもので、遺構埋土や包含層中にめり込んだ状態で出土していたのである。出土分布をグリッド別に見ると、C11 で 2 発・E14 で 2 発・E17 で 1 発・G18 で 1 発・B1 区北半で 2 発・表採 1 発であり、あたかも B1 区を西から東へ向かって斜めに横切ったような分布を見せていている。この他、機銃弾や薬莢もいくつか出土した。

1-3. その他の遺構

明治時代の地籍図を元に作成した土地利用図（第 26 圖）に現れた区画は、近世（場合によっては中世）まで遡る土地利用の変遷の上に成り立っていた（詳細は第 7 節を参照）。

上記以外で屋敷地に直接関連する遺構として、まず、現在の里道に平行して溝状遺構 S4740・4825 が走る。S4740 は傾斜に沿って西に下がっており、C11 グリッド付近には高低差 40cm の明瞭な段差も見られた。残深最大で約 60cm である。排水溝の可能性がある。S4825 はごく浅く、S4740 と現在の里道の間に断片的に残存する。現在のように整備される以前の里道である可能性が高い。

この他、基礎の深い構築物（防火水槽 S4945・排水中ゴミ等の沈殿井 S4736・電信柱 S7772・コンクリート製井筒の井戸（図版 33-6））等がある。

集団移転前後の遺構として、B1 区の南寄りにはスギ植林等に関連すると見られる、重機等による廃棄土坑 S2036・溝状遺構 S2166 等がある。S2166 は土地区画に沿って走り、瓦や礫の集中が 4 箇所見られた。また、特に瓦等の廃棄物を処理した穴もいくつか見られ、防火水槽 S4945 にも大量に瓦が投棄されていた。（藤木）

2. 遺物（第 219～232 圖）

S1021 出土遺物

近世後半～近代の多量の土器・陶磁器が出土し、その総重量は 23.9 kg である（4203～4241）。特に、近代（19C 後葉）の瀬戸・美濃と肥前系磁器食器類は、比較的まとまりをもち、残存状態も良好であった。瀬戸・美濃産磁器は染付端反碗（4212）2 個体、木型打込皿ならびに銅版転写で金色文様の小壺（4238）がある。打込皿に獅子柄（4219）4 個体（組物）・鳥柄（4220）7 個体（組物）、小壺 5 個体（組物）である。「大日本

美濃国土岐郡定林寺村 後藤新八謹製」と解説可能な銘文を持つ小坏もある。肥前系磁器は、コバルトの手描・型紙転写・銅版転写で文様を描く染付類、クロム青磁と色絵付および白磁がある。コバルト手描は碗(4226)8個体(組物)と皿(4230)と鉢(4223・4224)およびプレンジである。鉢(4224)は焼き継ぎ痕が認められる。コバルト型紙転写は、碗(4231・4232)12個体(組物)、半簡碗(4233・4234)7個体がある。コバルト銅版転写は碗(4235)4個体、半簡碗(4236)および小坏(4237)2個体、鉢の蓋(4239)である。小坏の意匠に風景画と漢詩もある。クロム青磁は碗(4240)、半簡碗(4245)5個体(組物)と仏具香炉である。色絵付は小坏(4210)3個体、碗(4227)と鉢(4225)がある。小坏見込みの意匠には和風美人面や五重の圓線もある。白磁は小坏12個体である。そのうち1個体は見込みに花文の浮き彫りを持つ。食器類の他に磁器製人形がある。人形は和服(振り袖)姿で团扇を胸に抱く女性像と考えられる。頭部は欠失し、外表に着色の一部が僅かに残る。底部に小さな差し込み穴を持つ。土製品は、動物頭部と思しき佐土原人形(4242)、瓦類(4243・4244)がある。瓦当面(4243)の連珠文中に「カ」とある(未図化分は図版174)。(今塩屋)

石器・石製品(4279~4283)は、砾石(4281~4283)が金属光沢ある底面等特徴的である。近代以前の石器も混在していた。また、石灰岩磧約1kg(6+α点)分が出土した。特に加工等はないが、表面が粉を吹いたように風化している。(藤木)

ガラス製品(4389~4397)には医療用薬瓶・蠅取瓶・ランプホヤ・ランプ傘等がある。吹きガラスから機械製瓶に変わる過渡期の様相を含む。

金属製品(4187・4338~4342)は、用途不明のベルトバックル状の製品・銅製煙管雁首・鉄製延煙管羅子・鉄製延煙管・銅製簪・鉛製弾丸・銅錢といった各種生活用具等がある。(竹田)

この他、ハマグリと見られる二枚貝や大量の炭化物も出土した。(藤木)

S2138 出土遺物

近世後半~現代にかけての幅広い時期の土器・陶磁器が出土した(4245~4274)。4251・4254は床直上出

土。4251は、肩口付近に1つだけ円孔が開く特殊形態である。遺構の時期に近い遺物として統制磁器(4259・4264・4266~4268)があり、高台内面に数字(4259・4264・4267)が残る。また、近現代の遺物として、土製の火鉢(4269~4272)があり、4個体分が出土した。蓋(4273)とサナ(4274)で一式揃う養蚕関係の遺物と推測される。その他、埋土中から大量の瓦と焼瓦が出土した。瓦は軒平瓦・棟瓦(無文・唐草文)、軒丸瓦(連珠巴文)・丸瓦等である。肌色と濃ネズミ色のものがある。平瓦には「妻町上田製」「佐土原本下製」「松田製」の銘が認められた。表記方法は横書き右読みなので近代に属すると考えられる。(今塩屋)

ガラス製品(4398~4413・4440)は化粧品・医療薬・食品・インク・ランプ部品用等、大量に出土した。

金属製品(4198・4343~4348・4349・4350)は煙管吸口・バリカン・ベンチ・和庖丁といった生活用具、鉄鍔等の農具関連や鰐鉢、寛永通宝がある。踏鉄については、岡富集落の古写真を見ると馬小屋が写っていることや聞き取りでも馬を飼っていた証言があることから、現地で使用・廃棄されたものと考えられる。(竹田)

この他、石器等も出土したが、その多くは遺構に直接伴うものではない(4284~4289)。(藤木)

この他、当該期の遺構出土あるいは単独で当該期と判別できる陶磁器・石器や石製品(4290~4337)・金属製品(4351~4388)・ガラス製品(4414~4439・4441~4453)がある。陶磁器では、S2036でゴム印磁器皿が11個体分出土した。全て瓔珞文・吉祥文(松鶴鶴)の同一文様で昭和初期に属する。花瓶1個体と共に一括廃棄の出土状況を示していた。(今塩屋)

石器・石製品では、S4911の板碑転用品(4295)・S2166の火打石(4324・4325)・火打石分割磨(5438~5440)・硯(4326)・磨面ある石英製礎器(4310)がある。4310は類例を開かず、類石冠と一連のものでないかという声もあるが定かでない。(藤木)

4365~4367は艦載機より発射された12.7mm機銃弾と薬莢である。薬莢4366・4367は同規格であるが、製造地を示す底部の刻印が「DM」「WT4」と異なる。その他、戦争関連のものとして、爆弾羽部が最少で8発分出土している(図版181-5)。

4431～4438は目薬瓶である。4431～4433は初期の目薬瓶である。箱詰めされる際に、付属するガラス管を収納する部分を設けるために角の一辺がへこむ。4434・4436～4438は「両口式点眼瓶」である（※1）。第二次世界大戦中のゴム不足による、4435のような「一口タキ点眼瓶」も見られる。正面に「組合目薬」のエンボスが施される（※2）。この他、4450・4451はニッキ水瓶である。4451には「三勇士」（文字）と「兵隊の顔3人分」（図柄）のエンボスが見られ、上海事変の昭和7（1932）年に戦死した「爆弾（肉弾）三勇士」をかたどったものである。（竹田）

※1 両口式点眼瓶は昭和6（1931）年に開発され、上部にゴムのポンプ状の部品が装着され、それを押すことによって、薬液を点眼するものである。昭和30年代で現在のプラスチック製に置き換わり、ガラス管式の目薬に比べ、衛生的になった。

※2 組合とは、昭和16（1941）年1月に結成された全国購買発組合連合会を指す。

第9節 その他の遺構・遺物

時期不詳遺構出土、包含層出土、表探資料のうち、これまでの記載より洩れた資料について報告する。

1. 遺構（付図）

S1098 B2 区検出の大形土坑。埋土は非常に硬質の黒色土で占められており、規模等から貯蔵穴や廻し穴等の可能性も考えたが決定打はない。埋土中にはほとんど遺物がなく、縄文時代後期土器片がわずかに出土した。S1098 を切る S1029 は縄文時代後期・弥生土器ならびに6～7C の土器片を少量含んでいるが、時期決定の根拠にまではならない。少なくとも、7C 前葉の竪穴住居跡を切るために、それ以降の土坑である。

F5 グリッドの層位横軸（SNo.なし・図版48-1） 直径3m・残深2mのたいへん大型の層位横軸である。自然層位では疊層上に載るA-Iw風化土壤（基本土層X III層）からMBO相当のVI層まで、MBO相当の上には遺構埋土等と見られる黒色土が横軸している。横軸は西に向かって倒れる。この層位横軸を切って、8C 後葉から9C 初頭の竪穴住居跡 S7242・7243・7246 が載つておらず、少なくともそれ以前の層位横軸と言え、印象としてはさらに古い時代の横軸のようでもある。層位横軸中から遺物の出土はない。なお、すぐ西隣にも層位横軸があり、一連のもの可能性がある。（藤木）

2. 遺物（第233～246図）

2-1. 土器類・石鍋

石鍋（4454～4457）は、外面に丁寧な調整痕がのこり、煤の付着が頗著である。中世～近世か。土製支脚（4458・4459）の4458は、短脚でヘラミガキを持つ。繩羽口（4460～4465）の4464・4465は、法量や胎土がその他と異なる特徴を持つ。土器片加工品（4466・4467）の4466は土師質で双孔、4467は瓦質である。不明品（4468）は移動式竈脚部の可能性がある。軒平・軒丸瓦（4499～4503）は、瓦質に近いもの（4499・4500・4502）と須恵質で焼成不良（4501・4503）がある。前者は中世～近世、後者は古代に属するか。この他、軒平瓦の瓦当面が S4966 の C3 グリッドより1点出土した。文様形態は日向国分寺の創建瓦に類する。整理過程で行方知れずとなつた。（今塙屋）

管状土錘（4469～4498）は特記すべきものについて追加図化した。4469～4478は胎土や色調、形状に類品の少なかったものである。古代から中世にかけてのものであろう。4479～4492は大形の紡錘形をした一群である。包含層中や木棺出土資料ばかりで時期の特定が困難であるが、胎土やサイズから見て古代の所産の可能性がある。4493～4495はいずれも胎土中にイネ（穀殼付き）をよく含んでおり、土錘表面に多くのモミ压痕を観察できるばかりか、規格や胎土・表面のみ褐色に焼け中の方は黒ずむサンドイッチ状の焼成も共通している。これらの特徴からは、同時生産の可能性が高い一群と言える。重要なのは、土錘表面の摩滅が進んだことで、サンドイッチの中の黒い部分が段階的に露出していることである（実測図中の網掛けは黒い部分が露出する箇所）。4493は孔内面を除いて全面摩滅し、一見、黒い色をした土錘のようである。4495はあまり摩滅が進んでおらず、両端に平坦面（以下では端面と呼ぶ）が残り、また、褐色に焼けた表面が大きく残っている。4494は両者の中间で、中の黒い部分の露出が増え、端面も失われている。換算すると、4495～4494～4493の順に使用による摩滅が進んでゆくと言える。4496・4497はヘラ記号のあるもの、4498は孔内面に薬束風の压痕が残るもので、生産者や生産方法を知る上で興味深いものである。（藤木）

2-2. 石器・石製品

敲石（4504～4633）・凹石（4634～4637）・磨石（4638～4658）・円錐（4659～4664）・扁平錐（4665）は主に繩文～古墳時代のもの、砥石ならびにその未製品（4666～4693）・台石（4694～4727）は古墳時代以降のものが主であろう。台石は主な建物構造として堅穴を採用しなくなった中世以後に屋内用で用いられた作業台等の可能性も考慮すべきであろう。硯（4728・4729）は側面が垂直に立ち上がり近世末以降のものであろう。4728には裏面に「赤間硯」の刻字がある。4729は欠損後に裏面を用いた砥石に転用される。おはじき（4730～4738）は白いもの（石英）・濃い緑色で大変つややかなもの（蛇紋岩）・灰黒色のもの（頁岩）がある。図化したのは比較的扁平で形の整ったものとしたが、これ以外にも同質の石材を用いた玉石がいくつか出土している。4736のみ端正であることから黒基石の可能性がある。二枚貝の化石（4739）は玩具あるいは珍品として拾われたものか。輕石製品（4740・4741）はいずれも調査区西側の旧宅地での表採品である。4740は垢擦りのようなものか。4741は火を入れる容器の破片であろう。石盤（4742）は最少2枚分ある。石鍋転用品（4743～4745）には石鍋補修具や温石と見られるものがある。火打石関連（4746～4767）では、使用済みで廃棄されたものの他、その原石・分割砾・打ち欠けた剥片等、火打石の使用過程を示すものが出土した。4746～4755は石英製、4756・4757は水晶製、4758～4765はチャート製、4766・4767は玉髓製である。未図化ながら、多數の石英砾・質の良くないチャート砾、少數ながら水晶砾も出土しており、火打石用に拾われたものの可能性がある。これらのうち、水晶砾（4757）ならびに火打石用に分割されたと見られる砾をいくつか図化した（4765・5437）。4767は使用過程で生じたかけらである。4768は破損著しく判別しがたいが、石仏であろうか。焼き臼（4769）は欠損著しいながら、回し手の杭孔・軸孔をみるとることができる。古墳時代堅穴住居跡S4829中より出土したが、おそらくは埋土中に掘り込まれた後世の遺構を見逃したものであろう。角柱（4770）・笠石（4771）は住吉神社に関連するものか。凝灰岩製の石製品とその残骸は未図化ながら遺跡内各所より出土した。

この他、石灰岩礫が近代の石垣裏込めS1021以外にS2143・S7772・S3206より各1点ずつ出土した。S1021例と同じく特に加工等ではなく、表面が粉を吹いたように風化している。また、土壤中に元から含まれているのか小粒の輕石がいくつかの遺構・包含層中に見られた他、小粒のものから15×10cm大ほどの輕石もいくつか出土した。輕石の中には丸く角の取れたもの等もあったが、図化した3423・4740・4741・5214・5215以外に使用痕あるものは見られない。（藤木）

2-3. 金属器

鉄製鐵・刀子・鎌の他、鉄滓・鉄製の爆弾破片と見られるもの・鉄製鏃・銅製の精尻かと見られるもの（4772～4785）を図化した。鉄鎌（4779）は柄の装着部分が折り曲げられている。（竹田）

2-4. 自然遺物

炭化材・炭化種実をはじめとした炭化物、獸骨・魚骨・甲殻類の一部、貝が各所より出土した。炭化材・炭化種実については第VII章、自然科学分析で詳述している。獸骨・魚骨・甲殻類の一部、貝の内訳については第19表（図版207・208）に一覧した。実体顕微鏡（Nikon SMZ-2T）で観察し、わかる範囲で同定を進めた。獸骨ではウマの歯（劣化著しい）と推測されるものが7C中葉～後葉の堅穴住居跡埋土中・8C後葉～9C初頭までに進められた造成土中より出土した。その他、破碎著しく同定困難な獸骨・魚骨・甲殻類が甌や土器埋設炉の埋土やそれに伴う土器内部に充填していた土壤より回収された。魚骨は椎骨等の存在により推定できたが、種の特定にはいたっていない。椎骨のサイズや遺跡立地からは中小形の川魚がイメージしやすい。甲殻類はサワガニが調査区内を移動する様子が見られたため、それらの死骸が土中に混入した可能性も捨てきれない。S4736・4945例は近代以降である。

なお、『図面編』第270図に掲載した遺物は、本来のレイアウトから洩れ、報告書脱稿直前に追加した補遺資料である（5437～5444）。（藤木）

第10節 集落空間に関する聞き取り調査

1. 目的

宮ノ東遺跡の位置する段丘面は約 54,000 m² (5.4ha) の広さがある。そこには、昭和 50 年頃までの集団移転まで集落（岡富村）が存続しており、発掘調査では集落を構成する住吉神社の一部や宅地・畠地に伴う各種造構を確認することとなった。そこで、岡富村に実際に住んでおられた方やその関係者より聞き取り調査を実施し、発掘調査のみでは知り得ない情報の収集に努めた。

2. 聞き取りの成果

2-1. 岡富村全体に関するもの（第 26 図）

話者は集団移転前まで岡富村に住んでいた昭和 12 (1937) 年生まれの男性である。今回の宮ノ東遺跡の発掘調査作業員であり、日々の会話の中から得た情報は遺構等の性格を推す上でたいへん有効であった。また、小字よりも小さい単位の通称を知ることができた点も貴重である。聞き取り内容は多岐にわたるが、以下の地図ア～地図ソの情報を整理できる。

- 地図ア** この辺りを指して“ホンゲジ” (=ホンデジと聞こえる時もある。日蓮宗本蓮寺か) という。死人が出ると、塚の上に棺を載せ、塚の周囲をぐるぐる踊りながら回った。墓は集団移転で現在の西都市岡富へ移した。
- 地図イ** 通称“チリ(ン)ヤマ”。ごみを捨てていた。チリ(ン)ヤマ南側の宅地一帯を指して、通称“ハタケナカ”。
- 地図ウ** 山は村のもの。山の上には道が続き、その先に畠があった。畠は土採りで失われた。集団移転後も、山菜取り等には入っている。
- 地図エ** 山へ上がる道。道の両側を通称“マツバ”という。この家ではウシを飼っていた。
- 地図オ** この一帯は通称“ミヤノマエ”。手前が屋敷地で、奥が畠。屋敷地内には“オリヤ”(母屋)・風呂場・便所・“ウマヤ”(馬屋)・養蚕室・堆肥小屋・物干し場・井戸・“ウジガミサマ”(氏神様)・ウシ用のサイロ・井戸があった。“ブゲンシャ”(金持ち)が住ん

でいた。道路脇に防火用水槽がある。畠にはクワやタバコを植えていた。移転後のスギのうち、幹回りの太い箇所は家部分、細い箇所は畠だ。

地図カ

住吉神社。建物配置は現住吉神社と同じ。参殿の手前は広場になっており、野球をしていた。学校が開かれたこともあった。本殿等の移転時はマスクをして夜中に運んだ。鳥居はクレーンで吊したが折れたため、神社境内に埋めた。神社の南東角の石垣の脇を歩くと頭痛がすると言われていた。

地図キ

宮司の家。神社との境は土手になっており、一箇所、炭焼き窯があった。

地図ク

“サコンミチ”(道)。“火の用心”などで見回っていた。壁はマムシの巣。サコンミチを下りたあたりでは湧水がある。

地図ケ

(新富町) 竹渕につながる隧道が開口していた。第二次世界大戦中の空襲の時は、隧道に避難していた。

地図コ

兄弟が住んでいた。兄は第二次世界大戦の機銃掃射で亡くなかった。(開口する 3 箇所の横穴について尋ねると、)覚えがない。防空壕ではない。

地図サ

“イリフネヤマ” “フネツカ”と呼ぶ。おそらく舟を祀っている場所ではないか。よくわからない。周囲は膝までつかる水田だったが、使わなくなつて湿地になった。通称“サコダ”。ここから流下する水は、下手の水田用水であり、現在も水田所有者でドバ撒らいを実施する。

地図シ

村と下の大きい道をつなぐ道。道を下りたところには集会所があった。通称“コバ”。現在の登り道は、車が入りやすいように新たに削り出したもの。

地図ス

小さな墓地があった。

地図セ

(地籍図上では旗地状の宅地であるため何であるか伺ったところ、)畠であった。一帯を“テランドン”と呼ぶ。家等が建っていた記憶はない。

地図ソ

“シャテキバ”(射的場)と呼ぶ。

本人の同行を得て聞き取りに沿った現地踏査をしたところ、**地図ア**の“ホンゲジ（ホンデジ）”一帯には改葬から漏れた墓台座が多発埋もれていた（図版 48-7-8）。 “ホンゲジ（ホンデジ）”北の斜面には段切りされた箇所があり、無縫塔・五輪塔が散在していた。寺域と南側の低地をつなぐ石組階段も確認された。**地図イ**は土手状の高まりとなっており、旧石器時代～近現代までの遺物が回収できた。**地図ウ**の土塹りの最中に経筒が採集された（第 II 章を参照）。**地図エ**は竹林化しており、おぼろげに踏み跡が見える程度であった。道の脇には石臼が転がっていた。**地図オ**は A 区に相当する。**地図カ**の埋めた鳥居は発掘調査で確認できた。**地図キ**では近現代の遺物が地表面に散布する。**地図ク**は、調査着手時、その大半が土砂で埋まっていた。**地図ケ**の隧道の開口部は現地ではわからなかつたが、防空壕と見られる宮崎層群を掘り込んだ横穴が 1 箇所開口していた。**地図コ**には屋敷に伴うと見られる地形の変更が見られる。**地図サ**の“イリフネヤマ”“フェツカ”は、現在、周囲と異なる樹木が生える。土盛等は見られない。**地図ス**は現在、肥料屋となる。**地図セ**は寺か御堂の可能性がある（第 V 章第 3 節に関連報告あり）。**地図ソ**は C 区の尾根にある。正面は有峯城跡である。

2-2. 住吉神社に関するもの

住吉神社の創建は、移転後の碑文によると「第 13 代成務天皇の御代に岡富村参拾町の總鎮守として御鎮祭される。当社は創建以来、一つ瀬川左岸岡富村の神山に奉祀されて」おり、「現在の本殿は、元禄 15 年 2 月 7 日の建立」という。

住吉神社の宮司さんより、神社移転前後の状況等について伺い、B2 区調査の参考とした。内容は以下の①～⑩のとおりである。

- ①神社の構成は、正面石段から拝殿に向かって左手に手水、その北隣に天神様の祠、正面に拝殿、その奥に本殿、拝殿と本殿の中ほど右側に小さな倉庫があった。
- ②神社の移転前の状況を手書きの図面で防衛施設庁に提出した。
- ③神社部分は、移転後にブルドーザーで整地した。

- ④本殿の部分は建物基礎の下に砂利を敷き詰めていたが、ブルで整地の際、基礎もろとも壊れてしまったかもしれない。
- ⑤現在の住吉神社は、拝殿・本殿を含め建造物は全てのものを移転した。残ったのは壊れた基礎と鳥居くらいである。
- ⑥現在も残る神社西側の土手は、ほぼ当時のまま。ややくほんだ所が宮司宅への通路である。
- ⑦正面石段から拝殿に伸びる参道の両側は藪だった。参道には礎石を組み歩きやすくしていた。
- ⑧宮島厳島神社に奉納された桶の大木は、本殿の裏に生えていた。
- ⑨神社東側の追道に面した石垣については存在自体を知らなかつた。
- ⑩神社内に「刀」を埋納（時期は不詳）したと聞いている。

聞き取り①～⑩に関連する調査成果は、第 II 章・第 IV 章第 8 節等に掲載している。

（藤木）

第V章 発掘調査の記録（B1区北半）

B1区北半は、北に向かって開口する谷頭にあたり、ここを境に南東にはA・B1・B2区の平場が広がり（第IV章を参照）、北西にはC区（第VI章を参照）へつながる山となる。

古代以前の集落は、B1区・B1区北半の境界付近で密度がかなり低くなることから、B1区北半には広がっていないと見られる。B1区との境界に位置する縄文時代の堅穴住居跡が弥生時代以降の削平を免れた点もその傍証となろう（第IV章第2節を参照）。また、B1区からB1区北半にかけて、8C後葉～9C初頭に大規模な地崩れが生じ、再び旧状に戻すような造成が行われた（第IV章第5節を参照）。

第1節 中世前半の調査

1. 遺構（第16図・付図）

造成を除いて、古代以前に遡ると見られる明確な遺構はない。

中世前半の遺構はA・B1区につながる平場に残され、道路状遺構・溝状遺構が走る。道路状遺構（S3218（3226含む）・3219・3220・3227・3409・3410）は少なくとも6条重なり合って検出された。切り合い関係が激しく、任意に設けた土層断面のみで認識し得た硬化面等もあることから、道路状遺構は実際には6条以上存在したものと見られる。溝状遺構（S3250（3268含む）・3216・3208・3370）は道路状遺構と重複関係にあり、硬化面を持たないあるいは検出しえなかつた道路状遺構であろう。全ての道路状遺構・溝状遺構はC区につながる山の傾斜線に沿っており、安全面等の問題により完全には掘削できなかったものの、段丘崖下へと通じていたと見られる。

道路状遺構は、床面付近の遺物から判断して12C後半には開削され、埋土中遺物からは遅くとも近世後半まで造り変えながら存続していたと思われる。波板状ピット列を作うものや、階段状のピットを作うもの、平坦な硬化面を作うもの等が検出された（図版41-2）。道路状遺構・溝状遺構の埋土中には土器等の遺物の他、小砂利や礫も流れ込んでいた。その1つ、道

路状遺構 S3218 埋土中で土器壺・皿等の集中箇所 S3226 がある。土器壺・皿等は出土状況から見て埋没過程にあった道路状遺構 S3218 へ一括投棄された可能性が高い。炭化物も多く見られたため、フローテーションしたところ数多くの炭化材・種子を回収できた。この他、道路状遺構 S3220 床の硬化層にも炭化物が多く見られ、これもフローテーション対象とした（詳細は第VII章を参照）。

なお、道路状遺構・溝状遺構は古代の造成土も地山としているため、埋土中には旧石器時代～古代までの遺物が大量に含まれていた。また、調査過程で、古代の造成土を認識する以前に遺構として記録したものいくつかについては、造成土中の黒色土等のブロックを誤認した可能性を残す。（藤木・高木）

2. 土器・陶磁器（第247・248図）

S3227（4809） 中国産白磁碗（4809）は、遺構底面からの出土。大宰府分類のV-4d類（12C中～後葉）である。その他に土器壺/皿・東播系須恵器鉢・備前焼甕が出土した。

S3219（4786～4808・4810～4824） 土器壺/皿・東播系須恵器・常滑焼・中国産白磁・土製品が遺構埋土の中～下層を中心に出土した。特に土器壺は約10.7kgと大量である。土器壺（4786～4792）は、壺A：口径16.0cmで直線的な口縁部と平坦な底部をもつ（4792）、壺B：口径13.5～14.5cmで底部が丸みを帯びる（4791・4787）、壺C：口径12.5～13.5cmで器形全体が丸みを帯びる（4786・4788～4790）の3群がある。壺A～Cとも底部調整は回転ヘラ切りである。土器壺（4793～4798）は、皿a：口径9.5～10.0cmで器高が低くて扁平（4793・4794）、皿b：口径8.5～9.0cm（4795～4798）で丸みを帯びた器形である。土器壺/皿の時期は、壺Aが12C前～中葉、壺B・皿aが12C後～末葉、壺B・皿bが13C初頭～中葉と考えられる。壺B・皿bは土器壺出土量の全体の約70%を占める（第7表）。東播系須恵器片口鉢（4799～4801）/甕（4802）は12C末葉～13C代か。常滑焼甕（4803・4804）は13C